

第5章 自然科学分析

第1節 山ノ下遺跡自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、山ノ下遺跡で検出された掘立柱建物の時期と木材利用を検討するために、柱材の放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。また、調査区および周辺の古環境に関する情報を得ることを目的として、堆積物を対象として、層相解析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

第1項 柱材の年代と樹種

1 試料

試料は、ピットから出土した柱材12点である。ピットの中には、掘立柱建物を構成するものと、所属不明のものがある。掘立柱建物を構成するピットでは、掘立柱建物12(746ピット)、掘立柱建物2(31ピット)、掘立柱建物4(170ピット)、掘立柱建物13(705ピット、723ピット、725ピット)がある。年代測定は、建物の所属が分かるピットのうち、掘立柱建物12の746ピット、掘立柱建物13の725ピットを除く4点について実施し、樹種同定は12点について実施する。

2 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料を観察し、ピンセット等を用いて、表面付着物を物理的に除去したあと、塩酸と水酸化ナトリウムで洗浄し、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(AAA処理)。

処理後の試料を燃焼させて二酸化炭素を発生させ、真空ラインにて精製する。精製した二酸化炭素に鉄、水素を加えて高温で還元し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシェウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5.568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(yrBP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従うが(Stuiver and Polach, 1977)、曆年較正に関しては一桁目まで表した値も記す。なお、曆年較正是、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.10(Copyright 1986-2016 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。較正に用いる曲線はIntcal13(Reimer et al., 2013)である。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。

(2) 樹種同定

剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代および暦年較正結果を第49表、第169図に示す。同位体効果の補正を行った測定結果(補正年代)は、掘立柱建物2を構成する31ピット試料2が^{890±20} yr BP、掘立柱建物4を構成する170ピット試料3が^{1,500±20} yr BP、掘立柱建物13を構成する705ピット試料4が^{1,050±20} yr BP、掘立柱建物13を構成する723ピット試料6が^{1,030±20} yr BPである。また、暦年較正結果(2σの確率一位)は、掘立柱建物2試料2が^ccal AD 1,147–1,215、掘立柱建物4試料3が^ccal AD 534–620、掘立柱建物13試料4が^ccal AD 967–1,024、掘立柱建物13試料6が^ccal AD 980–1,029である。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を第50表に示す。柱材は、針葉樹2分類群(スギ・ヒノキ科)と広葉樹1分類群(クリ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・ヒノキ科(*Cupressaceae*)

いずれも保存状態が極めて悪い。軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかからやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔組織のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1~10細胞高。

いずれの試料も、晩材部の幅が狭いことと樹脂細胞が版細部付近に見られることからヒノキ科と分かるが、分野壁孔が全て破損し、観察できることから細かく同定できず、ヒノキ科とした。

・クリ(Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3~4列、孔圈外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。

道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~15細胞高。

第49表 放射性炭素年代測定及び曆年較正結果

地区・遺構 試料名	種類	處理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (曆年較正用) yrBP	曆年較正結果			Code No.
					誤差	cal BC/AD	cal BP	
掘立柱建物2 31ピット 試料2	生木	AAA	-21.67 ± 0.33 890 ± 20 (889 ± 21)	a	cal AD 1,052 - cal AD 1,080	cal BP 898 -	870 0.368	IAAA- 161903
					cal AD 1,152 - cal AD 1,194	cal BP 798 -	760 0.583	
					cal AD 1,198 - cal AD 1,203	cal BP 752 -	747 0.048	
				2σ	cal AD 1,045 - cal AD 1,094	cal BP 995 -	856 0.339	IAAA- 161903
					cal AD 1,120 - cal AD 1,141	cal BP 830 -	809 0.090	
					cal AD 1,147 - cal AD 1,215	cal BP 863 -	735 0.571	
掘立柱建物4 170ピット 試料3	生木	AAA	-24.03 ± 0.42 $1,509 \pm 20$ (1,504 ± 24)	a	cal AD 515 - cal AD 592	cal BP 1,495 - 1,558	1,490 0.000	IAAA- 161904
					cal AD 434 - cal AD 455	cal BP 1,518 -	1,495 0.034	
				2σ	cal AD 469 - cal AD 487	cal BP 1,481 -	1,463 0.936	IAAA- 161904
					cal AD 534 - cal AD 620	cal BP 1,416 - 1,330	0.929	
掘立柱建物13 705ピット 試料4	生木	AAA	-24.97 ± 0.31 $1,050 \pm 20$ (1,048 ± 23)	a	cal AD 988 - cal AD 1,016	cal BP 982 -	934 0.000	IAAA- 161905
					cal AD 965 - cal AD 974	cal BP 1,045 -	1,034 0.027	
				2σ	cal AD 967 - cal AD 1,024	cal BP 983 -	926 0.973	IAAA- 161905
					cal AD 995 - cal AD 1,020	cal BP 955 -	930 1.000	
掘立柱建物13 723ピット 試料6	生木	AAA	-24.50 ± 0.19 $1,030 \pm 20$ (1,028 ± 23)	a	cal AD 980 - cal AD 1,029	cal BP 970 -	921 1.000	IAAA- 161906
					cal AD 996 - cal AD 1,025	cal BP 955 -	930 1.000	
				2σ	cal AD 1,047 - cal AD 1,125	cal BP 970 -	921 1.000	IAAA- 161906

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

2)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

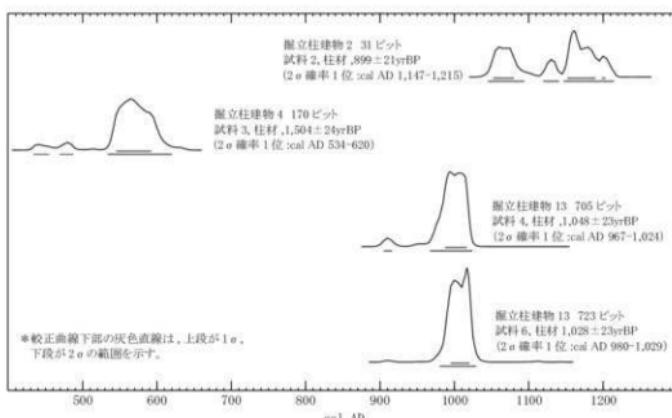
4)曆年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1 (Copyright 1986-2015 M Stuiver and P.J. Reimer) を使用し

5)曆年の計算には、補正年代に(1)曆年較正用年代として示した、一桁目を丸めた前の値を使用している。

6)年代値は、1桁目を丸めたのが慣例だが、曆年較正曲線や曆年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、曆年較正用年代は1桁目を丸めていない。

7)統計的に真の値が入る確率はa = 68.3%, 2σ = 95.4%である

8)相対比は、a, 2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第169図 曆年較正結果の比較

4 考察

(1) 年代

掘立柱建物のうち、掘立柱建物2を構成する31ピットの柱材は、補正年代が 890 ± 20 yrBPであり、曆年較正結果(2σ 確率1位)はcal AD 1,147-1,215を示す。この結果は、調査所見とも整合的である。

一方、掘立柱建物4を構成する170ピットは、補正年代が $1,500 \pm 20$ yrBPで、曆年較正結果はcal AD 534-620となり、掘立柱建物2と比較すると約500~600年古い年代を示す。柱材はヒノキ科に同定されており、測定位置や加工状況によっては、古木効果により500年以上古い値を示す可能性がある。本試料については、試料の加工状況等を再度検討しておく必要がある。

掘立柱建物13を構成する705ピットと723ピットの柱材は、補正年代が $1,050 \pm 20$ yrBPと $1,030 \pm 20$ yrBPを示し、誤差範囲内で一致する年代値を示す。これらの柱材は、曆年較正により、10世紀末~11世紀初頭頃の曆年代が得られている。掘立柱建物2よりも若干古い年代を示しており、掘立柱建物13は掘立柱建物2よりも古い時期に建てられた可能性がある。

(2) 木材利用

柱材には、合計3種類の木材が認められた(第50表、図版90)。各種類の材質についてみると、針葉樹のスギは、木理が通直で、割裂性と耐水性が比較的高い。ヒノキ科は、ヒノキ、サワラ、アヌラ等の有用材が含まれる。いずれも木理が通直で割裂性、耐水性、防虫性が高い。広葉樹のクリは、重硬で強度と耐朽性が高い。

柱材は、建物の所属が分かる資料と、所属が不明の資料とがある。建物の所属が分かる資料のうち、掘立柱建物2と掘立柱建物4は、調査区北側から検出されており、掘立柱建物2は 2×2 間の総柱建物、掘立柱建物4は庇を持つ側柱建物である。柱材は、いずれもヒノキ科に同定され、耐水性の高い木材を利用したことが推定される。また、建物の種類に関わらず、同じ木材が利用されたことが推定される。

一方、掘立柱建物12と掘立柱建物13は調査区南側から検出されており、掘立柱建物12は 2×2 間の総柱建物、掘立柱建物13は 5×5 間の大型の総柱建物である。掘立柱建物13の柱材は3点ともスギに同定された。廃絶時に抜き取られた柱も多いが、この結果からスギを選択的に利用した可能性がある。同様に掘立柱建物12についてもスギに同定された。これらの建物は、北側の調査区から検出された建物とは用材選択が異なっている。用材が異なる背景として、建物の規模の違いや、年代測定結果から

北側と南側で建物の時期が異なる可能性があること等が考えられる。

所属不明の柱材は、掘立柱建物で認められたスギとヒノキ科のほか、広葉樹のクリも認められる。いずれも強度や耐水性等の材質から利用されたと考えられる。クリについては、建物跡で認められないため、今後の調査で建物以外の柱材の可能性も含めて、利用目的の解明が期待される。

第50表 樹種同定結果

	集合遺構名	個別遺構名	取上 No.	種類
試料1	掘立柱建物12	746ピット	1010	スギ
試料2	掘立柱建物2	31ピット	402	ヒノキ科
試料3	掘立柱建物4	170ピット	400	ヒノキ科
試料4	掘立柱建物13	705ピット	1247	スギ
試料5	掘立柱建物13	725ピット	933	スギ
試料6	掘立柱建物13	723ピット	1004	スギ
試料7	-	60ピット	414	スギ
試料8	-	69ピット	384	クリ
試料9	-	118ピット	445	クリ
試料10	-	848ピット	1788	ヒノキ科
試料11	-	996ピット	1791	スギ
試料12	-	997ピット	1796	スギ

第2項 古環境に関する調査

1 調査地点

分析調査は、調査区北東部(南北断面1)地点と南西部(東西断面1)地点の2箇所の地点について実施する(第170図)。分析試料は、調査地点の断面より、発掘調査時にプラスチックケースを使用して不搅乱状態で採取されている。X線写真は各地点より採取された不搅乱柱状試料6点について実施する。花粉分析は、北東部地点の9層・15層、南西部地点の13層・15層・20層の5点、植物珪酸体分析は北東部地点の3層・4層・9層・15層、南西部地点の10層・13層・15層・20層の8層準について実施する。

2 層相解析

(1) 方法

各調査地点の断面から採取した不搅乱柱状試料6点について、肉眼およびX線写真撮影観察を実施する。試料は厚さ1cmまで板状に成形し、湿潤状態のまま管電圧40kvp、電流2mA、照射時間120秒のX線強度条件においてX線写真撮影を実施し、富士コンピュータドラジオグラフィ(FUJIFILM computed radiography)によるデジタル画像化を実施した。撮影・デジタル画像化は公益財団法人元興寺文化財研究所の協力を得た。なお、X線写真では礫や酸化鉄など密度の高い物質が明色(白色)を呈し、有機質に富む堆積物や植物遺体など密度の低い物質が暗色を呈する。

(2) 結果

各調査地点の試料の昼光写真およびX線写真を図版91・92に示す。調査地点の堆積物は、いずれも土壤生成作用が進行している堆積物からなり、初生の堆積構造は認められない。ここでは、肉眼およびX線写真の観察結果に基づいて層相変化について記載する。層名については、発掘調査時の層名に基づく。

・北東部地点

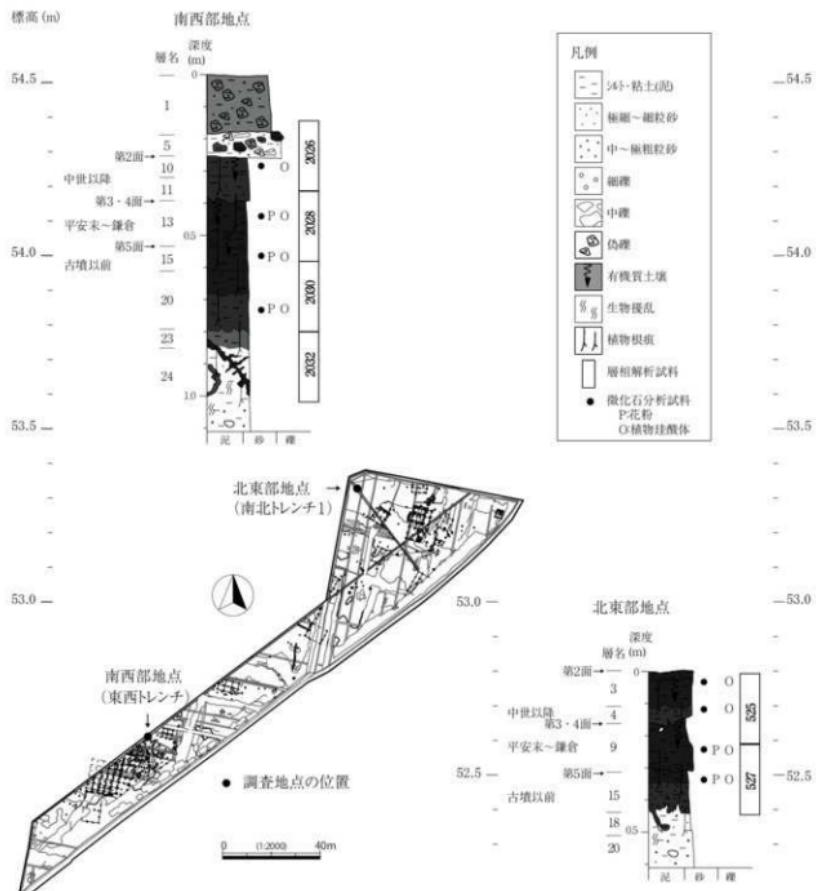
15層：暗褐色～黒褐色を呈する中粒砂混じり砂質泥、極粗粒～中粒混じり泥質砂の積層からなる。生物擾乱が著しく、初生の堆積構造は認められず、見かけ上は塊状構造を呈する。土壤生成作用が進行しており、腐植が集積している。ただし、仔細にみると、泥がちな層準と砂がちな層準が積層している状況が確認される。この状況はX線写真で比較的明瞭で、砂がち層準は明色、泥がち層準が暗色を呈している。上位層準から連続する幅1～2mm程度の根成孔隙が分布する。

9層：黒色を呈する腐植質砂混じり泥からなる。生物擾乱の影響を強く受けしており、葉理構造など堆積構造は認められず、塊状構造を呈する。土壤生成作用の影響を強く受けしており、腐植を多く含む。X線写真では相対的に暗色を呈しており、密度の低い堆積物(土壤)からなることが確認される。ただし、最上部2cm程度は下部に比較して明色を呈している。肉眼観察では層相に変化が確認されないことから、密度が高まるような影響(例えば、人間活動に伴う圧密など)を受けている可能性が高い。

4層：黒褐色～暗褐色を呈する腐植質砂質泥からなり、下部は砂がちである。細礫が僅かに混じる。下位層との層界は漸移的で不明瞭である。生物擾乱の影響を強く受けしており、葉理構造など堆積構造

は認められず、塊状構造を呈する。X線写真をみると、写真右側は上位層準からの生物擾乱の影響を強く受けしており、根成孔隙周囲の鉄分の沈着などにより全体的に明色を呈するが、左側では下部から上部にかけて暗色化している。

3層：暗褐～黒褐色を呈する細�・極粗粒砂混じり腐植質砂質泥からなる。下位層との層界は比較的明瞭である。生物擾乱の影響を強く受けしており、葉理構造など堆積構造は認められず、塊状構造を呈する。上位層準から連続する、垂直方向に伸びる幅1mm以下の根成孔隙が多数分布する。また、幅1cm程度の斜め方向に伸びる根成孔隙も確認される。土壤生成作用が進行しており、腐植が集積している。X線写真では、本層上部2cm、下部1.5cmの垂直範囲で相対的に明色を呈する。この明色



第170図 調査地点の層序・資料採取位置

を呈する層準には砂の含量密度が高く、土壤生成作用を受ける以前は成層していた可能性がある。

・南西部地点

24層：黄褐色を呈する細礫・極粗粒砂混じり砂質泥からなる。塊状無層理である。いわゆるロームからなる。樹木根とみられる根成孔隙の発達により著しく擾乱されており、偽礫状を呈する。また、上位層由来の腐植質堆積物で充填されている根成孔隙も確認される。X線写真では、根などの生物擾乱の影響を受けていない領域は均質な密度を示し、明色を呈する。

23層：暗灰黃～暗灰色を呈する細礫・極粗粒砂混じり砂質泥からなる。下位層との層理面は不明瞭で漸移的である。上部はやや腐植を含む。X線写真では、下部から上部に漸移的に暗色化する。比較的均質で明暗のコントラストの変化は小さい。

20層：暗褐色～黒褐色を呈する腐植混じり砂質泥から腐植質砂質泥からなる。下位層との層理面は不明瞭で漸移的である。土壤生成が進行し、上部にむけて腐植の集積が堅調となり、上部5cm程度の垂直範囲で粒團構造が確認される。X線写真では、肉眼観察で確認される構造と同調的に上部にむけて暗色化する。20層は土壤生成作用が進行している層準に相当し、当時の地表をなしていた可能性があり、20層が土壤層位のA層からB層、23層がB層、24層がC層に相当するとみられる。

15層：黒色を呈する細礫・粗粒砂混じり腐植質砂質泥からなる。下位層との層界は構成する碎屑物の粒径変化から不明瞭な層理面が確認される。生物擾乱の影響を強く受けており、葉理構造など堆積構造は認められず、塊状構造を呈する。土壤生成作用の影響を強く受けており、腐植が集積している。X線写真では相対的に暗色を呈しており、密度の低い堆積物(土壤)からなることが確認されるが、下部1cm程度でやや明色を呈し、極粗粒砂が比較的多く混じる。

13層：黒色を呈する腐植質砂混じり泥からなる。生物擾乱の影響を強く受けており、葉理構造など堆積構造は認められず、塊状構造を呈する。土壤生成作用の影響を強く受けており、腐植が集積している。ただし、仔細にみると、泥がちな層準と砂がちな層準が積層している状況が確認される。この状況はX線写真で比較的明瞭で、砂がち層準は明色、泥がち層準が暗色を呈している。また、上部層準ほど明色化しており、肉眼観察では層間に変化が確認されないことから、密度が高まるような影響(例えば、人間活動に伴う圧密など)を受けている可能性が高い。

11層：黒色を呈する腐植質砂混じり泥からなる。生物擾乱の影響を強く受けており、葉理構造など堆積構造は認められず、塊状構造を呈する。土壤生成作用の影響を強く受けており、腐植を多く含む。X線写真では相対的にやや暗色を呈している。

10層：黒褐色～黒色を呈する腐植質砂混じり泥からなる。生物擾乱の影響を強く受けており、葉理構造など堆積構造は認められず、塊状構造を呈する。土壤生成作用の影響を強く受けており、腐植が集積している。X線写真では下記の11層層準に比較して相対的に明色を呈し、最上部1cm程度は砂がち、明色を呈している。最上部は密度の高い堆積物(土壤)からなることが確認される。密度が高まるような影響(例えば、人間活動に伴う圧密など)を受けている可能性が高い。

5層：腐植質砂質泥、黄褐色砂質泥、褐色砂質泥など、由来の異なる偽礫・微小ブロックからなる。上部ほど偽礫の大きさが小さくなる。X線写真でも明暗のコントラストが著しく、肉眼観察で確認される偽礫状の構造が確認される。下位の10層との層界は明瞭であり、人為的營力で形成された客土と推定される。

1層：黒褐～暗褐色土壤の偽礫・微小ブロックからなる。間隙・孔隙が多い。1mm以下の炭片や極粗粒砂・細礫が僅かに混じる。下位層との層理面は明瞭であり、人為的當力で形成された堆積物と判断される。X線写真でも同様の構造が確認される。

(3) 考察

各調査地点の堆積物は、いずれも土壤生成が進行しており、初生の堆積構造が不明瞭となっている。ただし、X線写真では北東部3層・南西部5層下面以下の堆積物において、砂がちな層準を挟在していることが確認される。これら砂がちな層準は、調査区への間欠的な土砂流入を示唆している。原因としては洪水、西側の段丘側から地表物質の流動移動などの可能性が考えられるが、詳細については各層準の側方への粒径変化などを確認の上、慎重に評価する必要がある。いずれにしても、調査区内は周辺から堆積物の供給があり、堆積後に土壤生成が進行するような堆積場であったと推定される。

北西部4層・南西部11層と北東部3層・南西部5層下面直下の堆積物上部は、X線写真において明色化しており、密度の高い堆積物からなることが確認される。肉眼観察では腐植質堆積物からなり、単層内での層相変化はほとんど確認されないことを考慮すると、人間活動により圧密を受けた結果の可能性も考えられる。一方、検出面の直上の堆積物は腐植含量が高い土壤生成の進行した堆積物からなる。このような層相変化は、人間活動の断絶期を示している可能性があり、植生が再生し、腐植が集積する場所に変化している期間を挟在している可能性がある。

以上のように今回の調査地点の堆積物は土壤生成作用を強く受けている。このような堆積後作用は、遺物の3次元配置を変化させる要因となっているとみられる。実際に南西部地点の24層で確認される根成孔隙を充填する堆積物は13層より上位の堆積物で充填されており、3cm以下の遺物であれば24層まで落ち込む可能性は充分考えられる。

3 花粉分析

(1) 花粉分析

北東部地点の9層・15層、南西部地点の13層・15層・20層の5層準について実施する。試料約10gを秤量し、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman (1952, 1957)、Faegri and Iversen (1989)などの花粉形態に関する文献や、鳥倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(2) 結果

結果を第51表、第171図、図版93に示す。分析残渣は5点共に少なく、北東部(南北トレンチ1)の

第51表 花粉分析結果

種類	上段:地点 下段:層位				
	北東部	9層	15層	13層	南西部
	9層	15層	13層	15層	20層
木本花粉					
モミ属	19	1	5	2	-
ツガ属	17	1	2	2	-
トウヒ属	2	-	1	-	-
マツ属複雜管束亞属	23	-	12	-	-
マツ属(不明)	56	16	35	6	11
コウヤマキ属	-	-	1	1	-
スギ属	45	6	24	2	1
イチイ科一スギガヤ科ヒノキ科	5	1	1	1	-
クルミ属	2	-	4	-	-
タマシデ属アサダ属	4	1	1	2	-
ハンノキ属	3	-	1	-	-
ブナ属	6	2	4	-	1
コナラ属コナラ亜属	10	-	3	1	3
コナラ属アカガシ亜属	11	2	6	-	-
シイ属	1	-	-	-	-
ニレ属ケヤキ属	2	3	-	-	-
エノキ属ムクノキ属	-	-	1	-	-
草本花粉					
サジョモダカ属	1	-	-	-	-
オモダカ属	1	-	-	-	-
イネ属型	22	2	13	1	1
他のイネ科	93	9	52	7	6
カヤツリグサ科	15	-	5	-	-
サンエタデ節ウナギツカミ節	2	-	1	-	-
ソバ属	-	-	3	-	-
アカザ科	-	-	2	1	-
アブラナ科	-	-	-	1	-
シリカツク属	2	-	-	-	-
アリノトウグサ属	2	-	-	-	-
オミナエシ属	1	-	-	-	-
ヨモギ属	5	1	14	2	2
キク亜科	1	1	2	-	2
タンポポ亜科	4	2	2	-	1
不明花粉					
不明花粉	2	1	2	-	-
シダ類胞子					
他のシダ類胞子	102	22	217	48	36
合計					
木本花粉	206	33	101	17	16
草本花粉	149	15	94	12	12
不明花粉	2	1	2	0	0
シダ類胞子	102	22	217	48	36
合計(不明を除く)	457	70	412	77	64

9層以外はほぼすべての分析残渣を検鏡している。花粉化石の保存状態は、時代から推測される状態より悪く、花粉化石も全体的に少ないが、その中でも北東部(南北トレンチ1)の9層では比較的多くの花粉化石が認められる。以下に各地点の花粉化石群集について記載する。なお、花粉化石が比較的多産する層準は、発掘調査時の遺物・遺構の検出状況に基づく層序対比とも調和的である。

・北東部地点

9層の花粉化石組成は、草本花粉に比べ木本花粉の方が多い。木本花粉は、マツ属が全体の40%近くを占め、次いでスギ属が多い。その他、モミ属、ツガ属、コナラ亜属、アカガシ亜属を含むが、針葉樹主体の組成である。草本花粉はイネ科が多く、その中にイネ属を約20%含む。ただし、保存状態が悪いためイネ属と同定できなかった化石も多く、実際には30~50%程度は含まれているのではない

かと推測される。その他、オモダカ属やサジオモダカ属などの水生植物、カヤツリグサ科、ヨモギ属等を含む。

15層は、花粉化石の保存状態が悪く、化石数も少ない。産出した種類構成は9層で確認される種類と同様である。

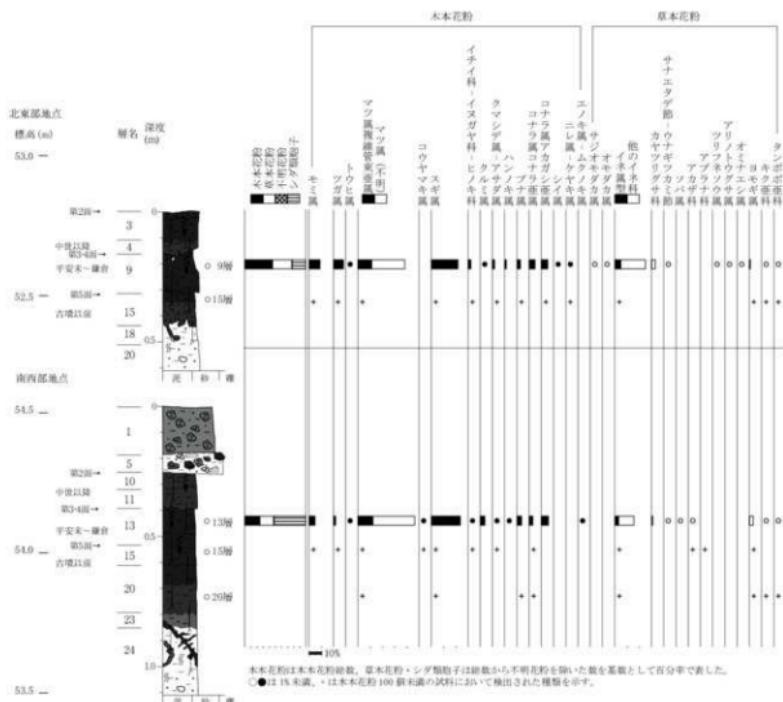
・南西部地点

13層は化石の保存状態がさらに悪く、全体の半数以上がシダ類胞子で占められ、花粉化石の産出個数も少ない。花粉化石組成は、北東部地点の9層に似る。栽培植物のソバ属が検出される。

15層・16層は、花粉化石の保存状態が悪く、花粉化石が少ない。検出傾向は、木本ではマツ属、スギ属等の針葉樹、草本ではイネ科が検出され、上記2点と似る。

(3) 考察

今回の花粉分析の結果をみると、花粉の保存が悪い試料ほど、針葉樹花粉やシダ類胞子の割合が多い。花粉化石は好気的環境下による風化に弱く、かつシダ類胞子や針葉樹花粉の割合が多い。これは、



第171図 各地点の花粉化石群集の層位分布

針葉樹花粉やシダ類胞子は、広葉樹花粉に比べ、スボロボレニンの量が多く(Stanley&Linskens, 1974)、風化に対する耐性があることが影響していると考えられる(中村, 1967; 徳永・山内, 1971)。立地や堆積物の状況からみて、堆積物の母材が氾濫等の河川堆積物であることは間違いないであろうが、その後等風化を受けやすい環境下におかれることによって、花粉化石が分解したと考えられる。

今回の結果では、保存が悪く傾向がはっきりしない試料もあるが、全体としてマツ属とスギ属が多い傾向にある。マツ属は風媒花であるため花粉生産量が多く、飛散能力も高いため、実際の周辺植生の割合よりも花粉化石の出現率が高くなる傾向にある(Faegri and Iversen, 1989等)。このため、花粉化石の割合ほど多くはないが、周辺にマツ林が増加したと思われる。マツ林が増加した理由は、開発によって本来の植生が失われた場所に、先駆的に侵入し、マツの二次林が形成されたのが原因と思われる。さらに、草本花粉の割合が高くなること、それに合わせてイネ属花粉の割合が多産することから、周辺の開発が進み、草地が広がったと考えられる。また、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク科なども開けた草地を好む種類であり、周辺に生育していたと思われる。

スギ属花粉も本来生産量が多いため、実際の周辺植生の割合より出現率が高くなっていると思われる。これまでの分析例は、約2000年前を中心としてスギ属の花粉化石や埋没林が、山陰～北陸の日本海側において多く検出されており、当時スギ林が分布を拡大していったと考えられている(高原, 1998)。ただし、前述のように周辺での開発が進んでいることから、スギ林は減少し、林縁や谷斜面など開発が及びにくい場所を中心に生育していたと思われる。木本花粉で検出されるその他の種類(モミ属、ツガ属、クルミ属、クマシデ属—アサダ属、コナラ亜属、アカガシ亜属など)も、河川沿い、斜面地など土地を利用しにくい場所を中心に、生育していたと推測される。

4 植物珪酸体

(1) 方法

北東部地点の3層・4層・9層・15層、南西部地点の10層・13層・15層・20層の8層準について実施する。植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行う。試料を105°Cで24時間乾燥、試料約1gに対し直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)、電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理、超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散、沈底法による20μm以下の微粒子除去、封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成である。

検鏡は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行う。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求める。

(2) 結果

結果を第52表、第172図、図版94に示す。各地点の植物珪酸体含量密度の層位分布は、地点間で同様な変遷パターンを示しており、生層序学的に対比可能である。

植物珪酸体の組成は、北東部地点、南西部地点ともに類似する。第5面より下位(北東部地点の15層、南西部の15層、20層は上位に比べて植物珪酸体総数が少ない。種類構成は、タケ亜科が多く、ネザサ

節、チマキザ節、ミヤコザサ節等が含まれる。イネ属は南西部地点のみ少量検出される。その他スキ属を含むウシクサ族、ヨシ属などが検出される。

第5面よりも上位では、北東部地点、南西部地点ともに植物珪酸体総数が増加する。ネザサ節型の増加が顕著であり、これが植物珪酸体総量増加の大きな要因である。イネ属も北東部地点、南西部地点共に上位に向かって増加し、北東部地点の3層、南西部の10層で最も多い。種類構成は下位と大きく変わらず、下位と比べてわずかに増加する。

(3) 考察

植物珪酸体の総量は上位に向かって急増するが、基本的にタケア科の量に左右され、タケア科が多い試料は植物珪酸体全体の量も多い。これは、タケア科は他のイネ科植物珪酸体に比べ、生産量が多く化石化として残りやすいことが原因である(杉山、2000; 近藤、2010など)。したがって、周辺にタケ・ササ類が生育していたことは確かであろうが、植物珪酸体でみられるほど極端に多くはなかったと推測される。

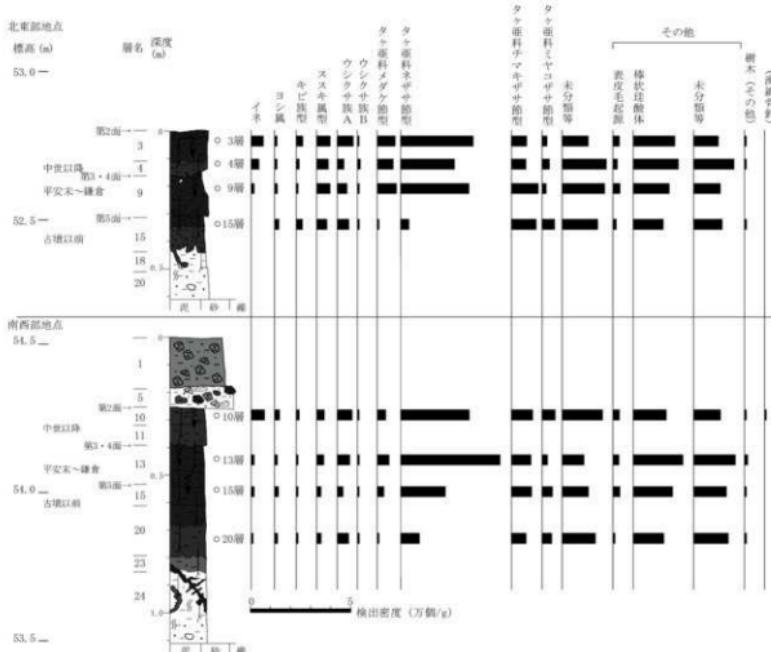
検出されたタケ類のうち、チマキザ節やミヤコザサ節は積雪地や寒冷地に多く、落葉樹林の林床にも生育する。これらはすべての層位で植物珪酸体量の変動が少ないことから、山地など調査地から比較的遠い場所から流入したものであり、山地の植生を反映していると考えられる。このような傾向は、積雪地である日本海で行われる植物珪酸体分析結果でよくみられる。

一方、メダケ節やネザサ節は比較的温暖で開けた場所に多く、当時の古気候を示す指標としても使

第52表 植物珪酸体分析結果

分類群	上段: 地点 下段: 層位							
	北東部				南西部			
	3層	4層	9層	15層	10層	13層	15層	20層
イネ科								
イネ	60	37	13		66	13	13	7
ヨシ属	12	12	13	21	24	13	19	14
キビ族型	30	12	7	28	12	7	6	7
ススキ属型	66	56	65	49	36	33	19	20
ウシクサ族A	78	31	46	56	72	60	26	54
Bタイプ	6	12	7	7	6	7	6	7
タケア科								
メダケ節型	91	81	98	7	42	60	32	7
ネザサ節型	368	273	347	42	348	505	226	95
チマキザ節型	78	74	137	126	108	100	103	75
ミヤコザサ節型	24	37	20	63	66	27	52	48
未分類等	127	217	209	175	198	106	129	163
その他のイネ科								
表皮毛起源	30	19	33	14	30	27	32	7
棒状珪酸体	205	223	177	147	162	246	194	150
未分類等	121	199	131	140	132	206	161	170
樹木起源								
その他	6	6		7	6	13	6	7
(海綿骨針)						6		
植物珪酸体総数	1304	1291	1302	881	1308	1423	1027	831

数値が含量密度(単位: ×100個/g)を示す。



第172図 植物珪酸体含量密度の層位分布

われる(杉山, 2000)。今回の場合は、生活の痕跡が認められる第5面より上位でこれらが急増することから、開発によって遺跡周辺が開けた場所になった結果、これらのタケ類が生育するようになったと推測される。これに呼応して、イネ属の植物珪酸体も増加することから、稲作とともに周辺の開発が進んだ可能性がある。

ヨシ属は全体的に少ない。地形や層相からみて、堆積物は水の蓄力によってもたらされたことは確かであろうが、當時湿った状態ではなく、基本的には乾燥していたと思われる。イネ科植物の生態性を考慮すると、乾燥地に多いネササ節や、ススキ属を含むウシクサ族が多く検出されることと調和的である。

引用文献

- Erdtman G. 1952. Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I). Almqvist & Wiksell, 539p.

Erdtman G. 1957. Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II), 147p.

Feagri K. and Iversen Johs. 1989. Textbook of Pollen Analysis. The Blackburn Press, 328p.

藤木利之・小澤智生. 2007. 琉球列島植物花粉図鑑. アクアコーラル企画, 155p.

林 昭三. 1991. 日本産木材 跟微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

- 伊東隆夫, 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料. 31. 京都大学木質科学研究所. 81-181.
- 伊東隆夫, 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料. 32. 京都大学木質科学研究所. 66-176.
- 伊東隆夫, 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料. 33. 京都大学木質科学研究所. 83-201.
- 伊東隆夫, 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料. 34. 京都大学木質科学研究所. 30-166.
- 伊東隆夫, 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料. 35. 京都大学木質科学研究所. 47-216.
- 三好教夫・藤井利之・木村裕子, 2011. 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会. 824p.
- 中村 純, 1967. 花粉分析. 古今書院. 232p.
- 中村 純, 1980. 日本産花粉の標識 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集. 91p.
- Reimer PJ et al. 2013. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (編), 2006. 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修). 海青社. 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 鳥地 謙・伊東隆夫, 1982. 国説木材組織. 地球社. 176p.
- 鳥倉巳三郎, 1973. 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集. 60p.
- Stanley Robert&Linskens Hans, 1974. Pollen: biology, biochemistry, management. Springer-Verlag Berlin Heidelberg New York. 307p.
- Sstuiver Minze and Polach A Henry, 1977. Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 高原 光, 1998. スギ林の変遷. 図説 日本列島植生史. 安田喜憲・三好教夫編. 朝倉書店. 207-223.
- 徳永重元・山内輝子, 1971. 花粉・孢子. 化石の研究法. 共立出版株式会社. 50-73.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998. 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修). 海青社. 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第2節 平ノ前遺跡自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平ノ前遺跡(鳥取県倉吉市上古川地内)は、大山山麓より流下する小鴨川の左岸流域に位置する。本地域の地形分類図(鳥取県, 1975)を参考とすると、本遺跡は小鴨川の西側に分布する天神野台地縁辺の崖線下の沖積地(谷底平野)に立地すると考えられる。なお、本遺跡の発掘調査では、鎌倉時代以降の掘立柱建物、古墳時代前期の溝などが確認されている。

本報告では、平ノ前遺跡における古環境変遷、とくに古植生や堆積(水域)環境に関わる資料の作成を目的として、珪藻分析、花粉分析および植物珪酸体分析を実施した。

1. 試料

試料は、A 1 区 中央ベルトに確認された堆積層のうち、1 層、2 層、6 層および 8 層の 4 層準よ

り採取された堆積物(4J-81 A 1区 中央ベルト 1層、2層、6層、8層)である(第173図)。なお、調査所見によれば、8層が縄文時代晚期より古い流路堆積層、6層が縄文時代晚期以降の土壌層、2層が平安時代末以降の耕作土、1層が近現代の耕作土とされている。

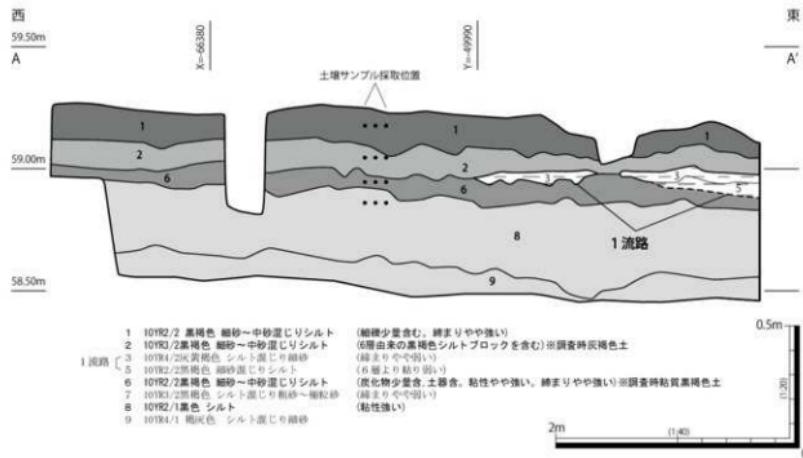
堆積物試料は、各層準ごとにフィルムケース3本に保管された状態にあり、それぞれサンプル1~3までの名称が付されている。各試料の観察では、1層が砂分が混じる黒色~黒褐色泥、2層が黒色~暗褐色泥、6層が黒色~黒褐色泥、8層が黒色泥からなる。いずれも未分解の植物遺体等は認められないが腐植質であることから、土壤化が進んだ堆積物とみられる。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料(湿重約5g)をビーカーに量り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4~5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付けプレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用いて任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数する。珪藻の同定と種の生態性については、Witkowski et al. (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot (1985-1991)、Desikachariy (1987)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水~汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらに淡水生種は、塩分・pH・水の流動性の3適応性についても分類する。堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が100個体以上産出した試料について図を作成する。



第173図 A1区 中央ベルト土層断面および資料採取位置

(2) 花粉分析

試料(約10g)を秤量し、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。

同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdtman(1952, 1957)、Faegri & Iversen(1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。結果を一覧表として表示する。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタンゲステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由來した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体)および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体)を、近藤(2010)の分類を参考に同定・計数する。分析の際、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は100単位として示し、100個未満は「<100」と示す。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を第53表、第174図、図版95に示す。分析に供された4層準(8, 6, 2, 1層)のうち、6層、2層、1層の3層準からは珪藻化石が産出したが、8層は無化石であった。保存状態は、全体的に悪いが、とくに下位層準ほど悪い。以下に、珪藻化石が産出した各層準の産状を記す。

6層は、珪藻化石が少なく、29個体産出したのみである。保存状態は、壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した分類群は、淡水生種のみで構成され、流水不定性種のCymbella tumida、Fragilaria ulna、陸生珪藻のLuticola mutica等が産出する。

2層と1層は、ほぼ同様の産状を示す。いずれも140個体程度産出したが、堆積物中における化石量は少ない。保存状態は、壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。特徴的に産出した種は、淡水性種で流水不定性種のCymbella tumida、Encyonema silesiacum、Fragilaria ulna、止水性種のEunotia exigua、流水不明種のCymbella spp.、Pinnularia spp.等である。

なお、2層と1層の淡水生の群集の特徴については、以下の傾向が認められる。まず、塩分に対する適応性は、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれたはうがよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な

第53表 珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	4J-8j				
	塩分	pH	流水		A1区 中央ベルト				
					1層	2層	6層	8層	
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	—	4	—	—	
<i>Achnanthes</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	—	2	—	—	
<i>Cocconeis placentula</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-l	ind	U	—	5	—	—	
<i>Cocconeis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	3	6	—	—	
<i>Cymbella aspera</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-l	ind	O.T	—	1	—	—	
<i>Cymbella cuspidata</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	—	2	—	—	—	
<i>Cymbella tumida</i> (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-l	ind	T	12	13	3	—	
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow	Ogh-ind	al-l	r-ph	K.T	1	1	—	—	
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	24	10	2	—	
<i>Diplothele yatukaeensis</i> Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	1	—	—	—	
<i>Diplothele</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	8	—	—	—	
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	17	16	1	—	
<i>Eunotia exigua</i> (Breb.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	7	13	—	—	
<i>Eunotia intermedia</i> (Krass.) Noerpel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-l	ind	O.U	1	3	—	—	
<i>Eunotia pectinalis</i> var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-l	ind	O	4	4	—	—	
<i>Eunotia septentrionalis</i> Oeststrup	Ogh-hob	ac-bi	ind	O.U	2	—	—	—	
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	3	10	—	—	
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-l	ind	O.U	10	8	3	—	
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	19	18	11	—	
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-l	ind	R.A.S	—	—	5	—	
<i>Meridion circulare</i> var. constrictum (Rafts) Van Heurck	Ogh-ind	al-l	r-bi	K.T	—	1	—	—	
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	2	—	—	—	
<i>Neldium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	O	3	—	—	—	
<i>Neldium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	3	—	—	—	
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	4	2	—	—	
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	15	14	2	—	
<i>Rhopalodria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	—	—	2	—	
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-l	l-ph	O	—	3	—	—	
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	10	—	—	—	
海水生種				—	0	0	0	0	
海水～汽水生種				—	0	0	0	0	
汽水生種				—	0	0	0	0	
淡水～汽水生種				—	0	0	0	0	
淡水生種				—	141	144	29	0	
挂藻化石總數				—	141	144	29	0	

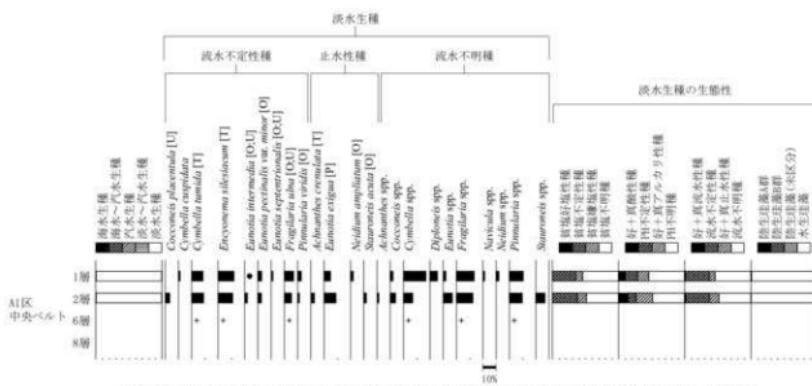
<凡例>

[適応性]

塩分：塩分濃度に対する適応性	pH：水素イオン濃度に対する適応性	流水：流水に対する適応性
Euh : 海水生種	al-bi : 真アルカリ性種	l-bi : 真止水性種
Euh-Meh : 海水生種 - 汽水生種	al-l : 好アルカリ性種	l-ph : 好止水性種
Meh : 汽水生種	ind : pH 不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-Meh : 淡水生種 - 汽水生種	ac-l : 好酸性種	r-ph : 好流水性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	ac-bi : 真酸性種	r-bi : 真流水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	unk : pH 不明種	unk : 流水不明種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性		
Ogh-unk : 貧塩不明種		

[環境指標種]

- A: 外洋指標種、B: 内湾指標種、C1: 海水藻場指標種、C2: 汽水藻場指標種、D1: 海水砂質干潟指標種、D2: 汽水砂質干潟指標種、E1: 海水泥質干潟指標種、E2: 汽水泥質干潟指標種、F: 淡水底生種群（以上、小杉、1988）
 G: 淡水浮遊性種群、H: 河口浮遊性種群、I: 上流性河川指標種、K: 中～下流性河川指標種、L: 最下流性河川指標種群
 M: 湿沼浮遊性種、N: 湿沼沼澤湿地指標種、O: 沼澤湿地付着生種（以上、Asai and Watanabe, 1995）
 P: 高層漫原指標種群、Q: 陸域指標種群（以上、安藤、1990）
 S: 好汚泥性種、U: 広適応性種、T: 好清水性種（以上、Asai and Watanabe, 1995）
 R: 陸生珪藻（RA: A群 RB: B群、RI: 未区分、伊藤・堀内、1991）



第174図 主要珪藻化石群集

特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いあるいは低いといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。結果としては、貧塩不定性種および貧塩不明種が優占する。

pHに対する適応性は、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかが分かるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。結果は、PH不明種が優占する。

流水に対する適応性は、流れのある水域の基物(岩石、大型の藻類、水生植物など)に付着生育する種群であり、特に常時流のあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定性種は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。結果は、流水不明種が優占する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区別している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群であるが、2試料には陸生珪藻は認められなかった。

(2) 花粉分析

結果を第54表、図版96に示す。4層準(8, 6, 2, 1層)より採取された試料はいずれも分析残渣が少なかったため、残渣の半分について検鏡を行った。4試料はいずれも花粉化石やシダ類胞子の多くに風化の痕跡が認められるなど保存状態が悪い。花粉化石の産状は、各試料ともに产出が少ない。8層、6層、2層の3層準は10個未満であり、木本類ではマツ属、クマシデ属-アサダ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、草本類はイネ科がわずかに検出された程度で

第54表 花粉分析結果

種類	4J-8i			
	A1区中央ベルト			
	1層	2層	6層	8層
木本花粉				
モミ属	1	—	—	—
マツ属	6	4	—	1
スギ属	6	—	—	—
クマシデ属-アサダ属	—	1	3	—
コナラ属コナラ亜属	3	—	1	1
コナラ属アカガシ亜属	1	—	—	—
シイ属	1	—	—	—
ニレ属-ケヤキ属	—	1	—	—
エノキ属-ムクノキ属	—	—	—	2
草本花粉				
オモダカ属	1	—	—	—
イネ属型	3	—	—	—
他のイネ科	21	2	—	1
カヤツリグサ科	4	—	—	—
ゾバ属?	1	—	—	—
アカザ科	1	—	—	—
ナデシコ科	2	—	—	—
アブラナ科	1	—	—	—
ヨモギ属	1	—	—	—
オナモミ属	1	—	—	—
キク亜科	2	—	—	—
タンボボ亜科	4	—	—	—
不明花粉				
不明花粉	2	—	—	—
シダ類胞子				
他のシダ類胞子	164	35	27	19
合計				
木本花粉	18	6	4	4
草本花粉	42	2	0	1
不明花粉	2	0	0	0
シダ類胞子	164	35	27	19
合計(不明を除く)	224	43	31	24

第55表 植物珪酸体含量

種類	4J-8i			
	1層	2層	6層	8層
イネ科葉部短細胞珪酸体				
クマザサ属	—	<100	<100	<100
タケ亜科	<100	<100	<100	100
不明	<100	<100	<100	300
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ属	<100	—	—	—
クマザサ属	<100	<100	<100	<100
タケ亜科	<100	<100	200	100
不明	200	100	200	100
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	<100	<100	100	600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	300	200	500	300
植物珪酸体含量	400	200	600	900

単位：個/g <100：100個/g未満

ある。1層は草本類がやや多く検出され、その中ではイネ属を含むイネ科が多く産出し、カヤツリグサ科、アカザ科、キク亜科、タンボボ亜科なども認められる。木本類は、マツ属、スギ属をはじめ、モミ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、シイ属などが認められる。シダ類胞子は、上位に向かって多く産出する傾向にあるが、風化の痕跡がある単条溝形のシダ類胞子がほとんどを占める。

(3) 植物珪酸体分析

結果を第55表、図版96に示す。4層準(8, 6, 2, 1層)の各試料からは植物珪酸体が検出されるが、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められるなど保存状態が悪い。

植物珪酸体の含量密度は4層準を通じて200~900個/gと低い。検出された分類群も少なく、クマザサ属を含むタケ亜科が各層準より検出されたほかは、1層から栽培植物のイネ属(機動細胞珪酸体)が検出された程度である。

4. 考察

A1区中央ベルトの8層は、花粉化石、植物珪酸体とともに保存状態が悪く、化石の産出が少ない。また、珪藻化石は無化石であった。花粉化石は好気的環境下では風化が進み、分解が進行する(中村、1967など)。珪藻化石や植物珪酸体はいずれも珪酸質であることから、花粉化石と比べて好気的環境下における分解には強いが、徐々に分解することが知られており、乾湿を繰り返すような場所やpHの高い場所ではとくに分解が進みやすい(近藤、2010など)。調査所見によれば、8層は縄文時代晩期以前の流路埋積物と考えられている。8層試料は、植物遺体等が認められず、分解が進行したと思われる黒色を呈する堆積物であることを踏まえると、定常的に水位が高い状態ではなかったことや、土壤化が進行した堆積物が埋積していた可能性がある。

縄文時代晩期以降の土壤層とされる6層は、8層と同様に化石の保存状態が悪かった。おそらく、風化や土壤化の過程でその多くが分解・消失したと考えられる。なお、鳥取県沿岸部において実施された花粉分析、植物珪酸体分析結果をみると、花粉化石ではマツ属、スギ属、コナラ亜属が多く、海岸沿い、尾根沿いなどの土地条件の悪い場所にはマツが、低地にはスギが生育し、コナラ亜属などの広葉樹は後背山地の落葉樹林に由来と考えられている。また、植物珪酸体ではタケ亜科が多く、落葉広葉樹林の林床に生育するササ類に由来すると考えられている(パリノ・サーヴェイ株式会社、2016, 2017など)。

2層と1層についてみると、珪藻化石は2層準よりはば類似する群集組成が確認された。特徴種の生態性や生育環境についてみると、流水不定性種の*Cymbella tumida*は、一般に貧塩不定、好アルカリ性種、流水不定の広域領布種であるが沼澤湿地に普遍的に認められるとされ、Asai & Watanebe (1995)によると好清水性種とされる。流水不定性種の*Encyonema silesiacum*は、沼澤地から湿地等の水域に広く生育する種である。流水不定性種の*Fragilaria ulna*は、貧塩不定性、好アルカリ性および流水不定であり、広域領布種の一種で広範のさまざまな水域から比較的、高率に見出される。止水性種の*Eunotia exigua*は、沼澤地の中でも一段高い場所のミズゴケの下やカワゴケあるいはハイゴケ等に付着生育する種群とされる(Krammer & Lange-Bertalot, 1991)。また、弱酸性水域に特徴的に認められ、pH 2~3の強酸性水域にも生育することが知られている。次に、*Cymbella* spp., *Eunotia* spp., *Fragilaria* spp.、および*Pinnularia* spp.は、それぞれの属が複数の種で構成されるが、保存が悪かったため、種の同定には至らなかった。これらは、属自体がいずれも湿地に最も特徴的に認められ、

主要な構成種となる。以上のような特徴種や群集の構成から、調査地付近は沼沢地～湿地のような環境であったことが推測される。ただし、化石の保存状態が悪かったことから、定常的に水位が高かったわけではなく、乾湿を繰り返すような状態であったと考えられる。このことは、後述する花粉化石や植物珪酸体の産出が少なく、保存が悪かったことからも想定される。

また、花粉分析結果では、花粉・胞子化石全体においてシダ類胞子が多数を占めるという特徴が認められた。シダ類胞子や針葉樹花粉は、広葉樹花粉と比較して好気的環境下による風化に強い（徳永・山内、1981）とされる。このことから、好気的環境下において花粉化石の風化が進むことによって、シダ類胞子が相対的に増加したと考えられる。また、産出した花粉化石は、花粉外膜が厚い種類や、風化が進んでも同定可能な特徴的な形の種類が多いため、古植生を検討する際はこれらの点を踏まえる必要がある。4層準のうち花粉化石が比較的多く産出した1層は、近現代の耕作土とされる。1層では、イネ属を含むイネ科花粉が多く認められ、植物珪酸体でもイネ属（機動細胞珪酸体）が検出された。このような産状は耕地化による草地の拡大を反映していると思われ、本層準では稻作のほかソバ栽培も行われていたと考えられる（ソバ属花粉は半分以下の破片であったため、第表ではソバ属?としている）。この他、タンボボア科、ヨモギ属等のキクア科、アブラナ科、アカザ科、カヤツリグサ科などは開けた場所を好む種類であることから、周囲に分布した草地に由来すると思われる。

一方、本木類では、マツ属、スギ属、コナラ亜属などが認められた。マツ属は成長が早く、瘦地も育つことから、広範囲の伐採などの植生変更があった場合に先駆的に侵入してマツ林を構成する。とくに有史以降のマツ属花粉の増加は、国内においては人為的な植生破壊の結果生じることが多い。スギ属は、過去の花粉分析結果や埋没林の樹種同定結果をみると、かつては日本海側を中心に、扇状地末端の湧水地など多湿な場所にスギ属が生育していたことが推測されている（鈴木、2002）ことから、低地を中心にスギ属が分布していたと思われる。コナラ亜属などの広葉樹は後背山地の落葉広葉樹林に由来すると思われる。また、植物珪酸体に認められたクマザサ属を含むタケア科は、落葉広葉樹林の林床や林縁に生育していたものに由来すると思われる。

＜引用文献＞

- Asai, Kazumi & Watanabe, Toshiharu. 1995. Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 安藤一男. 1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 73-88.
- Desikachariy, T. V. 1987. Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, 1-13. Plates: 401-621.
- Erdtman G. 1952. Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I). Almqvist & Wiksells, 539p.
- Erdtman G. 1957. Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II). Almqvist & Wiksells, 147p.
- Faegri K. & Iversen J. 1989. Textbook of Pollen Analysis. The Blackburn Press, 328p.
- 藤木利之・小澤智生. 2007. 疏球列島植物花粉図鑑. アクアコーラル企画, 155p.
- Hustedt, F. 1930. Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz, under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7. Leipzig. Part 1, 920p.

- Hustedt, F. 1937-1938. Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl. 15. 131-809p, 1-155p, 274-349p.
- Hustedt, F. 1959. Die Kieselalgen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Österreichs und der Schweiz, 7. Leipzig. Part 2. 845p.
- Hustedt, F. 1961-1966. Die Kieselalgen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Österreichs und der Schweiz, 7. Leipzig. Part 3. 816p.
- 小杉正人. 1986. 陳生珪藻による古環境の解析とその意義 -わが国への導入とその展望-. 植生史研究. 1, 9-44.
- 小杉正人. 1988. 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究. 27, (1), 1-20
- 近藤錦三. 2010. プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会. 387p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1985. Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica. 9. 250p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986. Bacillariophyceae. Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(1). 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988. Bacillariophyceae. Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(2). 596p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1990. Bacillariophyceae. Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(3). 576p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991. Bacillariophyceae. Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(4). 437p.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子. 2011. 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会. 824p.
- 中村 純. 1967. 花粉分析. 古今書院. 232p.
- 中村 純. 1980. 日本産花粉の標識 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社. 2016. 常松苔田遺跡の古環境解析. -一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X X II - 常松苔田遺跡II. 鳥取県教育委員会. 105-120.
- パリノ・サーヴェイ株式会社. 2017. 大柄遺跡15(4区~6区)の自然科学分析. 大柄遺跡II -一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X X VI -. 鳥取県教育委員会. 147-164.
- 鳥倉巳三郎. 1973. 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- 鈴木三男. 2002. 日本人と木の文化 八坂書房. 255p.
- 徳永重元・山内輝子. 1971. 花粉・胞子. 化石の研究法. 共立出版株式会社. 50-73.
- 鳥取県. 1975. 大山山ろく開発地域 土地分類基本調査 青谷・倉吉 5万分の1 國土調査. 35p.
- Wikowski, A., Lange-Bertalot, H., Metzeltein, D. 2000. Diatom Flora of Marine Coasts I. Iconographia Diatomologica 7. Koeltz Scientific Books. 925p.

第6章 山ノ下遺跡・平ノ前遺跡の総括

第1節 遺構の変遷

第1項 山ノ下遺跡の遺構

山ノ下遺跡では、6面の遺構面を確認し、縄文時代から中世後期までの遺構を検出している。本項では、各面において検出した遺構について若干の検討を行いつつ、各時期ごとに遺構の変遷を整理し、遺構に関する総括としたい。

旧石器時代

表土および平安時代のピット中より旧石器と考えられるS2・9が出土している。石器が出土したエリアにトレントを設定し、確認をおこなったが、遺構は検出していない。

縄文時代

土坑底面に小ピットを伴う遺構(落とし穴)を8基検出している(210・600・631・1027・1076・2016・2057・2079土坑)。土坑内より縄文土器は出土していないが、遺構の形態から判断し、当該期の遺構と想定している。調査区内に点在するような検出状況であり、配列などの規則性は認められない。2057土坑はⅢ-2層下面、V層上面にて検出していることから、第5面が縄文時代の遺構検出面になる可能性が高い。

弥生時代

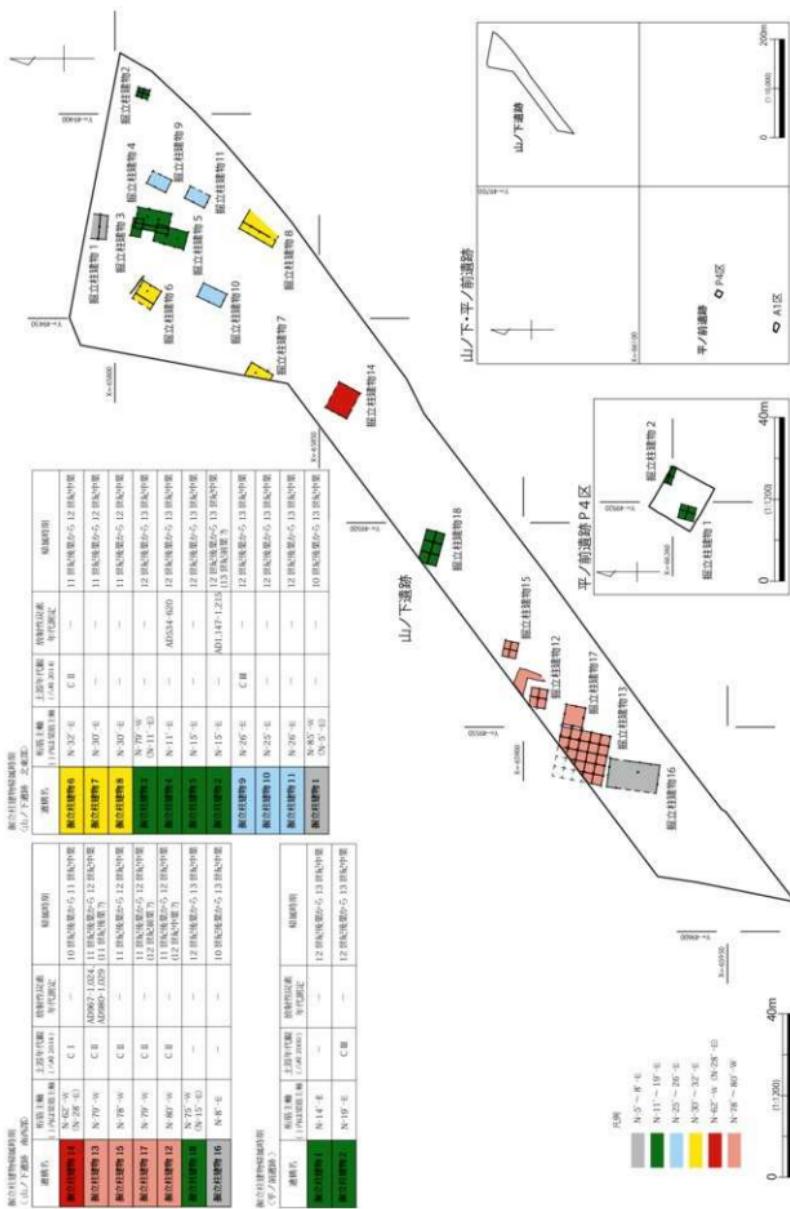
弥生時代の遺構は、中期前葉の土坑1基(1004土坑)・ピット1基(1010ピット)、中期中葉の土坑1基(1003土坑)などを検出している。いずれも調査区南西部の第5面にて検出している。弥生時代中期の遺物出土量も南西部に集中しており、集落は調査区の南側に広がっているものと想定している。1004土坑からは擬朝鮮系無文土器の可能性がある資料が出土しており、当該期における大陸間交流を解明する上で、貴重な例といえる。

古墳時代

古墳時代前期初頭の土坑2基(288・289土坑)を検出している。いずれも、調査区北東部の北東隅に近接して位置する。一方の幅がやや広い長楕円形の平面形を呈し、二段掘状の掘方、埋土には裏込めとみられる埴層由来のブロックが多量に混じるシルトが堆積するなどの特徴をもつ。また、288土坑検出面では、甕(Po180)がつぶれたような状態で出土している。これらの特徴から墓壙の可能性が考えられるが、明確にはできていない。確認できた当該期の遺構はこの2基のみであり、遺物量も少ない。

平安時代から鎌倉時代

掘立柱建物18棟をはじめ土坑などを検出し、本遺跡の盛期となる時期である。そのうち、掘立柱建物13は桁行・梁行5間(1辺約12m)の縦柱建物であり、本遺跡最大規模の建物である。ピットの規模も大きく(最大64cm)、根石や根巻き石といった基礎固めが行われ、強固な構造となっている。遺物は土師器Ⅲ・壺のほか、越州窯系Ⅲ類の壺または水注とみられる青磁片や白磁Ⅱ類壺片といった貿易



第175図 据立柱建物配置図

第56表 掘立柱建物帰属時期

遺跡名	地区	遺構名	10世紀		11世紀		12世紀		13世紀	
			中葉	後葉	中葉	後葉	中葉	後葉	中葉	後葉
山ノ下	北東部	掘立柱建物1								
		掘立柱建物2								
		掘立柱建物3								
		掘立柱建物4								
		掘立柱建物5								
		掘立柱建物6								
		掘立柱建物7								
		掘立柱建物8								
		掘立柱建物9								
		掘立柱建物10								
平ノ前	P4	掘立柱建物11								
		掘立柱建物12								
		掘立柱建物13								
		掘立柱建物14								
		掘立柱建物15								
		掘立柱建物16								
		掘立柱建物17								
		掘立柱建物18								
		掘立柱建物19								
		掘立柱建物20								
		掘立柱建物21								
		掘立柱建物22								
		掘立柱建物23								
南西部	南西部	掘立柱建物24								
		掘立柱建物25								
		掘立柱建物26								
		掘立柱建物27								
		掘立柱建物28								
		掘立柱建物29								
		掘立柱建物30								
		掘立柱建物31								
		掘立柱建物32								
		掘立柱建物33								

陶磁も出土しており、遺構、遺物ともに傑出している。また、掘立柱建物1・4・6・8は廻付建物であり、建物の格式が高められている。掘立柱建物6・12には溝が伴っており、雨落ち溝または区画溝の可能性が考えられる。

掘立柱建物の帰属時期については、検出した遺構面、建物の主軸、出土遺物の年代観、放射性炭素年代測定の結果をもとに総合的に判断し、検討を行った(第175図)。出土遺物がないなど、帰属時期を決定する根拠が薄いものについては、Ⅲ・Ⅲ-1・Ⅲ-2層出土遺物など調査区内で出土した遺物の年代観などを参考にして、大まかな時期幅を与えている(第56表)。建物の帰属時期は概ね11世紀後葉から13世紀中葉までの時期に集中し、調査区南側のエリアには11世紀後半から12世紀中葉に帰属する建物、調査区北側では12世紀後葉から13世紀中葉に帰属する建物が多い傾向にある。また、遺跡内においては、数棟単位で集落が変遷していたものと考える(第175図)。

室町時代以降

13世紀中葉以降には、土地利用が居住域から耕作域へと変化する。調査区南西部に検出した747溝群は、13世紀中葉以降の耕作痕跡である。北東部では7・10田などが14世紀初頭以降に営まれる。747溝、7・10田等の検出面直上のⅢ-2・Ⅲ層は、層相解析の結果、塊状構造を呈し、土壤生成作用の影響を強く受け、腐植を多く含むと評価されており(第5章第1節)、耕作地への転換を補強するものと考える。

1～3田は16世紀以降に営農されており、13世紀中葉以降、連綿と耕作が行われていたものと想定している。

第2項 平ノ前遺跡の遺構

平ノ前遺跡では、A1区とP4区の2地区について調査した。遺構は溝1条と掘立柱建物2棟を検出している。調査面積が少なく、遺構数も少ないとから、遺跡の全体像をつかむことは困難ではあるが、調査で確認した遺構について成果をまとめてみたい。

縄文時代

A1区に自然流路とみられる堆積を確認した。遺跡西側の通称、天神野台地裾部の平坦面を流下し

第6章 山ノ下遺跡・平ノ前遺跡の総括

ているものと想定している。調査区内の堆積状況と周辺の地形等から判断し、A1区は流路の流心部分にあたるものとみられる。流路の変遷の過程で、縄文時代晚期後半の土器を含む土壌層(6層)が生成されていること、流路埋没後の堆積である2層中より11世紀後葉から12世紀中葉の土師器坏が出土していることから、自然流路は、縄文時代から平安時代にかけて埋没したものと想定している。

古墳時代

P4区から、古墳時代前期中葉の溝1条を検出している(21溝)。埋土は黒褐色シルトを主体とし、恒常的な流水の環境下にはなかったものと考える。21溝は7段階の変遷が認められ、21溝-5・6段階では西側から北側に向けてほぼ直角に屈曲することが確認できた。このことから、当該期の集落がP4区西側に広がり、何らかのものを区画する意図で21溝が掘削されたものと想定している。

平安時代から鎌倉時代

A1区には、古代以降に踏み込まれた牛とみられる偶蹄目の足跡を検出している。耕作に使役された際の痕跡とは認められないものの、近隣に耕作地が広がるものと推察される。

P4区には、12世紀後葉から13世紀中葉の掘立柱建物2棟を検出している(掘立柱建物1・2)。掘立柱建物1は総柱建物であり、掘立柱建物2は廂により格式が高められている可能性がある。狭い調査区内に2棟を検出しており、周辺に居住域が広がる可能性が高く、A1区検出の自然流路埋没後に平ノ前遺跡周辺が開発されたものと想定している。なお、同時期の建物は、山ノ下遺跡北側に4棟、調査区中央に1棟が検出されている。このころから、天神野台地東側裾部に空閑地を置きながら、数棟単位の集落が点在していた景観が復原される(第175図)。

第3項まとめ－山ノ下遺跡・平ノ前遺跡の掘立柱建物－

山ノ下遺跡と平ノ前遺跡では、10世紀後葉から13世紀中葉に帰属する掘立柱建物を合計20棟検出し、数棟単位で連綿と集落が変遷することを確認した。検出した建物のうち、1/5が廂により格式が高められた建物であるほか、山ノ下遺跡検出掘立柱建物13のような地域の中心的な施設と考えられる建物を検出している。

両遺跡は古代の小鴨郷に所在するものとみられる。当地は伯耆国守の在庁官人と考えられる小鴨氏の出身地であり、両遺跡に建物が造営される時期は、小鴨氏が勢力を拡大する時にあたる。このような地域の社会情勢とともに、越州窯系青磁をはじめとした貿易陶磁や京都系土師器の検討も踏まえると(本章第2・3節)、両遺跡において検出した建物群は小鴨氏に関連する施設である可能性が考えられる。その場合、山ノ下遺跡検出掘立柱建物13は小鴨氏有力者の居宅である可能性も考えられよう。

参考文献

- 新編倉吉市史編集委員会編 1995a『新編倉吉市史 第一巻 古代編』倉吉市
新編倉吉市史編集委員会編 1995b『新編倉吉市史 第二巻 中・近世編』倉吉市

第2節 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の分析

山本 信夫

はじめに

山ノ下遺跡からは、実測図非掲載資料を含め、86点の貿易陶磁が出土している。これらの多くは細片であるが、筆者の同定によって、全国的にも稀少な越州窯系青磁を含むなど、当遺跡を評価するうえで重要な資料であることが明らかとなった。

本節ではその同定結果とともに、同定結果をもとに行った定量分析の成果を報告する。

第1項 陶磁分類の前提

山ノ下遺跡出土貿易陶磁は細片を含め全点抽出しているが、分類確定できても復原できるものは少数で、挿図には残存部断面や側面形状のみとしたものが多い。後段では本遺跡出土陶磁の関連図(第177~181図)を補足したので合わせて参照願いたい。

陶磁分類については下記文献を基本的に使用する。

(1) 山本信夫ほか「大宰府条坊跡XV 貿易陶磁分類編」『大宰府の文化財第29集』2000 太宰府市教育委員会

8世紀後半~14世紀前半の貿易陶磁、型式分類と編年。今回報告の個別陶磁分類について、詳細を知る場合に参考となり、別表には個々の属性に関する共通要素や違いに関する手引き表を付けている。遺物名は「類」を使う。

(2) 森田勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』1982

白磁14~16世紀、A~E群の分類、時代順にA・B・C・D・Eの5群に分類。遺物名は「群」を使う。

(3) 小野正敏「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』1982

明染付の分類、15~16世紀。遺物名は「群」を使う。

(4) 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』1982

遺物名は「類」を使う。

これらの中で年代の重複する部分に関しては大宰府条坊跡XVの分類記号を優先して使用した。一例として(1)で分類化されていない14世紀後半以降の龍泉窯系青磁分類は(4)の上田分類II~IV型式を使う。しかし(上田)AI類=(大宰府)III類、BI類=IIb類(旧版I 5 b類)、BI'・CI・DI類=IV類であり、この部分は(1)の大宰府分類を使う。各分類は記号数字の重複で混乱しやすいため、(1)以外は先頭に分類者名を付す。

第59表には全点の層位・遺構別の陶磁分類内訳があり、第3章に実測図を掲載していないものも含む。

第2項 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の分類

1 遺構出土の貿易陶磁の分類

第1面 1田出土陶磁器（第59表、図版80）

白磁

椀 Po297はII 3×4 b類体部。内面端に細い白堆線がある。II類は小玉縁1類と直口に近い3・4類があるが白堆線bは1類にはつかない。

第1面 2田出土陶磁器（第23図、第59表、図版79）

白磁

椀 Po7は森田E群で口縁は外反する。口径はやや大で皿とは異なる。

第1面 3田出土陶磁器（第23図、第59表、図版77、78、79、80、81）

白磁

椀 Po301はIV類口縁。Po6はV2a類で表土と搅乱層出土の破片が接合した。類を確定する高台を欠損するが、体部下半は丸味が強く、体部上半は直立味、外反口縁という点でV2a類の典型である。

龍泉窯系青磁

椀 Po9はIV類または上田BII類で、口縁は外反し、外面は鎬蓮弁文がある。この鎬は銳利さを欠き鈍い。蓮弁の形も歪である。Po292は上田BIVで外面には略化した線蓮弁文がある。Po293は類確定困難であるが元から明代であろう。

小椀 Po10はIII類高台部で内外厚く全面施釉後、高台墨付の釉のみ掻取りされる。III類の小形品の墨付は細く尖り気味が多いが、本例は平坦で手法は促成的な感がある。これを(')として分ける。

坏 Po8はIII4b類。上の小椀IIIに比べて高台墨付に銳利さを持つIII類の典型である。体部外面には鎬蓮弁文、底部内面には貼付双魚(貼花)文の一方の尾鱗が残る。施釉は厚く、釉色も良い製品である。

染付

椀 Po11は小野E群である。

第1面 668溝出土陶磁器（第59表、図版80）

白磁

椀 Po306はIV～VIII類体部。

第2面 掘立柱建物12（666溝含む）出土陶磁器（第29図、第59表、図版79）

白磁

椀 Po43はII 4類。破片は大きいが口縁部、高台部を欠する。底部内面には段を持つので細分可能となる。内面は無文である。第1面出土品には内面に白堆線文を持つII(3×4)があり、これは別個体と分かる。

第2面 667溝出土陶磁器（第30図、第59表、図版78）

白磁

皿 Po49はII 1類。高台径から見ると通常サイズよりもやや大きめである。口縁部は欠損し細分はできない。

第2面 657ピット出土陶磁器（第34図、第59表、図版79）

白磁

椀 Po64はIV1a類高台。

第2面 7田出土陶磁器（第40図、第59表、図版77・79）

白磁

皿 Po70はIX1類底部。全面施釉であるが底部外面の釉は不完全で、釉は板(刷毛)状のものでなでつけている。全面施釉とするがこうした一種手抜きと見られる例は多い。口縁は欠損するが口縁部の釉は搔き取りする(口禿)。F期基準資料。

龍泉窯系青磁

小椀 Po71は椀IIa類に対応する小椀である。外面は片彫蓮弁文で鎬はない。

第3面 9溝出土陶磁器（第42図、第59表、図版77）

龍泉窯系青磁

椀 Po79はIIb類口縁部で外面に鎬蓮弁文がある。

第3面 13溝出土陶磁器（第59表、図版78）

龍泉窯系青磁

椀 Po295はIまたはIV類で確定できないかII類の可能性がある。口縁部内面に2条の圈線がある。

第4面 掘立柱建物13出土陶磁器（第94図、第59表、図版78）

白磁

壺類 Po101は712ピット出土。小片であるがII類である。外面釉は貫入が多く内面には施釉しない。

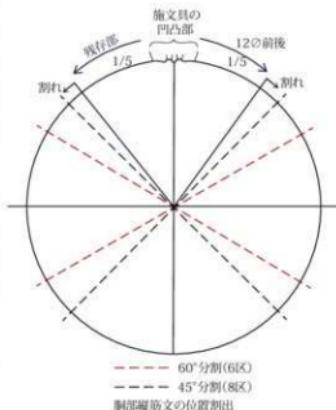
椀II類と同じ群で、产地は広東省である。

越州窯系青磁

壺・水注類 Po102は718ピット出土。この陶磁は北宋時代の越州窯系青磁III類と見ているが、類を決定できる部分が欠落し、また釉や胎土なども典型的なものと完全一致ではないため分類確定に迷う点も残る。出土した2片は胴部破片で接合しないが同一個体である。破片は傾斜が少なく胴部中位から下位にかけての部分となる。

鑑定した当初は淡い釉調から、白磁の可能性も考慮した。白磁の中には白色よりも灰緑色味、灰色味、灰青色、青白磁的な緑味の水色など、一見淡い青磁釉と誤認しやすい例があるためである。従って越州窯系青磁III類にこうした発色があるかを検討した結果、青磁とするに至る。

外面は筋引きによる2条の縦線凸帯文によって区画される。残存部は復原径の1/5で凸帯文はその中位につく。これから区画分割を復元すると計算上は360度/45度=8区画が可能な最大数となるが、類品では6分割が一般的で本



第176図 Po102越州窯系青磁・
残存胴部径と施文位置図

例も同様6分割であろう。施文具の先端形状は胴部横断面につく形の凹凸を逆にしたものとなる(第176図)。釉は外面に掛かり、内面には施釉しない。釉色は灰色味を帯び、若干濁った半透明の淡黄緑色で、一部気孔がある。胎土は灰色で黒斑が僅かにあり、気孔もある。外面調整は削り調整で良い方だが一部に窓のアタリ痕があり、窓削りの際に見られる。内面は輪轍目の横筋が顯著で器面は斑状の灰色をなす。

これらの点は最上質の越州窯系青磁よりも一歩品質が落ちる印象を持つ。III類はB期(10世紀後半から11世紀中頃)出現の標識陶磁であるが、実際の出土例から見ると次のC期供出例も多い。またこれは椀盤などの食器例の出土編年によるところが大きく、稀少な器種となる壺・水注などは良好な出土例を聞かない。これらの点は類例も含めて後述する。

なお掘立柱建物13は同じ位置で新古2度建替があり、718ピットは新期の方の柱抜き取りに属する。別の712ピット出土陶磁は白磁壺II類・上限C期であり、掘立柱建物13(新期)はC期とみられる。

2 包含層出土の貿易陶磁の分類

Ⅲ層出土陶磁器 (第149図、第59表、図版77~80)

白磁

椀 Po210はIV類口縁。Po249はV1またはVIII2類の直口縁で、底部欠損の場合確定に難があるがVIII類の可能性は大きい。Po308はIV~VIII類の小片。

皿 Po211はVI類。体部上半が欠落するため中分類は不明である。底部は平底で体部下位から屈曲し、飛出し気味となる。こうした特徴はVIIa類に多い。

青白磁

椀または皿 Po215は椀または皿の口縁部で口縁は切込みを入れ、体部は外面から窓を押圧して花形とする。薄手で釉色も上質である。

龍泉窯系青磁

椀 Po281はI1~4類体部である。内面には窓線らしいものが一部つくが文様が不明である。Po213・279・280・212は内面に片彫、櫛目などの花草文を有する。Po213・279はI2類、Po212・280はI2~4類である。Po214・282・283はIIb類で外面に鎬蓮弁文がある。Po289はIII2C類で外面に鎬蓮弁文がある。

陶器

壺類 Po216はB群に属し、出土陶器のうち、比較的大きな破片である。内外面に施釉され、形状から壺類体部下位と見られるが分類は不明である。B群全体の年代幅はC~F期である。

3 その他の貿易陶磁

Ⅱ・Ⅲ層出土陶磁器 (第154図・第59表、図版77~79)

白磁

椀 Po250はVIIb類。高台は内際の削り込みで端部は尖るが、通常は疊付は平坦面をなす。底部内面に圓線状の段があり、この段の径は高台径よりも小さく中心側に寄る。体部内面には櫛目文を入れる。

龍泉窯系青磁

椀 Po259はIV類高台形。高台部外側は節状に段がつき、疊付から底部外面には施釉しない。高台内際を深く削り込み底部中央部は削り取り不整で凸状をなす場合が多い。底部内面は細い陰刻・

草花文の印文がある。Po285はIIb類。

表土出土陶磁（第154図、第59表、図版77～80）

白磁

椀 Po243・246はIV1類高台。内面の底部、体部境には圓線を回す。体部下位から底部外面は施釉せず露胎である。C期標識資料。Po304はIV・V類の体部下位と見られる。やや薄手で内面には段を有する。施釉も良い方である。この点で一時期 古いXI類まで範囲を広げてもよいかもしれないが高台欠損のため難がある。Po248はV類高台である。

皿 Po252はIX1類底部で内外全面施釉。口縁は欠損するが口縁部の釉を搔き取りする（口禿）。底部内面は使用の汚れが目立つ。F期標識資料。Po251はVIIb類の底部。底部外面は削り出しによる小さく低い高台を持つ。縮尺図では高台特徴が出にくい。底部内面に2又の櫛（篦）描きの線文がある。底部外面は施釉されず露胎。同じ産地の皿VI類よりも丁寧な製作例が多い。C期標識資料。

青白磁

合子 Po267は小片で形態は不明。内面は施釉されず小形合子蓋である。C.D期と見られる。

龍泉窯系青磁

椀 Po256はIIa類。D期標識資料。Po284・286・288はIIb類。外面は錫蓮弁を持つ。E期標識資料。

香炉 Po264は口縁部で器肉は厚く胎土も良い方である。釉は口縁内外にやや厚く掛かり、釉色は薄緑で発色は良い。内面下位・底部は欠損するが露胎の場合がある。口縁は単調で断面方形をなし明代と見られる。

同安窯系青磁

椀 Po254はIII類。口縁以下体部外面にかけ、粗い幅広の縱櫛目文を持つ。D期標識資料。

陶器

器種不明 Po314は陶器B群に属する。器種・分類は特定できない。この場合陶器B群はC～F期（11世紀後半～14世紀初頭）の範囲となる。

搅乱土出土陶磁（第154図、第59表、図版77～81）

白磁

椀 Po296はIIIa口縁部、Po298はII類の体部である。Po299・302はIV類。Po303はIVまたはV類の体部下位である。Po247はV4b類の口縁で端部は嘴状に鋭く外へ出る。内面口縁下の圓線以下に櫛目文があり、この点から高台欠損でも同様な口縁を持つVIII1・3類とは区別できる。Po242はIIa類口縁で小さく玉縁とする。Po244はIV1a類高台。内面底部と体部境に圓線を入れないものもあり、この場合aに包含する。Po300はIV類口縁。Po245はIV1a類高台（内面の体部、底部境が圓線か大きく窪む段がつくかは不明の場合はa・bの細分は不要である。）。Po305はV～VIII類、Po309・310はIV～VIII類破片。

Po311は釉調から青白磁に入る可能性はあるが不透明な釉であり、内面の釉面に一部気孔がある。口縁端部が薄く体部器肉が急に厚くなるなど違和感もあり、白磁・森田B群に属す可能性もある。この場合はやや手の落ちるB'となる。

壺 Po313はII類の壺または水注胴部片で内面は施釉しない。

青白磁

■ Po266は底部の外面は露胎であり外周部に黒色砂の目跡が焼きつく。体部薄手で良色釉の部類。内面には歯数の多い櫛と2又の櫛(籠)描きの線文がある。

合子蓋 Po312は体部の破片で内面口縁側は施釉せず蓋とみられ、径はやや大きい。胎土・釉とも良質である。

龍泉窯系青磁

椀 Po255はIまたはII類高台。Po287はIIb類。Po261はIV類または上田DII型式で口縁部は外反する。口縁断面は肥厚化しDII型式と見られる。体部内面には陽刻・印花文がある。Po258はIVイ高台で内面底部中央に細い陰刻・草花文の印文がある。Po290はIII1A類外反口縁。薄い器肉に厚く施釉され、無文で典型的なIII類属性を持つ良品。Po257はIII2C類体部。釉は暗緑色で厚めに施釉される。Po260はIV類で高台外面疊付は釉を搔き取り、底部外面も施釉しない。釉は黄味の強い緑色で、上質とは思われないが断面に漆着け補修痕がある。Po263は上田BIV類の口縁。Po262はIV類口縁。胎土は灰白色、釉はやや厚めで色は澄んだ緑色を呈しIV類の中では良質の方に属する。

その他 Po294は小片でやや厚味の胎土や厚めの釉から椀IIbや盤IIIの可能性がある。Po291は厚手の器肉に厚く施釉され盤IIIまたはIV類の可能性がある。

同安窯系青磁

椀 Po253はIIb類。外面に齒幅の狭い縱櫛目文がある。

染付

椀■ Po275は小野B群の椀皿

器種不明 Po274は体部片で類は不明。

陶器

壺 Po265は壺類胴部片で、B群または高麗青磁の可能性がある。緑灰色の釉は内面にも掛かる。C・D期の可能性がある。

表採（第59表、図版80-1）

白磁

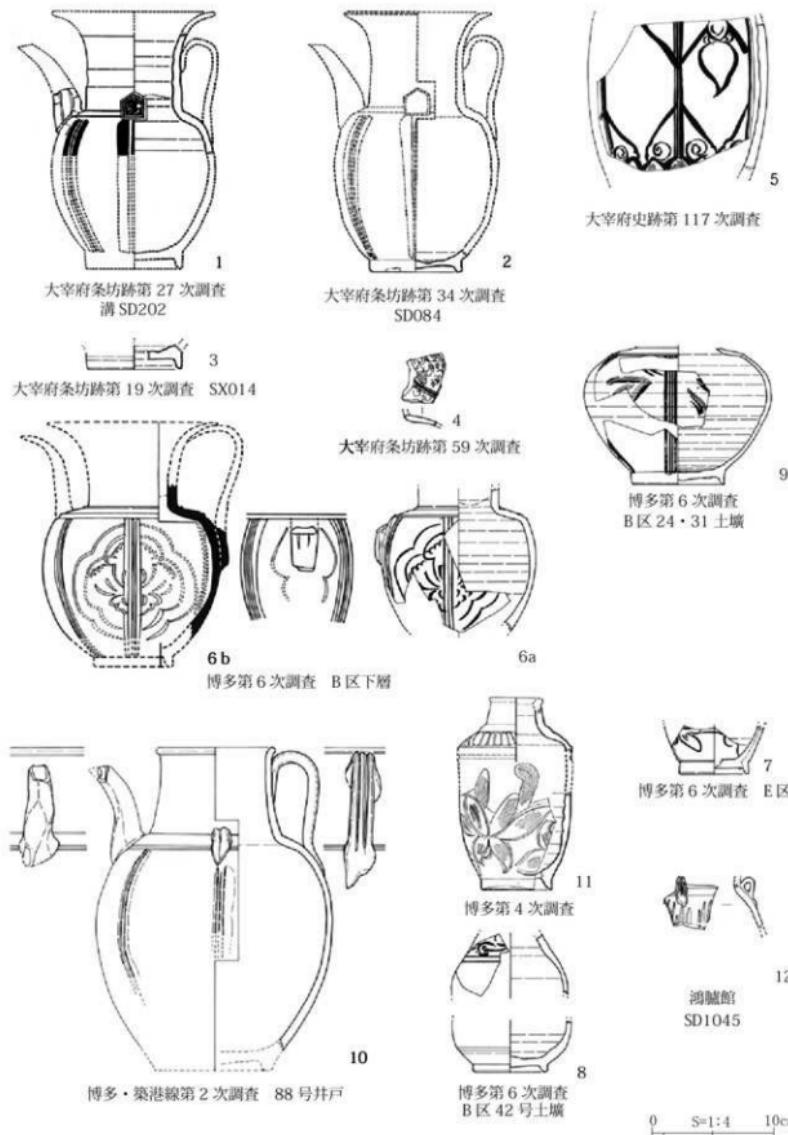
椀 Po307は表面採集した白磁椀II-VIII類破片である。

層位不明（第154図、第59表、図版81-1）

染付

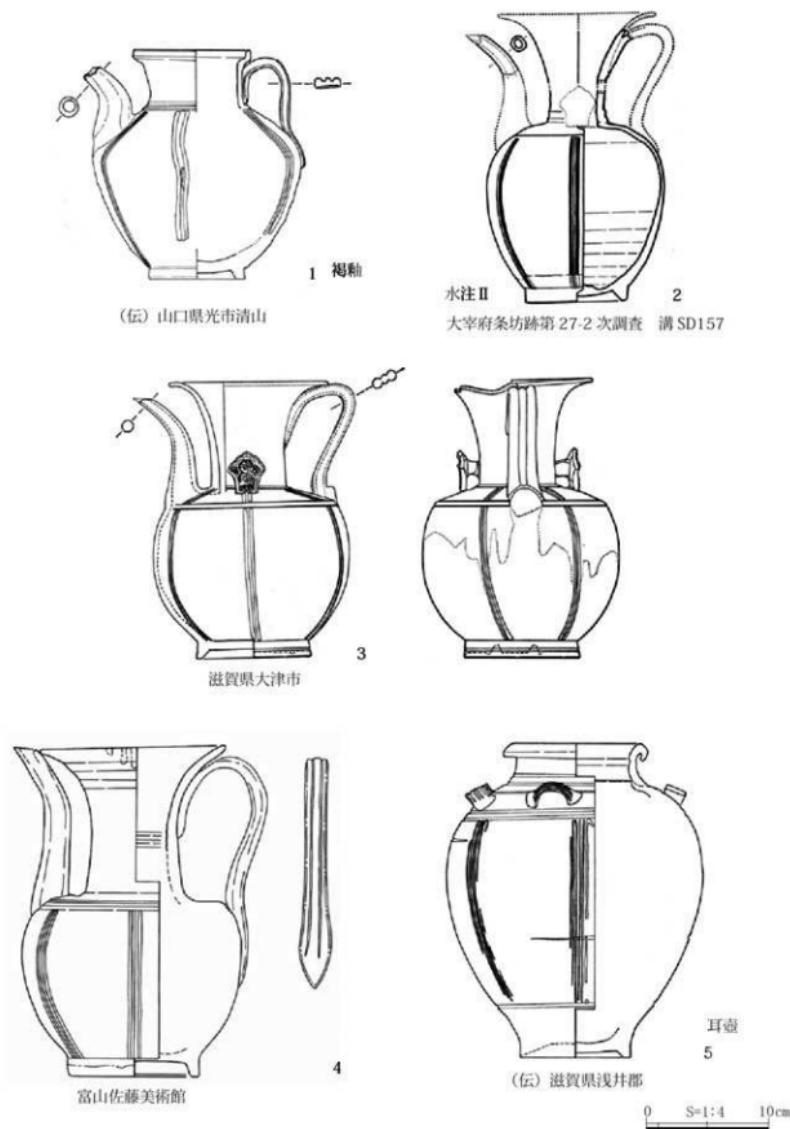
椀または皿 Po273は東西トレンチより出土した染付椀または皿である。小野B群である。

越州窯系青磁



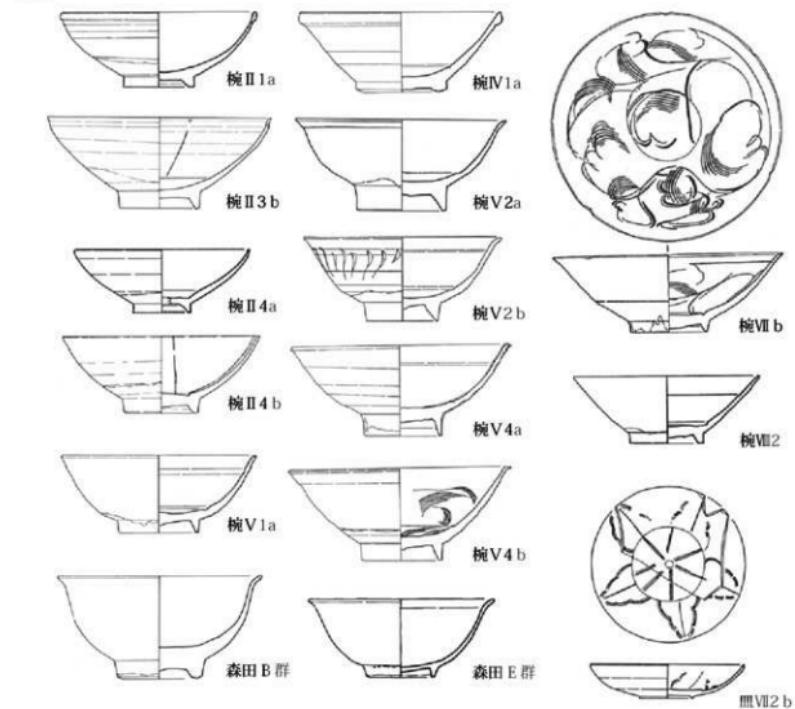
第177図 出土陶磁関連図（1）

白磁 陶器

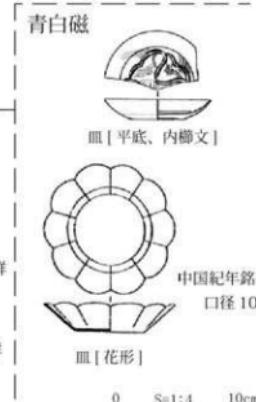
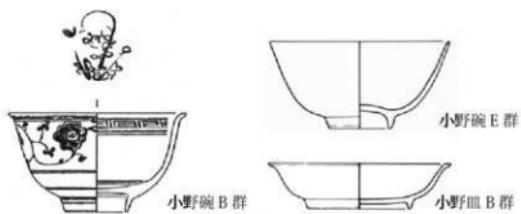


第178図 出土陶磁関連図（2）

白磁

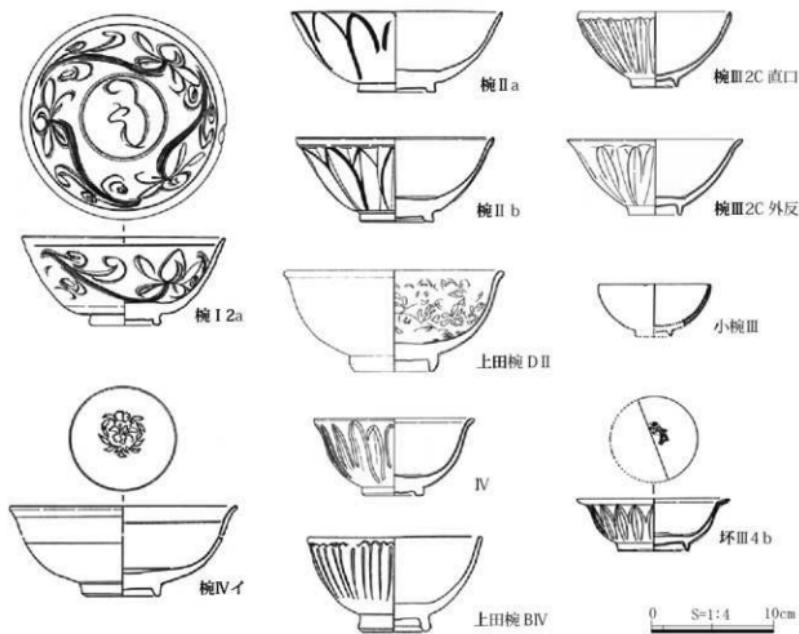


染付

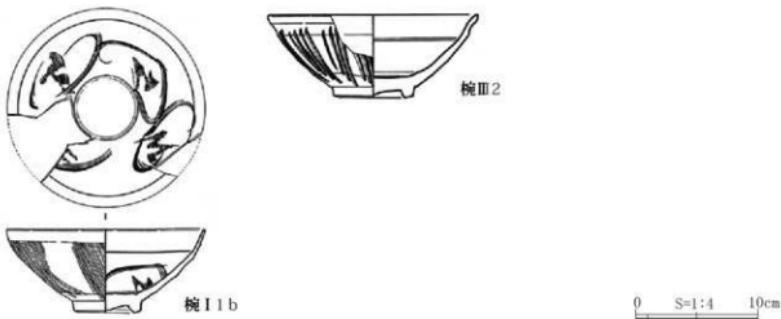


第179図 出土陶磁関連図（3）

龍泉窯系青磁



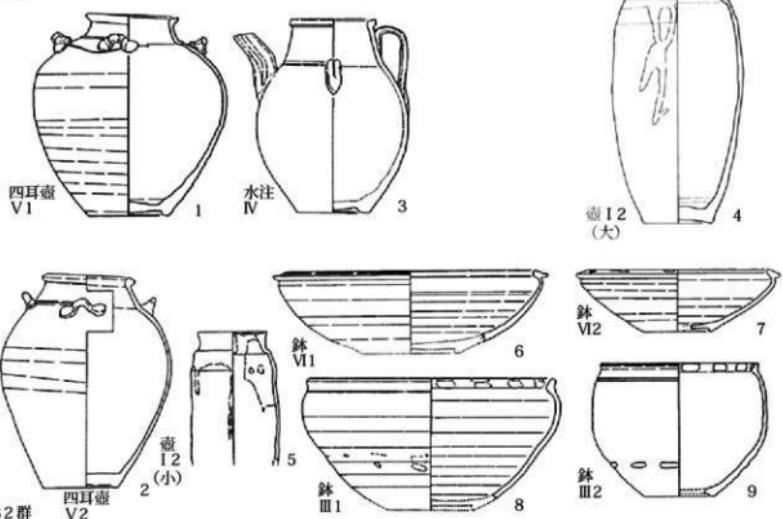
同安窯系青磁



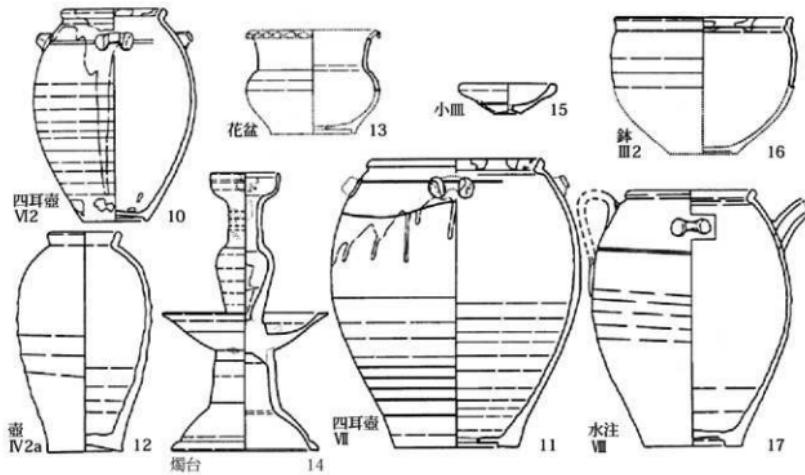
第180図 出土陶磁関連図（4）

陶器B群

B1群



B2群



0 S=1:5 15cm

第181図 出土陶磁関連図（5）

第3項 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例（第177～181図）

分類で全体の形状が判明する資料は少ないため、出土陶磁関連図(第177～181図)を補足した。ただし複数の形態が考えられる資料は省いている。これは白磁壺・水注類II類、龍泉窯系碗IV類などがある。陶器はB群が少数あり、壺・水注類以外の器種も示しているが比較的広域に出土するものを中心にしており、B群はC・D期とE-F期に大別され、B1群はC期出現、B2群はD期出現、B3群はE-F期となる。破片では分類特化は難しく、出土報告では「陶器」という記載に止まる事が多い。また貯蔵用途の器種ならば宴會などの場に供される事も少ないと想定され、食器に比べて流行にはあまり縁がなく、形態はやや長く保持された可能性もある。

参考図の器種分類は以下のものである。

器種	分類
白磁	壺IIa、II3b、II4a・b、IV1a、V1a、V2a・b、V4a・b、IIIb、III2、森田B群、森田HE群、壺II1a、VI1a・b、VII2b、BK1、壺水注II
青白磁	壺(花引)、壺(平底)、内側文
越州窯系青磁	水柱型
慶州窯系青磁	壺I2a、IIa・b、III2C直口・外反、IV1、IV2または上田D-II内印花、上田HIV、小輪壺、环III4b
阿蘇窯系青磁	壺I1b、III2
染付	小野焼E、B、鹿B群
陶器	B群壺、水注、鉢ほか

第4項 分析結果

1 掘立柱建物13の貿易陶磁と年代

建物関連の出土陶磁器は掘立柱建物12に伴う666溝と、大形の掘立柱建物13柱穴出土資料のみであり、少数である。大形縦柱の掘立柱建物13は規模から見て特異なもので、この造営の背景を一步深めるために時代考証や遺物の特質といった点を明らかにしておく必要がある。

まず掘立柱建物13に関する層位関係を再確認しておく。調査区北東部III層と南西部のIII-1・2層はそれぞれ不連続の部分的堆積であり(第3章第2節)、掘立柱建物13の時期検討に関する部分は南西部のIII-1・2層である。層位的に①掘立柱建物13(A古・B新)→②III-2層→747溝群(一時の耕作関連)→③III-1層→掘立柱建物12の666溝→667溝の順に古→新の関係がある(検出面では①4面→②3面→③2面と表示)。①掘立柱建物13(A古・B新)は同位置での建替えがあり、A・Bの時期差は大きく開くわけではない。掘立柱建物13Bでは越州窯系青磁III類(B～C期)、白磁II類(C期)の出土からC期が上限となる。掘立柱建物13Aはこれよりも先出するが、13Aの年代を確定できる陶磁・土器は無い。

掘立柱建物13Bの柱穴718ピット出土品は越州窯系青磁壺・水注III類と見られる胴部破片2点で、接合しないが同一個体と断定される。これはB期上限となるが使用はC期まで、またC期生産品とも考えられる。越州窯系壺・水注III類は第5項で再度取り上げる。掘立柱建物13B柱穴の712ピット出土品は白磁壺・水注II類胴部が1片がありC期である。

③掘立柱建物12の666溝、667溝出土陶磁はC期白磁である。

④掘立柱建物13Bから③までに伴出する陶磁を見るとC期内となり、また在地土器でも11世紀後半から12世紀前半・中頃の範囲内に収まるので、①掘立柱建物13Aの建設開始から比較的短い期間内に建物群の活性化があった点は確かであろう。以下、貿易陶磁全体の分析結果においてこの点が追認できる。

北東部にも多くの建物群が検出されたが、これらについては良好な層位状態を示すものがない。各建物の一定生活面が不明となっているが北東部北側の建物群の直上で検出された7田はF期、9溝はE期、また一部残るIII層の陶磁はF期までである。北側一帯の建物群の存続時期幅についてはIII層出土陶磁からはF期までとなり、建物群の終焉時期については13世紀中葉から後葉、降っても14世紀初頭までと考えられる。

遺構に帰属する陶器はごく少数のため、確実さを優先すると限られたものとなる。この場合遺構から遊離した陶磁器の総量分析を行う事で、一步内容を深める事ができる。

2 分析方法

(1) 遺構・土層帰属の接合資料における陶磁点数表示法

上層、下層で接合する資料の場合は本来古い下層に帰属したものとなり、上層では点数をさし引く。同様な理由で二つの遺構接合では古い遺構に帰属させる。この場合の数量表現方法として、上層では分類記号と点数は記載したままでし、例えば点数は「1△1」のような記載がよい。意味は「1点出土したが、他の(古期)遺構と接合したため1点は他の遺構に含めてマイナスし、ここでは0数となる」。最初は発掘記録順の機械的な操作でよいが、検討が進むと、逆に古期層や古期遺構に新しい層や遺構から混入の疑いも出て来る場合があるが、この場合「混入か」など付記が必要となる。混入の是非は本来調査現地で気づく事が望ましいが、考古学調査担当者1人に対して、発掘作業者が10人以上という場合が多く、余裕がないと調査基本の完全クリアも難しい事が起りうる。また全体精度をあげるためにには供出した土師器、国産陶器などの時期把握は不可欠である。

(2) 同定に関する表示方法

×...椀II(3×4)類など、×は「or」の意味に用いる。

[]...DII類 [印花]など [] 内は簡単に特徴を表記する事がある。

白磁椀IV～VIII類...体部破片など器形特徴の判断部分がない場合で、IV～VIIIは胎土や釉調は同一である。椀IV,V,VI,VII,VIII類までの分類のどれかである。小片では椀、皿の区別も難となる場合が生じるが、この場合は皿III,IV,V類の一部、VIII類を含むため分類表示に皿II～VIII類も付け加える事となる。あまり表示範囲が広くても記号ばかりで直観できない。こうした場合「白磁片[C～D期]」など集約化した記号としてよい。

白磁椀V1×VIII2類 [口縁]...口縁部形態は両者共通の直口縁である。高台欠損の場合判別がつきにくい。高台欠損でも体部中・下位まで判明する場合、V1類とVIII2類は判別可能な点を次にあげるが、これも完全とは言えない。V類は中・下位にかけて丸味があるが、VIII類は直線的で喇叭状に開く形である。白磁椀V1の体部上半は中位以下の内湾度(丸味)のため、比較的直立ぎみであるが、椀VIII2の体部は喇叭状をなすため、かなり斜めに傾斜を持つ。

口縁部のみの破片の区別点として、口縁端部の稜線の付き方を見る。V1類端部は口縁外側に寄るが、VIII2類端部は口縁内側寄りである。VIII2類の端部処理は同安窯系青磁椀I類や、皿の口縁部と同様な「くせ」であり、白磁椀VIII2類や同安窯系青磁碗I類・皿は福建省産のD期編年に該当するため、相互の製作時の共通性と理解できる点がある。V1類はC期、VIII2類はD期で出現時期は異なるため、細分に注意が必要。

福建省産のD期白磁碗VII類の口縁は直よりも外反傾向があり、口縁端部稜線は外側寄りであるから、上の点は白磁碗VIII2類における限定的解釈である。

白磁碗IV・VI-V3・V4・VI・VII・VIII類はC期・D期に分かれる。C期IV・VI-V3・VI類、D期V4・VII・VIII類となる。遺構中に碗IV～VIII類のC・D期不明となる破片があれば、他の個別分類が明らかな供出陶磁からC・D期を決する事も可能であり、在地土器編年の1型式年代幅が陶磁器区分よりも狭く、安定的ならばまずこれが年代観として優先される。この観点で遺構がC期の可能性大ならば碗IV～VIII類は「C・D期」という表記ではなく「C>D期」とするのが適切である。遺構外のものはこの検討が無理となり「C・D期」表記となる。

(3) 出土陶磁器の分析方法

貿易陶磁を全点数分類し、時期を概観することにより、遺跡の時期幅、活性化した時期、消費傾向、使用階層などを導き出す基礎が把握できる。通常、資料の考古的厳格性にもとづき、資料レベルを上位から下位に分け、上位レベルの安定的な遺構別、層位に帰属する遺物群を重視しながら、出土状態が良好でない下位レベルの資料も含めて総括する。

扱う資料のうち、近世および近・現代陶磁は除外する。陶磁は可能な限り分類し、個別分類に特定できない特徴を決する資料についても何らかの年代基準を設定し、その範囲に入れる。上述した例にこの点を一部示している。以上の方法で形態的特徴不明の体部小片などもある範囲に計上する事で陶磁構成内容に迫る事ができる。

(4) 陶磁器編年

編年表は筆者の旧版に出土確実となった点を一部修正したものであり、編年自体の根幹に変更はない。本書では現状における最新の編年表(第61表)を提示し変更点について補足しておく。

①イスラム陶器(準標識)はA期古に移動する。以前はA期新(9世紀第3・4四半期)出現としていたが、奈良西大寺の良好な出土例から一步遡るA期古(8世紀後半～9世紀前半)に上がる(註1)。

②「福建窯系青磁」をF・G期準標識に追加する。ここでいう「福建窯系青磁」とは、沖縄県今帰仁城下層で最初に位置づけられた「今帰仁タイプ白磁」(註2)を含む一群を指し、大方は白磁とする考えが多い。D期開始の同安窯系青磁の後続型式として考え青磁範疇に含めた。製品の特徴として、器種が少なく、一部は刻花蓮弁や内面見込みに印文を持つが、無文のものが多い。底部内面の施釉方法は釉の環状搔き取りを行うものと施釉しないタイプがある。釉色は淡色化し灰色や灰緑味に傾き、器形や施釉の特徴は青磁と白磁の一方に分け難い点がある。この釉色灰味の傾向は一步古い同安窯系青磁にもあり、白磁・青磁の区別が曖昧となる福建系磁器の独自の特色とも言えるかもしれない。国内出土では在地土器共伴の例は少数に止まり、F・G期の標識陶磁と供する例がある。F期・13世紀後半の例としては長崎県・鷹島沖発見の元沈没船積載品で確認された碗数点がある。これは器形、施釉法では2分され、うち1つは底部内面に施釉しない狭義の「今帰仁タイプ」である。鷹島沈没船の陶磁は元軍船備品や船員所持物で日本への貿易品ではないが、一つのF期参考例となる(註3)。福建窯系青磁F期とG期の区別化については検討を要する。本土では博多や九州内で点々と分布を広げているが大量に出土する事は少ない。管見の範囲では分布の北限は東北仙台市・薬師堂東遺跡である。

東南アジアの遺跡ではG期・元の龍泉窯系青磁とともに出土し、明代に入ると減少する。产地は広域に及ぶ可能性があり、福建同安窯系青磁という範疇と区別し、福建省系青磁としておく。

③白磁V4・VIII1-3類をD期準標識からD期標識陶磁に格上げする。この類に伴う在地土器を基準とすると、12世紀前半に確定できる例は増えておらず、それも博多の遺構一部に止まる。C期とするには早計な点があり、確定保留のまま現在に至る。近年V4・VIII1-3類は全国的に相当増え続けているが、在地土器共伴の12世紀初頭まで遡る確実な例は相変わらずない。この実態からV4・VIII1-3類はD期標識陶磁として位置づけ変更を行う。

以上が編年表の主な修正部分である。

3 山ノ下出土陶磁の分類・編年区分（出土上限年代）

第57表に出土陶磁器と年代、第58表に分類別に器種数を示した。〔 〕は食器の大分類数で次の数は大分類に占める中・小分類の数である。分類数はC期白磁[8]（うち広東系5）、D期白磁+青磁[7]、F期白磁+青磁[5]の順に多くなる。C期の器種数がやや多い。

以前には広域における時期別一般食器の器種数分析を行った事がある（註4）。貿易・商業基地となる博多は多種の分類構成となるが、他の遺跡出土の陶磁では限定される一定の類となる事が多い。この広域分布の陶磁分類数を統計的に分析した結果をあげておく。C期白磁は福建系、広東系が主で、碗、皿、小椀を合計した分類数は福建系では大分類11種に包含される中分類25・小分類53種であり、広東系では大分類6種に包含される中分類15・小分類25種、両方を合わせると大分類17種、包含される中分類40・小分類78種が広域に流通した（仮定）最大分類数となる。大分類最大数17種に近い例は、博多14次、大宰府27次、山陰では下関市豊北町の古殿、島根県吉古、出雲国府などである。また畿内平安京一部では6-12種程度、大物遺跡（畿内流通拠点）で12種、岩手県平泉・柳之御所跡でも10種程度である。

これらの遺跡に較べて山ノ下ではC期白磁大分類数は7種・中小分類9種でやや器種は少ない傾向となるが、全体出土数が少な

第57表 山ノ下遺跡出土貿易陶磁と年代

出土陶磁	器種・年代	
	種類	年代
白磁	碗IIa・C期、II3×4件内白麻面I・C期、II4-C期、IV1a-C期、IV-C期、IV1-C期、V2a-C期	
	皿III-C期、VI-C期、VIIb-C期	
	碗II-C期	
	碗II-VII-C×D期、V-VII-C×D期、IV-VII-C×D期、IV-V-C×D期、V1×VII2(C3種)・C×D期	
青白磁	碗V4b-D期、VIIb-D期	
	皿III-XI-F期	
	碗森田山青白磁〔G期?〕	E-1K(16c)
	合子II、合子蓋大・C-D期、皿・C-D期、柄×皿〔花形〕・C-D期	
越州窯系青磁	碗・水口II制瓶筋B・C期IIa	
	碗IIa-D期、II2-D期、II2-4-D期	
	碗IIa-E期、IIb-E期、小椀IIa-E期	
	碗IIIA外反・F期、碗IIIC2-F期	
龍泉窯系青磁	皿III4b-F期	
	小椀IIID3-F期	
	盤IIIIIV-F×G期	
	碗I×IV-D×G期、I×II-D×E期	
同安窯系青磁	碗IV〔上BD1〕-G期、碗IV-G期、IV2-G期	
	碗IV×上BD1〔中花〕-G×H期、IV×上BDII-G×H期	
	合子II明-H期	
	碗上BDIIV-H期、BDIV-H期	
中国陶器	碗IIb-D期、III-D期	
	〔高麗青磁?〕-CD期	
染付・中国	B群型-C-F期	
	碗×盤・小野B-H期、小野B2-H期、小野E-K期	

第58表 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の分類別器種数

出土陶磁	分類別器種数	
	C期	D期
白磁	碗II期55種、皿III3種、合1種、計86種	
	D期：碗35種	F期：皿1種 G2期：碗II期
越州窯系青磁	I期：碗22種	E期：碗22種、小椀1種
	F期：碗22種、小椀II1種、环II1種、计41種	
龍泉窯系青磁	GII期：碗2種	F×G期、盤II期・V1期
	G1期：碗2種	
同安窯系青磁	J期：碗2種	
	H期以降：香炉1種	
中国陶器	D期：碗22種	
	B群2種 (1種は高麗青磁か)	
青白磁	C,D期2種、合2種	
	碗：碗IIK明3種	
染付		

第6章 山ノ下遺跡・平ノ前遺跡の総括

第59表 山ノ下遺跡出土貿易陶磁一覽表

●ル・ヌファン ■ニランク ハド・福井作曲編「マイ不散」古い樂譜に現れる「退入樂隊」時間は曲経を樂譜に合む

い割に分類数は揃っていると見てよい。

4 定量分析

(1) 陶磁の数量化分析、傾向(表59)

今回対象となる貿易陶磁数は計86点である。ランクA・B・Cについては過去解説したものがあり、これを参照願いたい(註5)。

(2) 陶磁器全点分析

a. 単一の時期に収まるもの

単一の時期に収まる陶磁器数を見ると、上位から順位は第1位C期22点(B×C 1点合算)、第2位は同率でD期10点、E期10点、第4位はF期8点となる。C×D期15点は実際順位はC期の次であるが、C・D期の区別不明となる。これ以外の時期ではない事は確定できる資料であるから、C～D期に属する資料が優位となる。

b. 2時期範囲に帰属が確実なもの

単一の時期に収まらず近接した2時期範囲に帰属が確実なものについては時期範囲をやや広くして再集成してやれば、陶磁器出現ピークが鮮明となる。表のB×C期、C期、C×D期、D期範囲を合

第60表 山ノ下遺跡出土貿易陶磁量の比較

調査面積m ²	貿易陶磁(初期用時期別)										H								
	B×C	C	C×D	C×D	D	D×E	E	F	C×F	F×G	G	G7	G×H	J	H	I.R.	H.J		
山ノ下	2000	1	21	0	15	10	1	10	8	2	1	3	2	3	2	1	4	86	
全出土点数に占める割合	%	12	24.4	0	17.4	11.6	12	11.6	9.3	2.3	1.2	4.7	2.3	35	2.3	12	1.2	86	
1点当たり面積	m ²	2000	321	—	467	700	7000	700	875	3000	7000	1750	3500	2333	2600	3000	7000	1750	86
調査面積m ²	貿易陶磁(中期用時期別)										H								
山ノ下	2000	47	—	—	—	—	—	28	—	—		11	—	—	—	—	—	86	
全出土点数に占める割合	%	54.7	—	—	—	—	—	—	—	—	H	12.8	—	—	—	—	—	86	
1点当たり面積	m ²	480	—	—	—	—	—	—	280	—		636	—	—	—	—	—	86	
調査面積m ²	貿易陶磁(後期用時期別)										H								
山ノ下	2700	0	86	7	2	3	—	—	—	—		10	—	—	—	—	—	109	
全出土点数に占める割合	%	30.9	4.1	1.2	1.0	—	—	—	—	—	H	—	—	—	—	—	—	109	
1点当たり面積	m ²	21	386	1350	900	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—	—	109	
調査面積m ²	貿易陶磁(大別時期別)										H								
山ノ下	2700	—	—	—	—	—	—	—	—	—		11	—	—	—	—	—	109	
全出土点数に占める割合	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	H	—	—	—	—	—	—	109	
1点当たり面積	m ²	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—	—	109	
調査面積m ²	C(11c)期～12c期										H								
山ノ下	2700	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—	—	109	
全出土点数に占める割合	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	H	—	—	—	—	—	—	109	
1点当たり面積	m ²	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—	—	109	
調査面積m ²	C(11c)期～12c期										H								
山ノ下	2700	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—	—	109	
全出土点数に占める割合	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	H	—	—	—	—	—	—	109	
1点当たり面積	m ²	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—	—	109	
調査面積m ²	貿易陶磁ランクA・B(初期用時期別)										H	貿易陶磁(ランクA・B(中期用時期別))				H			
	B-C	C	CD	D	E	F	F×G	C×F	HJ期	C1D		D	C-E						
山ノ下	2000	1	2	4	0	0	0	1	1	0	1	10	3	0	2	3	3		
全出土点数に占める割合	%	12	23	4.7	0	0	0	12	1.2	0	1.2	11.6	12	0	2.3	3.3	3		
1点当たり面積	m ²	2000	2500	1750	—	—	—	7000	7000	—	7000	700	2000	—	—	3500	2333		
調査面積m ²	貿易陶磁ランクA・B(中期用時期別)										H	貿易陶磁(ランクA・B(中期用時期別))				H			
	B-C	C	CD	D	E	F	F×G	C×F	HJ期	C1D		D	C-E						
山ノ下	2000	—	—	—	—	—	—	—	1	10	3	0	2	3	3	3			
全出土点数に占める割合	%	—	—	—	—	—	—	—	1	10	3	0	2	3	3	3			
1点当たり面積	m ²	—	—	—	—	—	—	—	1000	—	—	—	—	—	—	3500	2333		
調査面積m ²	貿易陶磁ランクA・B(中期用時期別)										H	貿易陶磁(ランクA・B(中期用時期別))				H			
	B-C	C	CD	D	E	F	F×G	C×F	HJ期	C1D		D	C-E						
山ノ下	2000	0	6	2	—	—	—	—	1	10	3	0	2	3	3	3			
全出土点数に占める割合	%	0	2.4	1.2	—	—	—	—	1	10	3	0	2	3	3	3			
1点当たり面積	m ²	0	625	1350	—	—	—	—	1000	—	—	—	—	—	—	2333			
調査面積m ²	貿易陶磁ランクA・B(中期用時期別)										H	貿易陶磁(ランクA・B(中期用時期別))				H			
	C-D	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—						
山ノ下	2000	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1			
全出土点数に占める割合	%	26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.6			
1点当たり面積	m ²	450	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2333			

※各200・大学の教科書類2000・調査
※2000C1期までのみ記載

わせて①11世紀中・後半から12世紀後半までの範囲、②D×E期、E期、F期、C-F期、F×G期、G期、G?期を合わせて13~14世紀中頃までの範囲、③H~K期を合わせて14世紀後半から16世紀までの範囲とすれば、①の合計は47点で全点中の割合は54.7%、②は28点で32.6%、③は11点で12.8%となる。①は平安後期・末(鎌倉初頭)であり、考古学的見解では中世初頭。②は中世前半。③は中世後半となり、貿易陶磁の出土比率から見れば①に流通の最大活性化があり、さらに1つの時期に収まるものを細かく見ればC期に貿易陶磁のピークがあった点も判明する。遺跡は中世にも継続し、また国産陶磁を見れば近世まで長期に及ぶが、中世後半には相当減少しており、ここに平安後期・末の活性化には及ばない点が導き出される。建物の主体が平安後期・末にあったと推定する根拠には矛盾しない。

(3) A・Bランク陶磁の獲得量

A・Bランク陶磁は、合子・香炉・壺・水注など器物自体の稀少価値を有す器種であり、全国的な出土例の実際から見ても優位な遺跡に散見されるが、一般階層らしい生活遺跡には無か極めて少ない。食生活にとって必然容器ではない合子や香炉などの器種はAランクに含まれる。このA・Bランクは上記時期区分①では7点、8.1%、②では2点、2.3%、③では1点、1.2%であり、上と同様①に多い傾向がある。①のA・Bランクが全体量から見ると8%に達し、その内2点の合子はAランクで2.3%となる。これは比率値のみを見れば、博多・大宰府などの大都市部よりも高い値を示す。各地の一般生活遺跡で出土する場合、1%以下である。これは注目でき、Aランクは貿易基地から地方へと選択されて流通している現象と理解される。Bランクも同様な傾向がある。

(4) Cランク陶磁の獲得量

A・Bランクとは異なり、大中形の輸入陶器の量を見る。これは一部のものは器体そのものの商品価値を持つが、これ以外の壺類などの類は粗製で美品とは言えない。容器よりも中の梱包物が貿易対象品である。こうした壺類は後に経塚容器、蔵骨器として転用された例も多いので、中身を利用後の空箱として軽視したわけではないだろう。①に1点、①~②に2点あり、第2項に記したとおり、陶器B群に属すが分類特定はできない。陶器は博多・大宰府などに出土例が多いが、北上につれて出土例や分類数が減少する。筆者の提言する定番陶器とは日本広域流通品で、東北・平泉や北陸・山形でも出土確認できる種類である。山ノ下遺跡出土例はこの定番陶器の一つと目される。定番陶器については下記論文を参照願いたい。時期により種類も異なる(註6)。

(5) 1点出土面積

交易や流通に優位な遺跡や権力に絡む上位階層の宅地などでは、一般的に陶磁量は多いため、陶磁の出土面積に応じた密度が当然高くなる。山ノ下遺跡では調査面積の割に陶磁量は少ない点があげられるが、上のような遺跡の優劣を示す条件が希薄な場合、果たして陶磁の多寡のみで内容を計れるものかという点が残る。山ノ下遺跡のC・D期(11~12世紀)に関して同様な時期に絞り、大宰府条坊、第34次、200次調査の例を下記にあげる(註7)。

34次、調査面積570m²,陶磁全点数1047

B×C,C,C>D,C×D,D

3,409,104,115,15...計646,

% 0.3%,39.2%,10.0%,11.0%,14%...全体数の61.7%

1点出土面積,190,15,5,38m²...計、1点につき0.9平方メートル**200次、調査面積2700m²,陶磁全点数169**

B×C,C,C>D,C×D,D

0.86,7,2,3...計98

% 0%,50.9%,4.1%,1.2%,1.8%...全体数の58%

1点出土面積,-31,386,1350,900m²...計、1点につき28平方メートル

34次、200次ともD期は急激に減少しC期が中心である。大宰府では同じ都市内でも地点によって陶磁器密度は30倍近い相当な差となる。

山ノ下遺跡47点、54.7%、1点につき出土面積152平方メートルで、大宰府条坊200次よりも陶磁密度は約5倍の面積となり疎らな状態となる。他の遺跡の1点出土面積を参考にしても、平安京では1点につき1平方メートル以下の地点があり、山陰の重点的遺跡は5平方メートル前後、東国平泉・柳之御所跡は20平方メートル弱(註8)となるなど、山ノ下遺跡の陶磁密度が低いことがわかる。

一方、同時期の陶磁資料に占めるA・Bランク、Cランク陶磁の割合は、以下のようになる。

ランク A・B

山ノ下遺跡 7点 8.1%(1点出土面積1000平方メートル)

大宰府条坊34次 13点 2.3%(1点出土面積44平方メートル)

大宰府条坊200次 6点 3.6%(1点出土面積450平方メートル)

ランク C

山ノ下遺跡 1点 1.2%(1点出土面積7000平方メートル)

大宰府条坊34次 19点 1.8%(1点出土面積30平方メートル)

大宰府条坊200次 0点 (無)

これから見れば山ノ下遺跡の一般陶磁は都市遺跡縁辺部よりも疎らな出土数を示すが、ランクABやCといった別評価の陶磁ではむしろ都市中心部や縁辺部よりも全出土量中の割合が高いという逆現象がある。この点A・B・Cランクの評価を数量で表す事は重要で、単に一般陶磁量のみで使用層の階層的上下は決めない事である。注意が必要な点としてA・B・Cランクは商品交易基地から遠くへ運ばれるため、遺跡出土量も少なく、構成比率に偏向を生じ易い。一般陶磁量や分類数もある程度は出土量がないと過大評価となる危惧もある。Cランク陶器分類は現状でも共有化が進んでいない地域も多く、とくに破片の場合は「不明」として処理される事も多いと考えられる。今後、山ノ下遺跡周辺の遺跡における生活遺構と陶磁内容が比較できれば階層性を計るための基礎資料となる。

大宰府条坊34次、200次の陶磁分析はその一例である。この2地点は古代条坊制における中心路・

朱雀大路の西側近接地であり、中央路に面した一等地であった。11世紀後半から12世紀前半には条坊管轄の政治色は失せたが、道路など条坊区画が維持された所もあった。寺院を中心に新しい都市が形成され、上の2地点はその一角を占める。この段階には、旧来の階層的な土地利用形態は崩れているが、200次地点は北側に位置した宗教施設群からは遠く離れるため、34次調査地点よりも土地条件の優位度は下がると予想される。

第5項 越州窯系青磁Ⅲ類と広東産白磁・龍泉窯青磁

1 掘立柱建物13出土の越州窯系青磁について

III類出土例は全国的にも稀少で、壺・水注の器種は碗・皿よりもさらに例は少ない。また壺・水注III類は鳥取で最初の確認となり、その搬入契機も問題となる。

山ノ下遺跡出土例の場合はIII類確定の第一特徴となる高台を欠落するため、他の要素から検討を進めなければならない。それは外面の胴部外面につく強めの縦筋装飾、釉調、施釉法、胎土質、調整などであるが、釉調、胎土質、調整については第2項に記したような若干の欠点がある。今回の類別検討では、III類の範疇内にこうしたマイナス面が含まれるのかという点をとくに注意している。各報告例では、こうした細部について網羅されているわけではないが、一部については再観察も行った。

越州窯系青磁分類についての補足点

考古分類では碗・皿など一般的な生産品(量産型器種の手法)を基準とし、かつ破片検討が主である。稀少で美術的価値の高い壺・水注など博物館所蔵品の優品は伝統美や熟練度の高い技術が加味されているので一般流通品との差が生じる。今回は壺類を照準とするが、碗・皿に比べて全体を把握できる例が国内の考古資料では少ない。

大宰府分類では越州窯系青磁をI、II、III類に分け、IとIII類は直系となるのに対して、II類はこれは質の異なる粗製品である。II類の产地は福建省北東部の福州近郊の窯のものが最も近いとされる(註9)。なお大宰府では、1978年以降長期に渡って各遺構・層位別に陶磁分類の数値化を集積しているが、II類の記号変更による混乱影響も大きく、現状そのままの記号としている。上の点が了解されていれば、記号の問題は差し迫って重要ではないが、一般陶磁史の説明には向かない事は間違はない。今後記号修正をする事もあるが、これは越州窯系に止まらないため早計な変更は保留しておく。

(1) 胴部の縦分割線

胴部の装飾の一つで、使用工具から3つに大別できる。

① 瓶押圧 8世紀後半から10世紀中頃のA期越州窯系青磁I類によく見られる瓜胴・瓜割(碗皿では花形)装飾は器体に瓶先を深く押し付けてつけたもので(瓶押圧)、押圧の程度はあるが、強い押圧では胴部内面が凸状となり立体効果が強い。施文工具は不明だが、先が細い鋭利な瓶を使うと器体損傷も出易いので、幅広の弧形で瓶先の鈍い工具を押しあてた可能性がある。

② 縦筋文 「縦筋文」は便宜的に使う用語で次の③「柳目文」と区別する。二条の縦凸帯線を筋引きし、凸帯線の際はやや深く外側線は浅く片彫りふうの工具を使う。凸帯が浮き出て浮彫り風に立体觀を出している。工具の先端は第176図の器体横断面で示すように、山形の頭部に2つの刻みを入れ

たものである。凸帯数は刻み数により変わるが2条の例が多く、1条、3条の例が少數ある。①より促成的な手法変化とも言えるが、器体の装飾時における損傷防止という点では合理的ではある。

③櫛目文 工具先端は平らで数条の刻みを付ける。②のような半浮彫り風な立体觀ではなく平面的であり、いっそ促成的である。

①→②→③の変化は晚唐・五代→北宋前半→北宋後半・南宋前半の特色を端的に示す。北宋後半では新古の手法が混在し、①範押圧と③櫛目文を併用する胴分割の例が白磁、青白磁の水注等にあり、①は北宋後期の広東系白磁や景德镇系青白磁、耀州窯系青磁などの椀・皿に使う例も少なくはない。北宋後半の白磁壺類では縦筋文は少なく、櫛目が多用され平面化した区割となる例が増える(第178図5)。

以上から、②縦筋文は越州窯系青磁III類で多用される半浮彫ふうの施文という事はできる。

(2) 色、胎土について

出土破片では器体の特徴を全く残さない場合には、釉色、胎土が肉眼観察の限界となる。

越州窯系青磁は上林湖一帯の越窯、婺州窯(金華地区)、甌窯(温州)の三大地域に及び、以前の中国側の研究では各地域に釉色の差異が指摘されてきた。越窯を基準とすると婺州窯は暗色味に傾き、甌窯は淡黄色味や淡青味をなすという(註10)。確かに納得できる点はあるが、越窯と区別できないものが一定認められるのでまだ完全分離できるわけではない。型式年代毎の比較も必要である。また越州窯系青磁III類の典型例の釉色には濃緑色、茶色味のものがあるが、淡色味で黄茶味、淡青味(水色味)の例や上品な黄緑色(オリーブ色)例もあるので釉でI類と完全に区別がつくわけではない。

施釉方法について見ると、椀・皿では原則全面施釉であるが、III類の壺・水注では、内外全面行うものと、内面は頭部附近まで掛け、以下露胎となる場合がある。これはI類の壺類も同様であり、I類とIII類の決定的な区別点ではない。

越州窯系青磁I類・III類の胎土は均一でやや黄灰色味をなすのが一般的特徴だが、III類の質の低下するものでは灰色味が強いもの、茶色もある。良質のものは均一で胎土中に気孔は殆どないが、胎土中に気孔が出たものや、わずかに黒斑を含む例がある。黒斑は少なく目立たないため、一見すると気付かない場合がある。胎土中に気孔があると、その部分は釉溜り状となり釉表面からは黒い粒に見えるため、胎土中に含む黒斑と誤認しない注意が必要。

また外面調整の範削りは丁寧で、削りの段が強く残る事はあまりない。

(3) 北宋期の越州窯系青磁高台について

北宋期の椀は、①III類、②I類系譜(分類はI2aエとする)の2つに大別できる(註11)。

①III類高台の施釉方法における明確な特徴は、高台部・底部外面にある。外面は全面施釉され、高台内際の底部外面に長めの白色目跡を持つ。I類は全面施釉後、高台疊付の釉を削り、この削った露胎部に目跡を持つ。高台断面形状では椀III類に顕著な特徴があり、高めの高台で先端が細く、撥形に外へ開くものは貼付高台である。高台先端は横ナデ調整のため範の銳利さがなく丸味を持つ。目跡の位置は底部外面の高台内際に付き、I類と明らかな違いとなる。

②は貼付ではなく削り高台である。底部内面と高台疊付に目跡を持ち、重ね焼きを行う量産型で、中には体部外面下位以下に施釉しない粗雑なものもある。断片では胎土、釉調について晚唐期I類と

の区別はできない。①・②の椀類の高台大別は北宋期の壺、水注にも適用可能と見ている。

以上の胎土、釉などのマイナス点(胎土中の気孔や黒斑を含む)は、III類の椀・皿類でも確認しており異質なものではない。

(4) 広東系白磁との異同

a. 広東系白磁

広東省の北宋代白磁窯では潮州窯、西村窯がよく知られる。この二つの窯製品はよく似たものがあるが、線引きが可能な部分もある。ここではこの異同について省き、越州窯系青磁壺・水注との釉や胎土などの比較について述べる。日本出土品では潮州窯周辺と見られるものが主で西村窯と確認できる製品はきわめて少数である。一応これらは広東系としてくるが、大宰府分類白磁壺・水注II類の殆どは潮州窯系に属する。

白磁II類系の食膳具は椀II,XII,XIII、大椀(鉢)II,IIIV(一部),VI,VII類、その他の器形では壺・水注・小壺・合子・水滴・玩具などもある。食膳具以外の器種は比較的良色で出土量は少ないため全体をII類としている。

(5) 北宋代の白磁II類と越州窯系青磁の区別

a. 施文と施釉

白磁壺・水注II類には胴部に縦筋文や柳目で分割線を持つ例がある。下記に取り上げる滋賀県出土水注や佐藤美術館所蔵水注は凸線部が明瞭で片影の効果的手法も越州窯系青磁との差がない。出土例ではこの装飾効果が弱く片影とは言えない例も確認できるが、越州窯系青磁ではこれが少ない。次に白磁II類の釉色は、生産地報告でも白色に限らず青釉、青白釉、黄灰色など、青磁よりは淡いが、白磁よりは青白磁や青磁に近い例が多い事も分かる。国内出土例でもこの点は同様で、東南アジア出土例でも青白磁とされる報告がある(図版106-8・9)。

施釉方法では、白磁壺・水注II類は胴部内面には施釉しないが、これは越州窯系青磁にもある。施釉方法は越州窯系青磁の場合は高台から底部外面まで施釉するが、白磁ではこの部分は露胎が普通である。加えて越州窯系青磁は底部外面または高台疊付に白色目跡を持つが、白磁は露胎でこの目跡がつかない。

b. 胎土

白磁II類系に属する椀・皿類は胎土中に微細な黒斑を含み、これは一見しただけでは気づかない事がある。黒斑は胎土全体に均等に含まれており、意識しつつ材料に用いている事になる。胎土は淡黄灰色でやや陶器質に傾く。日本出土品は一部良品もあるが一步質の落ちる例が多い(註12)。

c. 白磁II類系の化粧土痕跡

白磁II類系の大きな特徴は化粧土を持つ点で、これは粗粒の落差が激しい椀、皿で確認し易い。しかし化粧土がすべての椀、皿で明瞭というわけではない。上にかける透明釉の層は薄く、化粧土も薄く白色ではない場合があり、断面観察でも化粧土が明確ではない例も多い。ここで化粧土がないと早計に判断しない事である。

例証を細かくあげると長くなるので省くが、確認し易い1点を上げる。胎土に微細な黒斑を含むため、化粧土のない範囲に掛かる釉は灰味を帯び、透明の釉下に不純な黒点が生じる。化粧土のある範囲に

掛かる器面の袖は黒点が出ず、袖が薄いため表面的に強い「てかり」が出て、一見純白や青白色に近い良質白磁に見える。この方法は素材品質は落ちるが欠点を隠し、形や装飾は豊かな側面もあるので、貿易商品としては打算的な产物と言えるかもしれない。ただ品質的には晚唐・五代の定窯・刑窯など袖・胎土ともに妥協のない最上ランク製品とは相当な開きがあり、北宋の景德鎮窯にも及ばない。

(6) 北宋代の龍泉窯青磁と越州窯青磁

壺類の胴部を区画する縦筋文は北宋期の龍泉窯青瓷にも見られるのでこの点を補足しておく。

近年中国側の窯址や墓の考古調査によって龍泉窯製品の研究も大きく進展しており、浙江省青磁の展開について修正を迫る中国の学説がある。龍泉窯の一部の窯では晚唐から五代、北宋期の越州窯と同様な製品が焼かれており、古くから越州窯の一分派としての活動があったとするもので、この点について日本では亀井明徳氏の研究でその一端が知られるようになった。龍泉大窯では縦筋文を持つ水注(図版101-5)が知られる(註13)。

図版101-4・6-8、102-1~3は、1998年刊行の朱伯謙・主編「龍泉窯青瓷」図録に掲載されたものである(註14)。柳・坏は北宋期越州窯系III類とほぼ近似する器形・目痕を持つ例があり、また別に北宋の初期龍泉窯系O類と一致する製品もある。後者は外面高台以内は施釉されず、疊付幅がやや広くなり底部外面に環状焼台痕がつくなどIII類と区別しやすい点がある。しかし、壺・水注・多嘴壺などは椀・皿の一般量産品とは異なり、器形や装飾の丁寧な作例が多く区別が難しい。越州窯と酷似した北宋製品は龍泉地域の麗水、慶元の窯で小規模ながら確認されているという。図録の資料は墓出土品などが主で、窯の直接出土品ではないため詳細は不明である。龍泉地域の北は婺州窯(金華地区)、東には温州地区甌窯があり、ともに広義の越州窯に属する一大産地であったから、これらの越州窯系産地からの手法の影響や製品搬入も考えられる。北宋早期の龍泉青磁は灰白色を強く帯びたものがあり、甌窯の伝統を受け継いだという意見もある(註15)。なお国内では、北宋期龍泉窯の椀など食器類は出土例があるが、壺・水注類の出土例は今のところなく、この期の青磁壺類は越州窯系に限られる。

胴部に縦筋文を有する北宋期龍泉窯の例では、元豐3(1080)年の紀年銘を刻む英國デイヴィッド・コレクション(図版101-1)(註16)、元豐元年(1078年)龍泉市塔石郷秋畈村墓出土の壺(図版101-4)などが年代指標となる。国内所蔵品では図版99-4・5がある(註17)。

(7) 越州窯系青磁III類の分類記号の踏襲

北宋の越州窯と龍泉窯の特徴については、今後、生産地側の研究深化を望むしかないが、国内出土品における筆者の考えは単純であり、龍泉窯の中で生産された北宋越州窯相似のものは、これも越州窯系青磁III類とし「窯系」で包括する。他の窯についても同様とし、関連の窯が新たに見つかり、その都度窯名の更新に悩むよりは考古的分類で記号化しておくこととする。

以上の観点で見れば山ノ下遺跡出土の縦筋文壺類は、越州窯系青磁III類か白磁II類かを当面決めれば良い。外面施釉下に化粧土はないという1点は白磁II類ではない事になり、越州窯系青磁III類として良い。また先述した、同じ北宋期の削り高台で越州窯系青磁I類の後続系の壺類もここに加わる可能性がある。

2 越州窯系青磁壺・水注III類の類例及び白磁など類品

越州窯系青磁壺・水注III類は胴部縦筋文に限られるわけではないが、今回はこの種の文様を持つ例に特化している。またC期白磁壺・水注には器形、文様の酷似する例が知られており、これもあげておく。

(1) 越州窯系青磁壺・水注III類

近年、国内におけるIII類の出土例はやや増加したが、その内訳は食器類が主で壺・水注の出土例は少ない。III類はB期に出土開始し、その年代的な基礎も食器出土例が核となっている。壺・水注III類は縦区画帯のない器種もあり、国内出土例ではこれも一部取りあげたが、博物館藏品や中国出土品では縦区画帯を持つ例を中心に例示した。以下は国内の出土例をあげ、遺構・層位・出土年代根拠についても記述したが、層位的年代が確定できないものは記述を省略している。過去出土例や美術品では作品自体の様式からの年代解釈となっている。この点は考古発掘の事実関係重視とは異なるため、()には註の文献および展示品表記の年代を示した。

① 大宰府条坊跡第27-1・2次調査(第177図1、図版97-1a~i)

溝SD202。水注。口縁部、胴部中位以下は欠損し、頸部から胴上半部が残存する。注口、耳、胴部の縦筋区画帯がわかる。縦筋2本は注口部左右と、耳の下に片彫痕があり計3本残存する。この割付方からすると6区に復元される。耳は注口から90度回る位置に2個つき、1方は欠損する。耳は縦長の五角形の板に陽刻印文をつけ、裏側は別粘土を補充して頭と肩位置に強固に貼り付けている。補充部は整形・面調整され孔が空く。注口は胴部を穿孔した後、胴部外面に接着する。胎土は茶灰色から淡灰色を呈し、均一で良質だがごく僅かに黒斑が入る。釉は茶色味を帯びた濃緑色で、発色は胎土色の影響がある。外面は全面に施釉され、内面は頸下部以下は施釉しない。胴内面は輻輳調整痕が顕著である。供出する土器型式はXII期(11世紀後半から12世紀初頭)で供伴した白磁の陶磁編年はC期である。国産の山茶碗東山H105型式坏も併出した。(註18)。

② 大宰府条坊跡第34次調査(第177図2、図版97-4)

溝SD084。壺類高台部。図は水注に復元したが壺の可能性もある。釉は外面底部まで掛かり、内面には施釉しない。胎土は明茶灰色で釉はやや暗緑色に発色する。胎土はIII類的だが釉はI類との差はない。外面は全面施釉後、疊付の釉を搔き取り疊付に目跡が付く。この手法はIII類よりもI類に通有なもので報告では例外的としたが、北宋期に属するI類の後続型とするのが適切かと思われる。体部外面6ヶ所に2条単位の縦筋線を入れており、I類にこの種の例はない。供出する土器型式はXII期(11世紀後半から12世紀初頭)で陶磁編年はC期である(註19)。

③ 大宰府条坊跡第19次調査(第177図3、図版97-5・6)

壺・水注破片は3点ある。図版97-5はSX014出土の高台。内面は施釉しないが外面は全面施釉され、高台内際の底部外面に細長い目跡(環状)がある。高台外面は直立するが、内面を斜めに面取りし、端部は尖り気味となる。胎土は茶灰色で白色粒を含む。図版97-6はSK018出土の高台。先端は欠損する。内面は施釉しないが外面は全面施釉され、高台内際の底部外面に細長い目跡がある。他に黒褐色土層出土(未報告)の胴下位片があり、外面には縦筋文で2条凸線を持つ。

図版97-5・6、黒褐色土出土資料は新期遺構や土層に混入したもので、SX014、SK018は13世紀中

頃から14世紀、黒褐色土層は遺構面より上を覆う層で新しい(註20)。

④ 大宰府条坊跡第59次調査(第177図4、図版97-2)

排土資料。壺類肩。外面の2条凸線の左右の間には細い毛彫文が密に入る。釉は全面施釉で暗緑灰色(註21)。

⑤ 大宰府史跡第117次調査(觀世音寺東南部)(第177図5、図版97-3)

暗褐色土層出土。壺。細身の胴部のみで、胴部は2条の凸線となる縦筋帯を軸線として、上方には葉文、下方に如意刀文が配され、さらに最下は蓮弁帯を回し櫛目で葉脈を入れる。①よりも丁寧な割付例である。胎土は灰白色で緻密、釉は暗緑色で内外施釉される。遺構面の上部堆積で近世までの遺物を含む(註22)。

⑥ 博多第6次調査B区(第177図6a・b、図版98-1)

B区下層出土。水注。頸部下位から胴部下位にかけて残存し、把手は一部残る。胴部縦筋帯を軸線とした花文を描き上の③同様に丁寧な文様である。内面は頸部まで施釉され以下は露胎である。胎土は濃灰色で黄緑色の透明釉が薄く掛かる。器肉は厚い。同様な破片が7、8個体あるらしい。図は報告書(6a)と復元図(6b: 櫻原考古研究所作成)の両方を載せた(註23)。

⑦ 博多第6次調査E区(第177図7、図版98-2)

小形壺(瓶)。体部下半から高台で外面に劃花文がある。器肉は厚く、胎土は灰色。外面は全面施釉で、内面は施釉しない。釉は黄緑色で透明、貫入がある。高台内際の底部外面に細長の目跡がある(註24)。

⑧ 博多第6次調査B区(第177図8、図版98-3)

42号土壙出土。小形壺(瓶)。同一個体の体部上位と下位から高台の破片である。外面には劃花文がある。胎土、釉は上の⑥と似る。底部内面は施釉しないが、他は内外施釉で高台疊付に目跡がある(註25)。

⑨ 博多第6次調査B区(第177図9、図版98-4)

24・31号土壙出土。壺類。胎土は灰色で器肉は薄い。釉は黄緑味で内外全面に掛かり貫入がある。高台内際の底部外面には長めの目跡が4個ある(註26)。

⑩ 博多・築港線第2次調査(第177図10、図版98-7)

88号井戸出土。水注。底部は欠損し、胎土は青灰色、灰褐色で緻密。施釉は均等でムラはなく、胴部内面も施釉される。外面は緑褐色、内面黄緑褐色で青磁とされる。胴部は6本の縦筋文があり、凸線は明瞭である。共伴する土師器からXII期と見られる。広東・潮州筆架山窯類似とされる白磁水滴が共伴し、他に一般食器などの陶磁は出土していない。白磁水滴はC期とするのが妥当で、これは XII期土器型式と矛盾はなく、11世紀後半から12世紀初頭と思われる(報告では11世紀中頃、また後半でも早い時期とする)。やや大形で、陶器B群水注IV類と類似点もある(註27)。

⑪ 博多第4次調査(第177図11、図版98-5)

小形壺(瓶)。肩部、胴部下半で接合しないが同一個体とされる。高台は疊付が細く尖りIII類と見られる。胴部には縦筋帯ではなく、片影の蓮華文の花弁内に櫛目を入れる。胎土は明灰色で精良、釉は明るい黄緑色で釉層は薄い。図は龜井氏復元によるものを使用した(註28)。

中国浙江省、寺龍口窯では同類とみられる破片がある(図版102-7)。

⑫ 博多第85次調査(図版98-6)

壺類。縦筋帯を持つIII類壺類片が数点出土しているが遺物個々の詳細は不明である(註29)。

⑬ 鹿児島県喜界島、喜界町(図版99-1)

水注。地元祭礼祠堂に長く保管されたもので、この資料は出土品であった可能性も強く、これが確實ならば国内出土中最も完形に近い水注III類となる。また南島で本土にも稀少な陶磁が出土したとなれば、その背景も重視される。実見した時は町教育委員会に移動保管されており、ガラス越しのため底部や内部は直接観察できていない。水注は口縁端部、把手、注口を欠するが、その他は完存する。肩部に耳はつかない。高台は高めである。胴部の縦筋文は6本で、筋の凸部は明瞭である。縦筋文を軸線として、左右の区画に及ぶ二重枠の窓の中に一個の刻花牡丹文を配置する。花文は線の切り合いでから縦筋文の後に刻む。この90度回した位置では2本の縦筋文の中間部に注口と把手がそれぞれ付く。注口・把手の下は単純な垂下葉状の刻花文で囲む。刻花文は2種で、各90度毎の位置につき、180度位置は同じ文様である。6本の縦筋文に対して四方の文様割付となる。文様線はやや太い片彫である。釉色は黄緑色でI類と差はない。頸や肩の釉面には一部気孔が認められる。上記⑥と文様は酷似する(註30)。

⑭ 鴻臚館(第177図12、図版99-2・3)

SD1045(堀)採集品(第177図12、図版99-2)。壺類。北宋期の縦筋文を持つ壺類の出土報告はないようであるが、破片では縦筋文と誤認しやすい例がある。これは肩から胴上位の破片で環状の縦耳を持つ。外面に太目の片彫縦線が多く入り、縦筋文とは異なり一本ずつ入れたものである。刻線は垂下する蓮弁や花葉文と見られ、耳下の2本の線が蓮弁や花葉脈の中心線となる。釉は淡色味の緑色である(註31)。

SK87出土品(図版99-3)は壺類1、2個体分の破片があり、胴部から高台までの各部分が残る。肩部外面の縦線は胴外面に垂下した刻花蓮弁に連なるものと見られる。この資料は温州窯産という中国側の意見がある(註32)。

(2) 陶器

① 博多聖福寺出土(古墓)(第181図3、図版105-3)

水注。陶器B1群に属し、全体の形態は前ページにあげた⑩博多・築港線第2次の例に近似するが、胴の縦筋文はない。胎土、釉とも質が低下したものである。C-D期に到ると越州窯系青磁に替わってこうした陶器が加わる(12世紀)(註33)。

② (伝)山口県光市清山出土(第178図1、図版105-4)

陶器水注。胴部に分割線の入る例として取り上げた。類例はあまり見ない。胴部に3条の櫛描線を入れ6区分とする。写真から判断すると上で示した縦筋文と同様な手法だが、中央の2条の凸線は細く両脇の外側線が際立つため、片彫とは異なり櫛(刷毛)目とした方が正しいと思われる。片彫り縦筋文は片側線が浅くなり器体と一体化するため自然調和的で上品な雰囲気となるが、この陶器の線は明瞭過ぎ、硬い感じで形骸化の表れであろう(11~12世紀)(註34)。

(3) 白磁

① 大宰府条坊跡第27-2次調査(第178図2、図版104-1)

溝SD157・SX163。水注II類。他の遺構や層位で破片に分かれて出土したものを集めて復元した。耳、注口、把手は取り付け位置が判明するが欠損する。胎土は灰白色で黒斑を含み、砂味の硬質である。釉は淡緑色味を帯び透明で光沢があり、一見して青白磁的な釉色にも近い。肩・頸部内面から体部外面下半まで施釉され、その他の部分は露胎である。胴部外面下位から底部外面には施釉しないのは越州窯系青磁III類とは異なる特徴である。釉下の化粧土は不明である。胴部外面は縦筋引きで6区分され、2条の凸線帯は片彫りによるが、線表現は越州窯系青磁III類に比べて弱く平面的である。高台部は先が細くの他形状についても、図上では青磁II類と類似する。胴部径に比べて頸径は細い。溝埋没はXII-XIII期であるが、SX163はXII期・11世紀後半から12世紀初頭(C期)でこの時期となる(註35)。

② 大宰府条坊跡第27-2次調査(図版104-2)

溝SD130上・中層、黒灰色土層出土。壺II類。2片は胎土・釉は近いが同一個体か不明。肩部、胴部の外面に縦筋文があり、胴部破片では2条の凸線は明瞭である。また、この層からは白磁II類の壺・水注の蓋も出ている。SD130下層はXII期、上・中層はXIII期埋没、12世紀前半、陶磁区分はC期である(註36)。

③ 大宰府条坊跡第267次調査(図版104-3a-f)

茶色土層出土。水注II類。遺跡の概要は一部報告済みで、遺物などの詳細については現在、太宰府市教育委員会で作業が進行中である。遺跡は12世紀前半まで活性化するが以後急速に衰退する。この資料は細頸で上の①と酷似し釉色も良い。残存部は頸から胴上位の破片で、口縁、注口、把手、高台は欠落するが、注口の剥落部や耳部がわかる。耳は一方のみ残存する。外観は釉は淡く水色味や薄い灰緑味を帯びた上品な感があり、細かい貫入が多く入る。胴部外面と内面の胴部上位まで施釉され、胴部内面上位以下は露胎である。頸は胴部外面に接合するが接合面には釉は付かない。胎土は砂味の硬質で気孔があるが良い方であり、淡灰色で僅かに黒斑を含む。胴部縦線は突線状にはならず2本の凹線(2叉櫛)で引かれ、平面的な装飾となる。割付数は不明であるが注口との位置関係をみれば6区と見られる。耳は上端を欠損し、五角形の板に細い陽刻の印文をつけ、下位は直接肩部、裏は1本の竿で頸下部に接合する。竿は6面位に面取りされる。竿部取り付け方は越州窯系青磁よりも華奢な感がある(註37)。

④ 滋賀県大津市南滋賀町字勤学堂出土(第178図3、図版105-2)

水注。上の①・③水注に類似し、形が完存する一品で製作の精度も良い。頸は細めである。高台外面下位から底部外面に施釉しないのは越州窯系青磁III類とは異なる点となる。耳は細かい陽刻印文があり、裏の竿も上③と同じ方式である。縦筋文は6本で胴部に止まらず肩部まで延ばされ、中央の2条凸線は明瞭である(11世紀または11~12世紀)(註38)。

⑤ 富山佐藤美術館所蔵(第178図4、図版105-1)

フィリピン出土品。水注II類。筆者の実見による観察を加える。形態は細部も含めて越州窯系青磁水注IIIと酷似する。耳はなく胴部縦筋文は凸線明瞭で6本。内面の施釉は頸部上半で止まり、これより下にはない。外面は高台中位から底部は施釉しない。頸は肩外面に接合し、この部分の内面に一部化粧土がある。胎土に微細な黒斑を含むようであるが、外表面にこれが出ないのは化粧土のためと

見られる。釉は淡緑、淡水色味の良色をなす。広東省潮州窯とされる(11~12世紀)(註39)。

⑥ (伝)滋賀県浅井郡出土(第178図5)

四耳壺II類。胴部区画は櫛(刷毛)目を使い出土例も多い(註40)。

(4) 国内博物館他所蔵品

北宋期越州窯青磁の縦筋文例を示す。一部は北宋期龍泉窯とされるものもあり、この場合は(龍泉)の注記を付ける。

① 大阪市立東洋陶磁美術館(図版99-5・6)

図版99-6は水注。縦筋文はないが形態比較の参考となる(註41)。図版99-5は多嘴瓶・蓋付(龍泉窯)。肩部に5口が付き、口に対応した胴部に縦筋文で5区画とする。縦筋文を中軸として左右にまたがる1個の花文が細刻線で表される。高台疊付から底部外面には施釉されず、疊付に10個前後の目痕がある。蓋も口縁端部に目痕がつく(註42)。

② 個人蔵(図版99-4)

水注(龍泉窯)。胴部は縦筋文で6区画とし、各面に半片彫り的な2叉櫛による雲文または草状の刻線がある。底部外面まで施釉され、高台内際の底部外面に目跡がつく(註43)。

③ 浜松市美術館(図版101-2)

多嘴長頸瓶。肩上位に4個の耳、その下に獸面を表した多嘴がつく。胴部に縦筋文があり、下位の蓮弁文上で止まる。耳の陽刻印文は線がやや細めとなる。写真で見る限りでは縦筋文は4本で各間に窓枠内に配された牡丹文が片彫りされる。釉は黄みを帯びる。今井氏によれば「青磁」としており、北宋末代浙江青磁の生産窯判別が単純ではない事を示唆している。(註44)。

④ 東京国立博物館(図版101-3)

瓶。双耳は頸下位、肩に接合する。胴部は縦筋文4本があり、写真ではこの筋を軸として左右区画に対称的に草花文が線彫で配されるが、他の面は分からない。胎土は白く、釉は淡黄褐色で底部外面まで掛かり、細長い目跡を持つ。上記③と同様に今井氏は「青磁」としている(註45)。

(5) 中国博物館他所蔵品

越州窯の縦筋文を持つ例を示す。出土品も含まれるが詳細については不明な部分もある。

① 上海博物館(図版99-7)

壺(北宋)。縦筋文は耳の下および双耳の中間の胴部につき、4本と見られる。胴部には細い線彫文がある。底部外面の目跡は高台内際の底部外面につく(註46)。

② 上海博物館(図版99-8)

壺・蓋付(北宋)。肩に4耳を持ち、これに応じた縦筋文が胴部につき4本となる。凸線2条は明瞭。耳の陽刻印文は太目の文様で、耳裏に渡した竿部は頸部、肩部の2個所で頑丈に接着する(註47)。

③ 紹興市博物館(図版100-3)

水注(北宋)。耳位置下の胴部には縦筋文ではなくこの面全体に窓枠と花文が刻まれる。縦筋文は注口と把手近くに寄っており4本と見られる。凸線は3条で明瞭。

④ 紹興市博物館(図版100-2)

水注(北宋)。割付方では6本の縦筋文となる。凸線は2条で明瞭。胴部径に比して頭径は太い。

⑤ 紹興市博物館(図版100-1)

壺(五代)。双耳で細身胴。双耳の下の胴部と、この位置を2分する胴部に縦筋文がついて4本の縦筋文と見られる。凸線は2条で明瞭。

⑥ 紹興市博物館(図版100-8)

水注(北宋)。紹興市上竈官山出土。胴部に縦筋文ではなく細い線彫文で埋められる。

⑦ 慈溪市博物館(図版100-4)

水注(北宋)。縦筋文は注口と把手側の両脇胴部につき、4本である。耳下の胴部には縦筋文ではなく、二重窓枠内に牡丹の刻劃文が配置される。目跡は底部外面に付く。

⑧ 天一閣博物館(図版100-7)

水注(北宋)。寧波和義路出土。遺跡報告はあるが、本例は掲載していない。小さな耳が肩につき、割付方から縦筋文は6本と見られる。凸線は2条で明瞭。肩や胴部に細い線彫文がある。

⑨ 天一閣博物館(図版100-6)

水注(北宋)。鄞県出土。やや胴長で割付方から縦筋文は6本と見られる。凸線は2条で明瞭。胴部外面は無文である。

⑩ 出光美術館の図録に掲載された窯跡採集資料(図版100-5・9~12)

窯は特定の1基を指すものではなく窯群総称の採集品である。図版100-5は、鄞県窯の壺である(北宋)。胴の上部欠損のため明確ではないが、各区に弁内を埋める細かい刻線があり、縦筋文とは異なる片彫り8弁の蓮弁の可能性がある。図版100-9~11は上虞窯(北宋)。図版100-9・10は頭部下位から肩部片で、双耳壺とされるが把手残部と双耳があり、水注と見られる。2点とも胴部は頭の下まで縦筋文があり6本である。図版100-9は区画内に細い刻文を持つ。図版100-11は壺類で区画内に刻花文がある。図版100-12は越窯の壺類(五代)。胴部の縦筋は4条の凸線で脚目に近い(註48)。

⑪ 上林湖展示館・慈溪窯・慈溪市寺龍口窯(図版102-4~7)

図版102-4は上林湖展示館の水注。縦筋文は6本と見られ凸線は2条。胴部は細身で高台外面は直立する。頭部内面の下部以下は施釉しない。

図版102-5・6は慈溪窯の水注(北宋)。2点は形態や装飾も近似する。縦筋文は4本で各凸線は3条となる。装飾は上述の⑦と近い。図版102-5は出光美術館の(註48)の展示に出品されていた。付け加える特徴として、内面は頭部下方まで施釉され胴部上位にも一部釉はまわるが、基本的には胴部内面には施釉しない。胎土や釉面には若干気孔が出る。胎土は焼成温度差のため外側は淡灰、内面は茶色で、露胎となる胴部内面は茶色味となる(註49)。

上とは異なる浙江金華県区の北側、蘭溪市の窯にも縦筋文を持つ水注写真があり、他の窯よりも壺が多いという点が注目される(北宋)(註49)。

図版102-7は慈溪市寺龍口窯の壺(瓶)である。先述した博多第4次調査出土例(第177図11、図版98-5)と近似する。縦筋文ではなく、肩部に線状蓮弁、胴部に片彫文を持つ。寺龍口窯は五代から南宋初期までとされるが、この壺は北宋期であろう。

⑫ 上虞県窯寺前窯(図版102-8)

水注(註50)。

⑬ 温州市・瑞安市上窯窯 窯(図版102-11)

壺類。やや平面的な凸線2条となる縦筋文を持つ。胴部内面に施釉されるが、施釉が不完全の例もある。釉色は淡黄緑・黄茶や淡緑色である。楕の胎土には黒斑を含むものがある。楕類は龍泉窯系0類に近い製品があるので北宋後・晚期と考える。

⑭ 温州市西山窯の傍系・烏岩廟窯(図版102-9・10、103-6)

温州市景山公園内に位置する窯である。縦筋文を持つ壺類にはa・bの2種がある。aは凸線2条が太く明瞭な類(図版103-6)。

bは縦筋文両脇の片彫りが深く太いため中央の凸線帯はやや貧弱に見え立体的効果が薄れるものである(図版102-9・10)。高台は削り出しで豊付に目痕を持つ。a・bとも内外に施釉される。胎土・釉は特徴があり、胎土には黒斑を含み釉上に鉄斑が出るものがある。釉は淡色味の黄茶色、黄灰色釉である。胎土・釉は山ノ下出土品と近い点で注目される。次に述べる西山窯に較べると粗質な観がある(北宋末～南宋初期)。

⑮ 温州市西山窯資料(図版103-1～5)

壺類。甌窯の代表的な窯である。景山公園に位置する。写真は北宋代資料で、縦筋文以外の例も示した。釉色は淡い例が多く、壺類は胴部内面にも施釉される。目跡は底部外面につくものと、高台豊付に付く例がある。前者の撥状高台を有する壺類底部外面にはIII類に通有な目跡がつく。後者では豊付は細く尖らずやや広めとなる。2種の高台形態は同時期か時期差があるのか今後追究を要する。胴部の縦筋文は1条の凸線の例があり、片彫りは広めとなる。縦筋文は8本と多い。胴部の刻花文はやや太い片彫りや丸刀彫りの荒々しいものが目立ち、文様輪郭線内に細線加飾(割花)を入れないなど淡白な面もある。

⑯ 温州市西郭大橋頭河床下出土資料(図版103-7)

水注(北宋)。胎土は灰白色で緻密。釉は淡青黄透明で高台端部以外に施釉と記される(註51)。

⑰ 広東窯の縦筋文・櫛文を持つ例(図版106-1～7)(註52)。

⑱ 東南アジア出土例(図版106-8・9)(註52)。

第6項 総括

調査結果から見ると、この平地に掘立柱建物が多く進出してくる理由として、一般規模とは異なる大型建物である掘立柱建物13の造営が一つの契機をなしている点があげられる。一般集落とは性格を異にしたならば、時代考証に厳密性も要求される。層位検討により掘立柱建物13Bの上限は11世紀後半から12世紀前半、下限は12世紀中頃までの年代幅を持つ。掘立柱建物13Aの上限は13Bをやや遅る年代を与えてよい。

遺構の年代確定に関する遺物は少ないが、遺構出土以外の貿易陶磁全体も含めた分析によって、上を補完する結果が出ている。また主要建物群の存続時期についても、陶磁分析から13世紀中頃から、降っても14世紀初頭という見通しを得ている。遺跡造営者の階層制を探るうえで陶磁器の数値化は一つの指標となるが、全国平均値を促成的に応用するのは早計な感もある。次の課題としては地域の基礎情報となる遺跡数の積上げが必要となる。この場合単なる包含層よりも遺構に還元できる遺跡の方が階層の序列関数に有用度が高い。鳥取県、旧伯耆・因幡国における実態分析を今後進める必要がある。

註

1) 久保邦江・三好美穂ほか2013「西大寺境内発掘調査報告書1- 西大寺境内第25次調査(本編)」「奈良市埋蔵文化財調査研究報告第3冊」奈良市教育委員会

土師器についても実見しており、奈良市教育委員会・三好美穂氏の配慮をいただいた。

2a) 金武正紀・宮里末廣ほか1991「今帰仁城跡発掘調査報告II」今帰仁村教育委員会

2b) 宮城弘樹 2009「今帰仁タイプに関わる窯跡とその製品 - 福建省連江県浦口窯跡の踏査と関連資料の調査 -」平成17~20年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書(研究代表者・木下尚子・熊本大学文学部)

3) 山本信夫(中田敦之編) 2008「第III章2陶磁器・V章出土陶磁器について」「松浦市鷹島海底遺跡 - 平成13・14年度鷹島町神崎港改修工事に伴う緊急調査報告書」「松浦市文化財調査報告書第2集」長崎県松浦市教育委員会

4a) 山本信夫 2003「12世紀前後陶磁器から見た持株松遺跡の評価」「古代文化 第55巻第3号」

4b) 山本信夫・山本麻里子 2007「山陰の出土貿易陶磁と傾向 - 集落における消費形態及び北部九州と日本海流通に関する基礎的検討 - (付篇5)」「波原遺跡・森広遺跡・片山遺跡 - 国営農地再編整備事業に伴う波原、角島地区埋蔵文化財発掘調査報告 - 下関市文化財調査報告書25」中四国農政局 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

5) 前掲註4参照

6) 前掲註4参照

7a) 山本信夫(宮崎亮一編) 2017「(IV-1. 第34次調査)『太宰府条坊跡47』」「太宰府市の文化財第131集」太宰府市教育委員会

7b) 小鹿野亮 2003「太宰府条坊跡第200次発掘調査」「筑紫野市文化財調査報告書75」筑紫野市教育委員会

8) 1点出土面積。面積あたりの点数と出土比率は点数/調査面積の計算で求める。しかし地方では調査面積の広い割に、点数が少ない事が多いから、面積1平方メートル出土数も数値が0以下の少数点以下の値ばかりとなり直観的に比較しづらい。逆に1点出土にどれくらいの面積が必要かは調査面積/点数の計算で1平方メートル以上の実数値が出て陶磁器密度は把握しやすくなる。1以下の値となる場合は高密度を示す。この方法は平泉・柳之御所で行った八重桜氏の分析例が最初と記憶する。ここでは他の遺跡よりも特異な実態があり、A・Bランクの陶磁量は突出する割に調査面積が広い点で、絶点数/調査面積の計算では密度が0以下となる。調査面積/点数とすれば他の遺跡との比較が容易となるのでこの点には賛同している。

9) 鄭國珍・栗建安・田中克子 1999「福州懷安窯貿易陶磁研究」「博多研究会誌第7号」博多研究会

10) 一例として浙江省東南沿海にある越州窯系の溫州西山窯(顯窯)の北宋代製品は淡色味を帯びたものであった。

11) 山本信夫 1995「北宋期越州窯系青磁の検討」「太宰府陶磁器研究 - 森田勉氏遺稿集・追悼論文集 -」

12) 以前、潮州窯の保存場所(筆架山10号窯)を見学した際に周辺に散らばっていた破片を見た事がある。器種は日本出土品と同じで胎土は灰白色に近く、黒斑は殆どなく、釉は白色に近い良品であった。日本出土品の多くは潮州窯の傍系製品とも見られる。

13) 亀井明徳 1992「竜泉窯青磁創焼時期への接近」「貿易陶磁研究12」

14) 朱伯謙・主編 1998「龍泉窯青瓷」藝術家出版社

15) 汪慶正 1984「中国陶磁概説」上海博物館所蔵中國歷代陶磁展

16) 伊藤郁太郎監修 1998「中国陶磁の至宝、英國ディヴィッド・コレクション展」カタログ、ゼノン美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、福島県立美術館、山口県立萩美術館、浦上記念館、読売新聞大阪本社

17) 今井敦 1997「青磁」「中国の陶磁第4巻」

18) 山本信夫・狹川真一 1984「太宰府条坊跡III」「太宰府市の文化財 第8集」太宰府市教育委員会

19) 前掲註(7a)参照

第6章 山ノ下遺跡・平ノ前遺跡の総括

20) 前掲註 (18) 参照

21) 狹川真一ほか 1998「大宰府条坊跡 X - 推定大宰府朱雀大路周辺の調査」『太宰府市の文化財第37集』太宰府市教育委員会

22) 石松好雄・横田賢次郎他 1990「大宰府史跡平成元年度発掘調査概報」九州歴史資料館

23a) 折尾学・森本朝子・池崎謙二 1986「博多 - 第6次調査報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第126集』冷泉町155番地遺跡調査会・福岡市教育委員会

23b) 土橋理子他・櫻原考古学研究所附属博物館編 1993「貿易陶磁 - 奈良・平安時代の中国陶磁 -」財団法人由良和古文化研究協会

24) 前掲註 (23a) 参照

25) 前掲註 (23a) 参照

26) 前掲註 (23a) 参照

27) 大庭康時他 1988「都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告(Ⅱ) 博多」『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第184集』福岡市教育委員会

28a) 池崎謙二他 1997「博多60 - 第1次、4次、8次調査報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第543集』東長密寺建設地内遺跡調査会・冷泉町遺跡調査会・福岡市教育委員会

28b) 亀井明徳 1986「日本貿易陶磁史の研究」株式会社同朋舎出版

29) 大庭康時 1997「博多57 - 博多遺跡群第85次調査の概要」『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第522集』福岡市教育委員会・福岡市教育委員会・佐藤一郎氏のご教示により写真記録を行った。

30) 喜界町の水注III類は亀井明徳氏が最初に気付き報告したと聞くが、文献は手元にはない。亀井氏の資料細部についての記述があれば幸いである。

31) 池崎謙二 2002「鴻臚館跡12 - 平成11・12年度発掘調査報告書」『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第733集』福岡市教育委員会

SD1045壙、北館と南館の間の壙はB期(11世紀中頃)の埋没で鴻臚館終焉を示し、上層にB期の越州窯系青磁碗III類、12エ類と白磁XI類が出ている。掲載陶磁は壙の採集品で層に帰属したものではないがB期に属する。

32) 前掲註 (11) 参照

33) 東京国立博物館編 1978「日本出土の中国陶磁」、及び前掲註 (28b) 参照

34) 前掲註 (33) 参照

35) 前掲註 (18) 参照。破片はSD157[XII-XIII期]、SX152SX163[XII期]暗褐色土層[XII-XIII期]、黒褐色土凹み[XII-XIII期]、表土層から出土した。SX163[XII期]が帰属年代を示すと見られる。

36) 前掲註 (18) 参照

37) 井上信正ほか 2014「大宰府条坊跡44-推定客館跡の調査概要報告書」『太宰府市の文化財 第122集』太宰府市教育委員会 水注については未報告で、太宰府市教育委員会・井上信正氏の了解を得た。記して謝意を表する。

38) 前掲註 (33) 参照

39) 財団法人富山佐藤美術館 2000「フィリピンにわたった焼き物 - 青磁と白磁を中心 -」富山佐藤美術館コレクション、山口県立萩美術館・浦上記念館

40) 前掲註 (33) 参照

41) 福岡市博物館 2017「よみがえれ! 鴻臚館」発見100年記念特別展図録(大阪市立東洋陶磁美術館所蔵品)

42) 森達也・徳富大輔ほか 2012「日本人の愛した中国陶磁・龍泉窯青磁展」

- 43) 前掲註 (42) 参照
- 44) 前掲註 (17) 参照
- 45) 前掲註 (44) 参照
- 46) 汪慶正・主编 1996 「越窯、秘色瓷」上海古籍出版社
- 47) 林士民 1999 「青磁与越窯」上海古籍出版社
- 48) 出光美術館 1982 「近年発見の窯址出土中国陶磁展」
- 49) 李穀華 (編) 1987 「馮先銘中国古陶瓷論文集」紫禁城出版社
- 50) 汪濟英 1963 「記五代吳越國的另一官窯 - 浙江上虞縣窯寺前窯址」『文物』1963年第1期
- 51) 温州博物館編 2001 「温州古陶瓷」文物出版社
- 52a) 広東省博物館編 1981 「潮州筆架山宋代窯址發掘報告」文物出版社
- 52b) 広州市文物管理委員会・香港中文大学文物館 1989 「広州西村窯」香港中文大学中国考古芸術研究中心
- 52c) 香港大学馮平山博物館 1985 「広東唐宋窯址出土陶磁」
- 52d) A Ceramic Legacy of Asia's Maritime Trade,- Song Dynasty Guanggong Wares and other 11th-19th century Trade Ceramics found on Tioman Island, Malaysia,1985

(付記) 図版には筆者らが現地撮影した浙江省の各窯出土陶片写真が一部ある。これは 1999 年～ 2002 年に実施した浙江省の窯跡調査時の資料である。調査は浙江省文物考古研究所と合同で行い、研究所からは任世龍・沈岳明・鄭建華氏が参加、日本からは山本信夫のほか上田秀夫・後藤教彦・橋本久和・土橋理子・今井敦・池崎謙二・中島恒次郎・田中克子・大坪聖子・宮原健吾氏らが参加した。寧波和義路出土品調査では林士民氏のご配慮を得た。この調査については高梨学術奨励基金と西田東洋陶磁基金からの助成を受けたことを深く感謝いたします。

第61表 貿易陶磁器編年

中国年表		朝鮮	日本年表	起止期 高僧資料	AD	周紀区分		賢能年表	
						a. 準備段 (中)		b. 實踐濟南段	
漢	西	秦	秦	始皇	756				
					794	集賢			
					794		800	高麗	
					827		A	高麗	高麗 I 朝 達州洪武青銅 II 朝 良序宗青銅、黃銅鑄劍、馬銅
					907	隋			青銅鑄劍、馬銅
	東	宋	北宋	太祖	916				
					960	五代 十國	907	A 高	唐三彩、二郎、叔姑、綠釉 祖母イスラム陶器
					960		925		
					979	高麗			
					988	平安	927		
唐	宋	南宋	宋	真宗	1015				
					1041		1060		
					1061		1066		
					1091		1100		
					1101		1106		
	金	南宋	宋	徽宗	1115				
					1125		1127		
					1127	金			
					1130		1136		
					1179		1180		
宋	元	元	元	世祖	1224				
					1224	建炎	1251		
					1230	弘光	1263		
					1234	文天祥	1262		
					1234	弘安	1274		
					1234	嘉祐	1294		
					1234	元祐	1304		
					1230		1300		
					1230		1300		
					1230		1300		
明	明	永樂	永樂	成祖	1368				
					1368	建文	1380		
					1368	惠帝	1390		
					1368	英宗	1400		
					1368	憲皇帝	1400		
					1368	文淵閣	1400		
					1368		1400		
					1368		1400		
					1368		1400		
					1368		1400		
清	清	康熙	康熙	玄燁	1368				
					1368		1400		
					1368		1400		
					1368		1400		
					1368		1400		

110

❶ ①には寶刀頭面出土なし。大字府土器型式共併による年代確定資料。

❹2 (8a頁) 日期日附は貿易商組合を実行した場合のため出現マーク内線のみ不確定。(1)は次期に受託業者上

〔参考文献〕

第3節 京都系土師器からみた山ノ下遺跡

第1項 倉吉地域における京都系土師器について

平成28年度に行われた山ノ下遺跡の発掘調査では、壺・皿を中心とする多数の中世土師器が出土した。これらの資料は、回転台土師器などと呼称される底部回転糸切りのものを主体としながらも、手づくね成形のものを一定数含む。後者は、当地域におけるそれまでの伝統的な土師器ではなく、後述する京都産土師器との類似性から、これを模倣した京都系土師器として捉えるべきものである(註1)。

倉吉地域はこれまで、広瀬庵寺(名越・森下1979)、宮ノ下遺跡(名越ほか1976)の資料から、山陰において中世前期の京都系土師器皿が拠点的に出土する地域として知られており、この度の山ノ下遺跡の出土例はこれに追随するものである。

京都系土師器は、端的にいえば「京都らしさ」をよしとする価値観を表象する遺物であり、特に回転台土師器の分布域から出土した場合においては、その受容には何らかの背景があることが想定される。ここでは、倉吉地域の京都系土師器について検討し、その意義について述べることで、山ノ下遺跡の性格について考える一助としたい。

第2項 山ノ下遺跡出土資料の類型化と京都産土師器との比較

京都系土師器が模倣品である以上、オリジナルとしての京都産土師器が存在したものと考えられる。当地域における京都系土師器受容の様相を明らかにすべく、まず本報告において図化した資料32点の器形や法量のバリエーションを整理し、同様のものが複数認められるものについて、以下のように類型化した(第182図)。

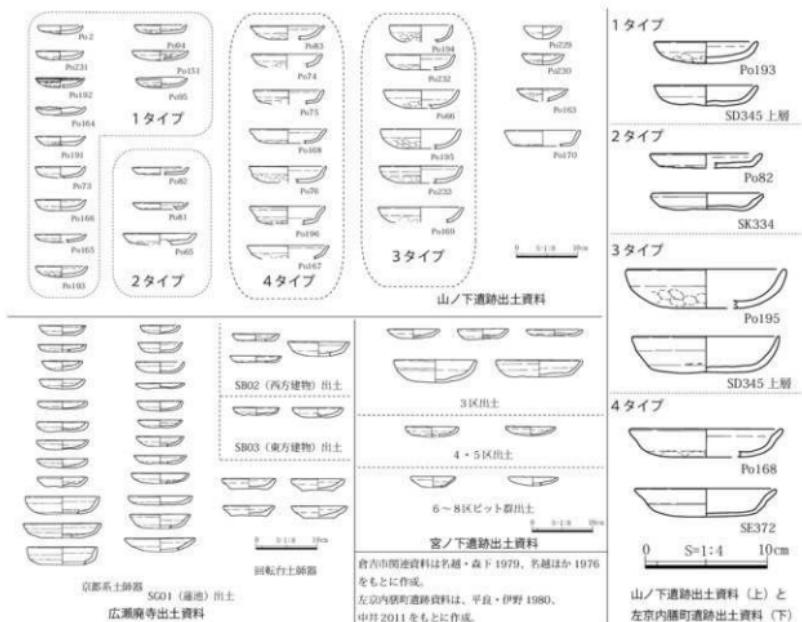
- 1 タイプ…側面觀は弓形で器高は低い。口径は8cm程度のものが多い。
- 2 タイプ…側面觀は逆台形で器高は低い。口径には9cm程度のものと、11.7cmを測るものがある。
- 3 タイプ…側面觀は弓型で器高は高い。口径は12cm前後である。
- 4 タイプ…口縁部が強いヨコナデによって外反する。口径は10.2~13.6cmを測る。

なお、京都産土師器の口縁形態は、2段ナデ→1段ナデ面取り→1段ナデと変遷することが諸書に記されているが(伊野1995など)、山ノ下遺跡出土資料はPo233を除き1段ナデであり、端部の面取りが明瞭なものはない。

設定した1~4タイプを、京都産土師器の編年として広く参照されている伊野近富による編年(伊野1987ほか)の基準となった左京内膳町遺跡の資料と対比すると、1~3タイプは、SK334・SD345上層・SE326上層と、4タイプはSE372資料と類似する。左京内膳町遺跡の資料は、中井淳史による実年代の検討から、SK334資料が13世紀第Ⅰ~Ⅱ四半期、SK345上層資料が13世紀第Ⅱ四半期、SE326上層資料が13世紀中ごろ、SE372資料が14世紀初頭に位置づけられとされている(中井2011)。

第3項 山ノ下遺跡資料の出土状況と年代

山ノ下遺跡の京都系土師器は、耕作などによって二次堆積した資料が多く、時期を推定できる遺物



第182図 倉吉地域出土京都系土師器と左京内膳町遺跡出土京都産土師器

が共伴している資料は少ない。しかし、これらが白磁・高台付壺・柱状高台など11世紀後葉から12世紀中葉の遺物とは共伴しないこと、14土坑で1タイプのPo153が12世紀後半から13世紀中葉の土師器鍋と共伴していることは、前述の年代の蓋然性を示すものと考えられる。京都産土師器との対比によって安易に年代を決定するのは危険とする中井の指摘(中井前掲)は意に留めながらも、このような出土状況から、山ノ下遺跡の資料は、13世紀前葉から14世紀初頭に位置づけられるものと考えたい。次に広瀬磨寺と宮ノ下遺跡の資料を含め検討する。

第4項 倉吉地域における京都産土師器導入の様相

広瀬庵寺、宮ノ下遺跡の資料は山ノ下遺跡のものとよく似ており、ほとんどの資料が1~3タイプとして捉えることができる(第182図)。これらの資料の属する時期については、研究者間で見解が異なる(註2)が、山ノ下遺跡の資料との類似性から大きな時期差はないものと考えられよう。さらに、3遺跡の資料とも、同時期の洛中で流通していた「コースター型」や「へそ皿」といた京都産土師器の特徴的なタイプが含まれず、導入にあたって同様の取捨選択が働いていることが読み取れる。

当地域の京都系土師器にみる、このような一元的な受容の背景を考えるにあたって、全国の京都系土師器を詳細に検討した中井淳中の、「京都の土師器をあらしめたいとする欲求」は在地の「工人た

世紀	西暦	小鴨氏関連事項	調査成果
10			
11	1020頃	小鴨基仁伯耆守に任せられ、伯耆国久米郡岩倉城に居城を構える	
12	1167 1168 1180 1184 1185 1192 1199	平清盛太政大臣となる 大山寺紛争に小鴨氏合戦 源賴朝伊豆に举兵 小鴨基康平家の麾下として従軍 基康、源範頼に会い、院宣の由、述べられ、伯耆に歸る 基康、頼朝より領土安堵さる 小鴨政清加冠の時、北条時政より政の字を賜い、駿馬「村雨」を賜う。	柱状図 柱状図 柱状図 柱状図 柱状図 柱状図 柱状図
13	1213 1244 1274 1274 1293	政清、和田合戦に功を立て、美作國由井庄を賜う。弟小鴨康虎同合戦で戦死 小鴨忠基、藤原頼嗣征夷大將軍就任式に先駆供奉す 文永の役 弘安の役 小鴨安景、鎌倉の大地震に將軍家を守護し賞を賜う	柱状図 柱状図 柱状図 柱状図 柱状図
14	1308 1331 1333 1333 1336 1338 1366 1369 1391 1392	小鴨春康、守邦親王征夷大將軍に任せられた時、絹帛を賜う 小鴨基加冠の時、足利尊氏より氏の字を賜い、鎧一両、備前國「定國」の太刀を賜う 名長と年後醍醐天皇を捕し、船上山に举兵の時、氏基参着、北口の要害を守る。 天皇京都に遷幸の時、車駕に供奉す 名長と年後醍醐天皇を捕し、船上山に举兵の時、氏基参着、北口の要害を守る。 元弘の変。小鴨忠清、伯耆守名長年に従い京都大宮戦で共に戦死 足利尊氏北朝「光明院」擁立、後醍醐天皇吉野行幸、南北朝対立 源氏將軍となり京都室町に幕府を開く 南条貞宗羽衣石に築城 小鴨氏基戦死 明徳の乱に基木(元近)山名満幸麾下として參戰京都内野で戦死 後龜山天皇神器を後小松天皇に譲られ、南北朝統一なる	柱状図 柱状図 柱状図 柱状図 柱状図 柱状図 柱状図 柱状図 柱状図 柱状図

富盛 1971 より作成

第183図 小鴨氏関連年表（10世紀から14世紀）

ちを掌握していた領主層」によるものである（中井前掲）という主張は傾聴に値するものである。倉吉地域の3遺跡から出土する土師器の制作が、同一の工人集団によるものである可能性は、京都系土師器皿の類似性に加え、口縁端部やや下に回転ナデによる陵がつけられる回転台土師器皿が共通して出土していることからも窺える。最後に、当該期において工人集団を掌握した有力者として想起される小鴨氏と、倉吉地域の事例との関連について触れながら、資料のもつ意義を考えてみたい。

第5項 まとめ－山ノ下遺跡と小鴨氏について－

小鴨氏は、小鴨・大鴨郷を根拠とし中世前期には東伯耆に大きな勢力をもった武士で、12世紀後葉の源平の争乱前後から、中世の文献にその動きが多く記されるようになる（第183図）。山ノ下遺跡の北東約200mに位置する市場城は、小鴨氏累代の居城岩倉城から北西約3kmに位置する同城の出城的存在であり、「伯耆民談記」によれば小鴨氏の家臣岡田某氏の居城であったという（新編倉吉市史編集委員会編1995b）。これに加え、5間×5間以上の総柱建物を含む掘立柱建物群の検出、威信財とし

ての貿易陶磁器の出土などの調査成果から、山ノ下遺跡は小鴨氏に関連する有力者が居を構えた地であったと推定できよう。掘立柱建物群が盛行した11世紀後葉から13世紀中葉は、小鴨氏が東伯耆を代表する武士としての地位を確立し、源平の争乱を経て、鎌倉幕府およびそれに連なる有力者との繋がりを深めていく時期にあたる。京都系土師器は後者の時期に重複するものであり、掘立柱建物9・132ピット内で重ねられた状態で埋納されていたPo94・95は、建物群を残した勢力が京都系土師器を儀礼に用いていたことを端的に示すものといえるだろう。

また、山ノ下遺跡・広瀬廃寺跡・宮ノ下遺跡はともに、小鴨郷の推定範囲内(新編倉吉市史編集委員会編1995a)に位置する遺跡であることも特筆すべき点であり、特に広瀬廃寺跡については岩倉城跡に近接していることから、小鴨氏が壇越として影響力を持っていた可能性も指摘されている(名越・森下1979)。

以上のような山ノ下遺跡の調査成果と関連事例を含めた歴史的環境の検討から、中世前期の当地域における京都系土師器の受容は、小鴨氏の意向によってなされたことが想定される。その意図は明らかではないが、幕府の本拠地である鎌倉では12世紀末から13世紀代、北条氏の本貫地である蘿山では13世紀代に京都系土師器が生産されており(中井前掲)、倉吉地域と同様、回転台土師器の分布域にあって拠点的な出土状況を呈していることは示唆的である。13世紀の小鴨氏の動きも鑑み、鎌倉を中心として成立した武家のスタイルが、小鴨氏による京都系土師器の受容に影響を与えた可能性は考えられないだろうか。

註

(註1) 中井淳史は「京都周辺で生産され、流通する土師器を京都産土師器と規定したうえで、これを技術的かつ器形・形態的に模倣したもの京都系土師器と定義する」(中井前掲)としており、且群土器と呼称する手づくね成形の土師器の範疇に含めながら、これを区別している。

(註2) 広瀬廃寺の資料は報告書では12～13世紀とされている(名越・森下前掲)が、百瀬正恒は13世紀前半から14世紀中葉(百瀬1998)、八峰興は14世紀(八峰1998)、中井淳史は13世紀後半に(中井前掲)位置づけている。同じく12～13世紀と報告される(名越ほか1976)宮ノ下遺跡の資料について、中井(中井前掲)は13世紀後半と中心とする時期としている。

参考文献

伊野近富 1987『かわらけ考』『京都府埋蔵文化財論集』第1集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

伊野近富 1995「1. 土師皿」「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社

新編倉吉市史編集委員会編 1995a『新編倉吉市史 第一巻 古代編』倉吉市

新編倉吉市史編集委員会編 1995b『新編倉吉市史 第二巻 中・近世編』倉吉市

平良泰久・伊野近富ほか 1980『平安京左京内膳町昭和54年度発掘調査概要』『埋蔵文化財調査既報』京都府教育委員会

富盛輝雄 1971『小鴨氏』

橋本久和 1995「10. 山跡」「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社

名越勉・森下哲也 1979『広瀬廃寺発掘調査概報』倉吉市教育委員会

名越勉ほか 1976『宮ノ下遺跡発掘調査報告』倉吉市教育委員会

百瀬正恒 1998『倉吉市 広瀬廃寺の遺構と遺物』『中世土器研究』88号 中世土器研究会

八峰興 1998「山陰における中世土器の変遷について—供膳具・煮炊具を中心として—」『中世土器の基礎研究』XIII 日本中世土器研究会

図 版

山ノ下遺跡

航空写真



1 調査地遠景(南西から)



2 調査地遠景(南東から)



1 調査地遠景(北東から)



2 調査地遠景(北西から)





1 南西部東西トレンチ
(9E-10d杭付近)
土層断面
(北東から)



2 南西部東西トレンチ
(南東端付近) 土層断面
(北東から)



3 北東部南北トレンチ 1
(北西端付近) 土層断面
(北西から)



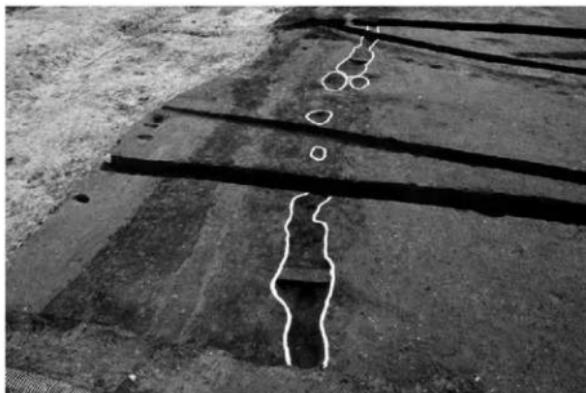
1 北東部南北トレンチ 1
(南東端付近) 土層断面
(西から)



2 南西部南北トレンチ 2
(東端付近) 土層断面
(南東から)



3 T45-6j-10F-2f
サブトレンチ
(Ⅳ層) 土層断面
(北から)



1 645溝
完掘状況
(北東から)



2 645溝
土層断面(A-A'断面)
(北東から)



3 645溝
土層断面(B-B'断面)
(北東から)



1 1～3田 検出状況(西から)



2 1田 完掘状況(南から)



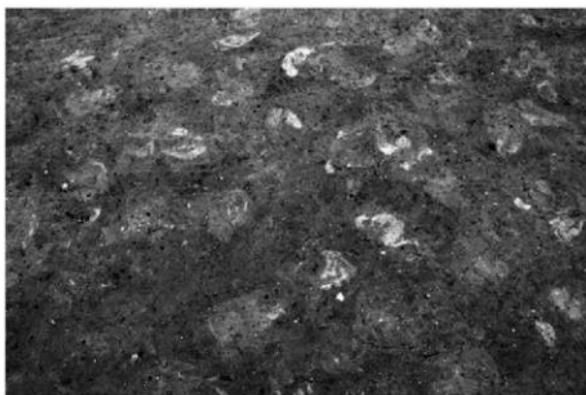
3 1田 土層断面(北東から)



4 2田 土層断面(南から)



5 3田 土層断面(南から)



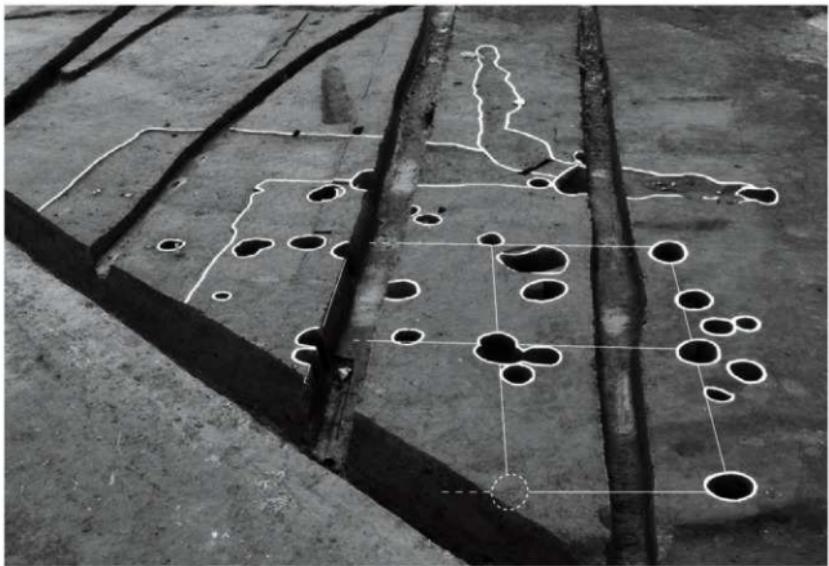
1 3田
偶蹄目足跡検出状況
(北から)



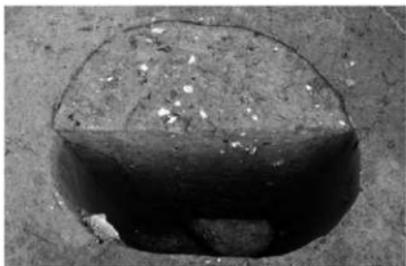
2 3田
偶蹄目足跡完掘状況
(北から)



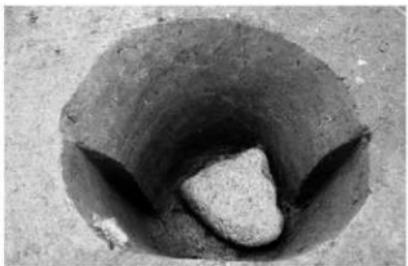
3 3田
偶蹄目足跡土層断面
(西から)



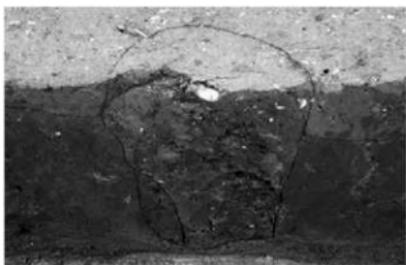
1 掘立柱建物12、666溝 完掘状況(西から)



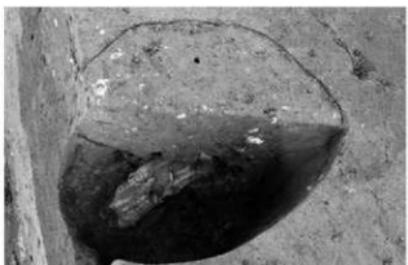
2 671ピット 土層断面(南から)



3 671ピット 硬盤石出土状況(南から)



4 679ピット 土層断面(南から)

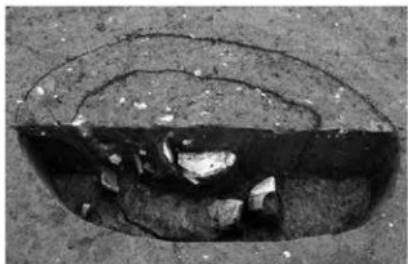


5 746ピット 土層断面(南西から)

図版 10

山ノ下遺跡

第2面
(掘立柱建物12)



1 656ピット 土層断面(南から)



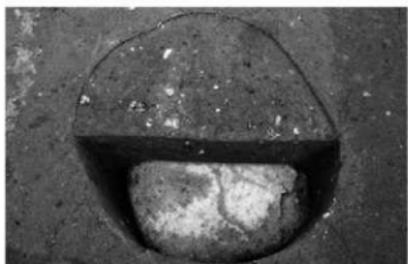
2 656ピット 土層断面(南から)



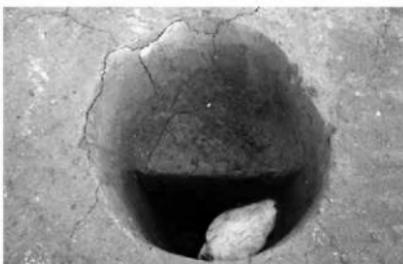
3 656ピット 遺物出土状況(南から)



4 656ピット 硬盤石出土状況(南から)



5 663ピット 土層断面(南から)



6 663ピット 土層断面(南から)



7 663ピット 頸出土状況(南から)



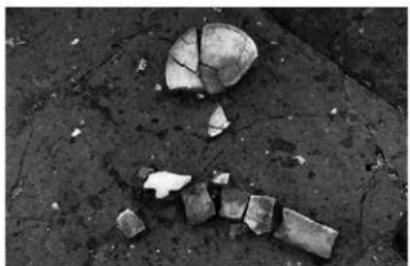
8 663ピット 頸出土状況(南西から)



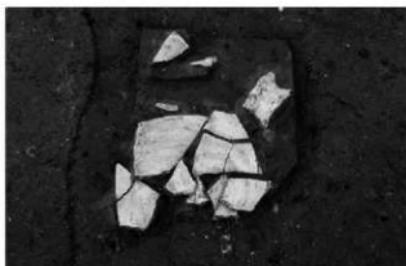
1 666溝 土層断面(東から)



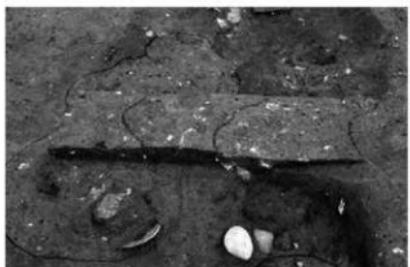
2 666溝 遺物(Po26他)出土状況(南から)



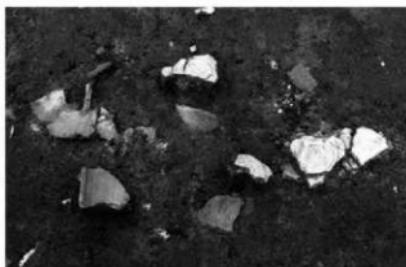
3 666溝 遺物(Po13・41)出土状況(東から)



4 666溝 遺物(Po14・40)出土状況(南から)



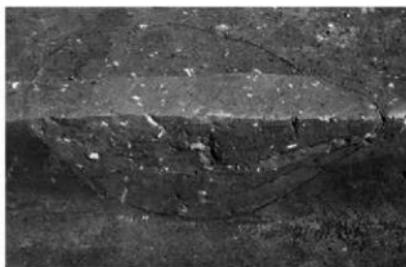
5 667溝 土層断面(南から)



6 667溝 遺物出土状況(東から)



7 674土坑 完掘状況(南から)



8 674土坑 土層断面(南から)

図版 12

山ノ下遺跡
第2面



1 670ピット 遺物出土状況(南西から)



2 670ピット 磨出土状況(南から)



3 670ピット 磨出土状況(南から)



4 670ピット 磨出土状況(南から)



5 678ピット 土層断面(南から)



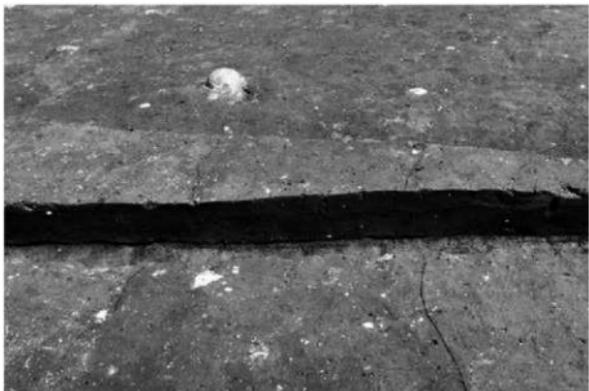
6 678ピット 磨出土状況(南から)



7 678ピット 磨出土状況(南から)



1 5溝、6畦畔、7田
検出状況
(南から)



2 5溝、6畦畔、7田
土層断面
(南から)



3 5溝、6畦畔、7田
完掘状況
(南から)



1 第3面 検出状況(西から)



2 10田、11畦畔、12・13溝 完掘状況(西から)







1 挖立柱建物 1～5 完掘状況(北東から)



2 挖立柱建物13～15・17 完掘状況(俯瞰)

図版 18

山ノ下遺跡
第4面（掘立柱建物1）



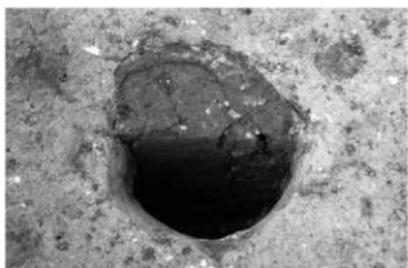
1 掘立柱建物1 完掘状況(東から)



2 15ピット 土層断面(北から)



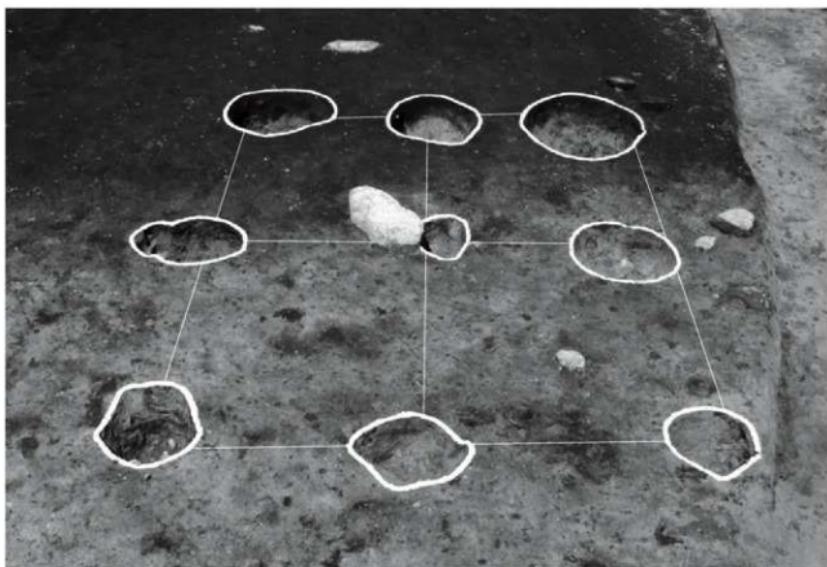
3 21・17ピット 土層断面(北から)



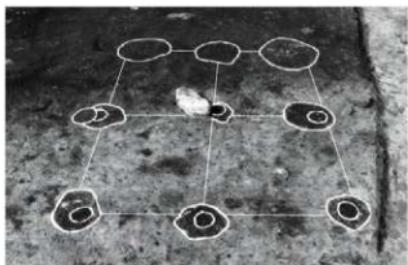
4 20ピット 土層断面(南から)



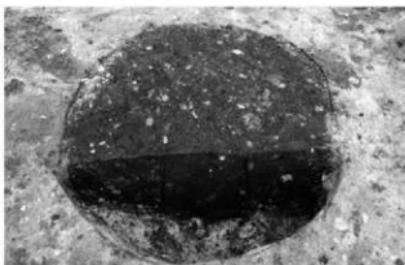
5 18ピット 土層断面(南から)



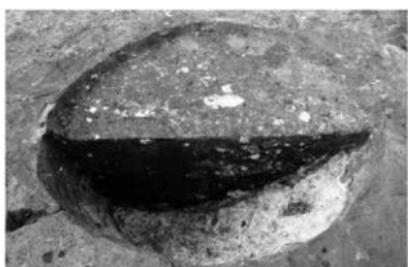
1 掘立柱建物2 完掘状況(南から)



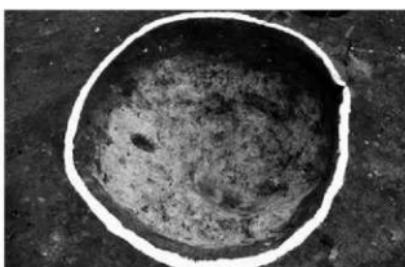
2 掘立柱建物2 検出状況(南から)



3 36ピット 土層断面(東から)



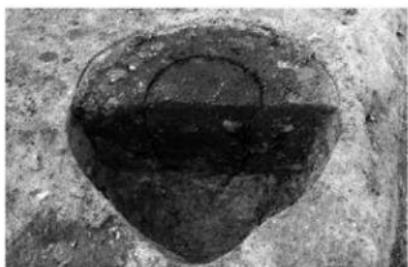
4 29ピット 土層断面(北から)



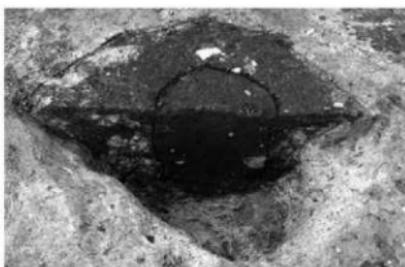
5 29ピット 完掘状況(南から)

図版 20

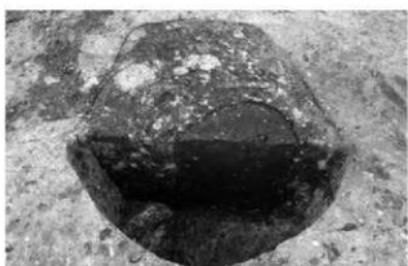
山ノ下遺跡
第4面
(掘立柱建物2)



1 35ピット 土層断面(南から)



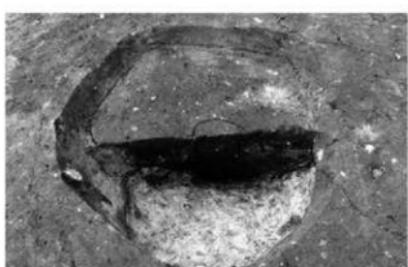
2 34ピット 土層断面(南から)



3 33ピット 土層断面(南から)



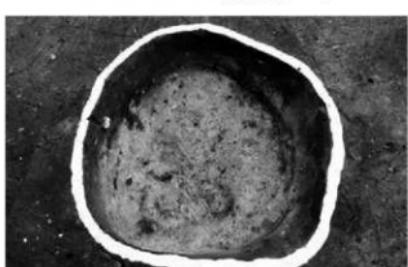
4 32ピット 土層断面(西から)



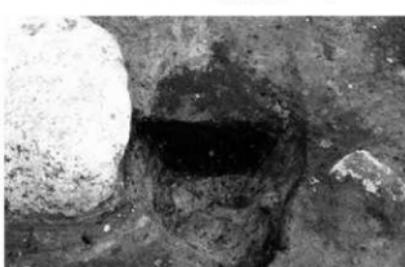
5 30ピット 土層断面(北から)



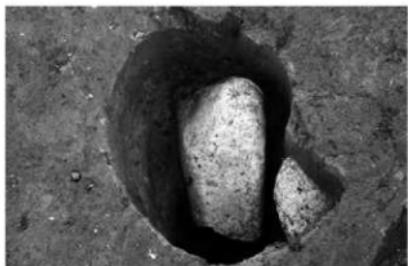
6 31ピット 土層断面(北から)



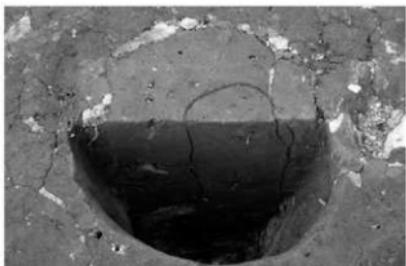
7 30ピット 完掘状況(南から)



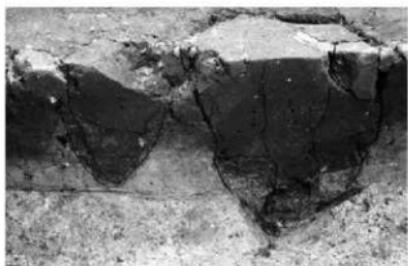
8 37ピット 土層断面(南から)



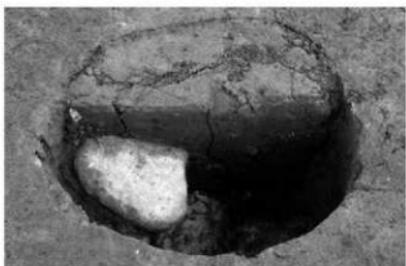
1 78ピット 種出土状況(西から)



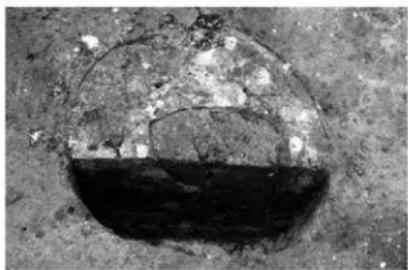
2 165ピット 土層断面(南から)



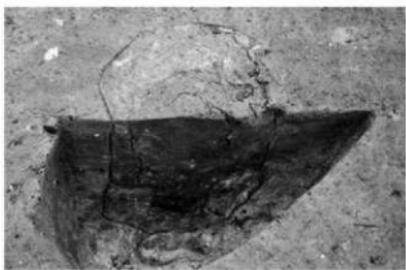
3 115・58ピット 土層断面(西から)



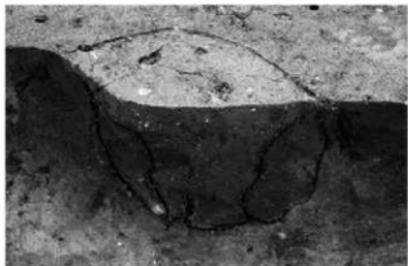
4 173ピット 土層断面(南から)



5 174ピット 土層断面(南から)



6 128ピット 土層断面(南から)



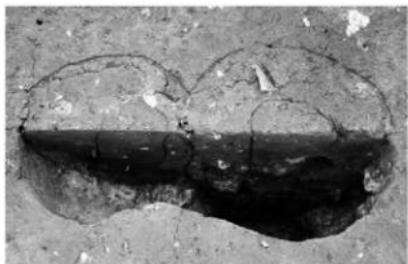
7 119ピット 土層断面(西から)



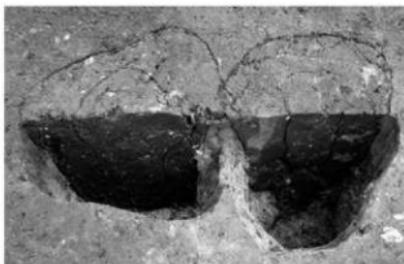
8 89ピット 土層断面(西から)

図版 22

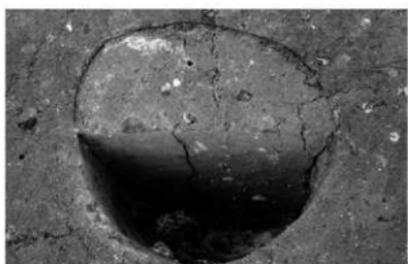
山ノ下遺跡
第4面（掘立柱建物4）



1 44・70ピット 土層断面(北東から)



2 47・103ピット 土層断面(南から)



3 49ピット 土層断面(南から)



4 90ピット 碇盤石出土状況(南から)



5 53ピット 土層断面(北から)



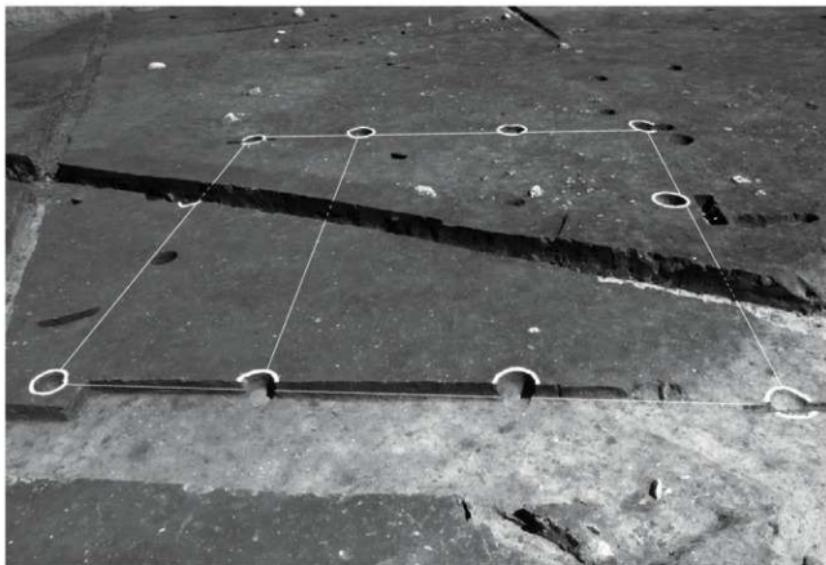
6 90ピット 碇盤石上面アップ(南から)



7 170ピット 検出状況(東から)



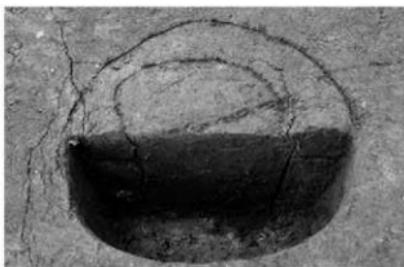
8 170ピット 土層断面(東から)



1 挖立柱建物6(39溝含む) 完掘状況(南西から)



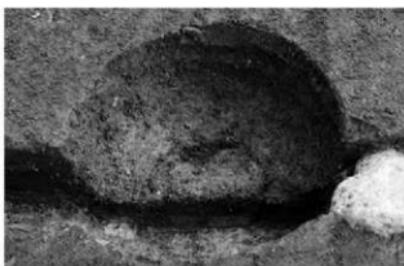
2 303ピット 土層断面(南東から)



3 286ピット 土層断面(南西から)



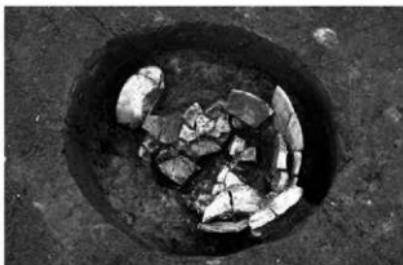
4 305ピット 土層断面(南西から)



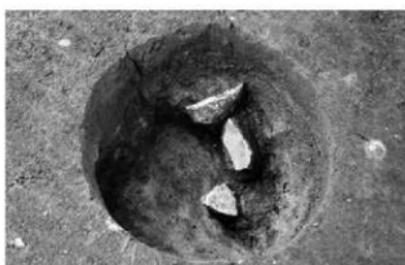
5 305ピット 柱のあたり検出状況(南西から)



1 278ピット 遺物出土状況(北東から)



2 278ピット 遺物(Po86・88・92)出土状況(南から)



3 278ピット 遺物(Po88・92)出土状況(南東から)



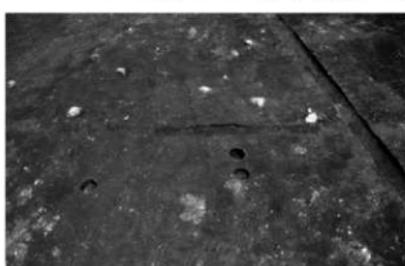
4 277ピット 土層断面(南から)



5 277ピット 遺物(Po89・90・93)出土状況(東から)



6 277ピット 遺物(Po87)出土状況(南から)



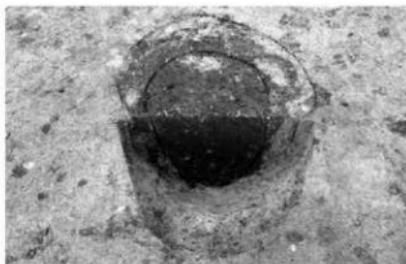
7 39溝 完掘状況(南西から)



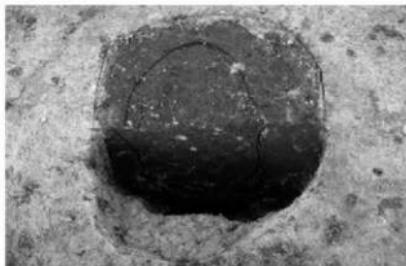
8 39溝 土層断面(南東から)



1 掘立柱建物7 完掘状況(南西から)



2 316ピット 土層断面(東から)



3 317ピット 土層断面(東から)



4 318・632・323ピット 土層断面(南西から)



5 319ピット 土層断面(南東から)



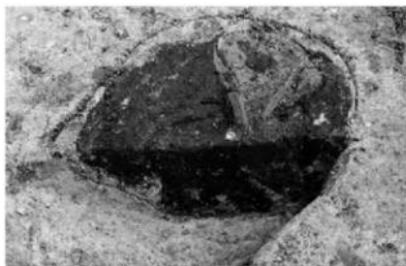
6 315・634ピット 土層断面(北東から)



7 321ピット 土層断面(北西から)



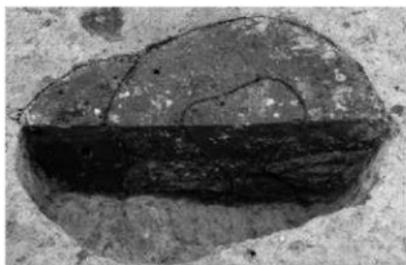
1 掘立柱建物 8 完掘状況(北西から)



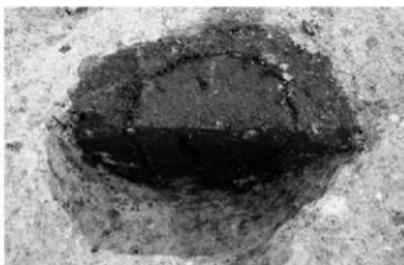
2 427ピット 土層断面(北西から)



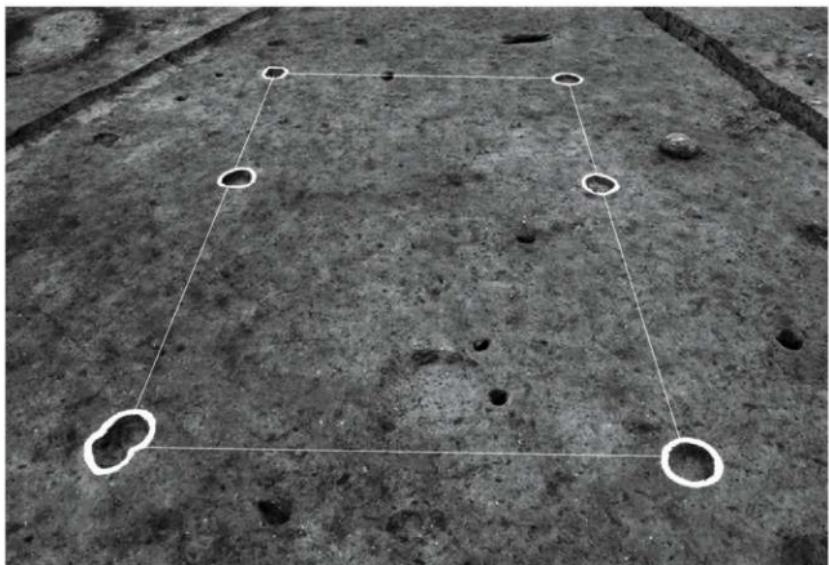
3 428・432ピット 土層断面(北西から)



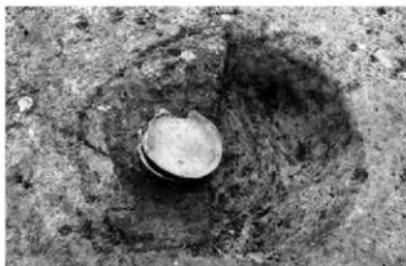
4 429・435ピット 土層断面(北西から)



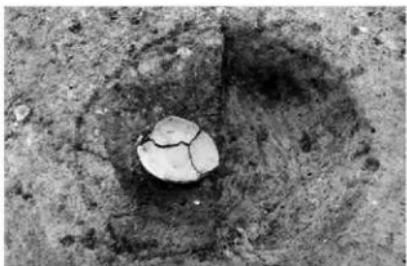
5 422ピット 土層断面(北西から)



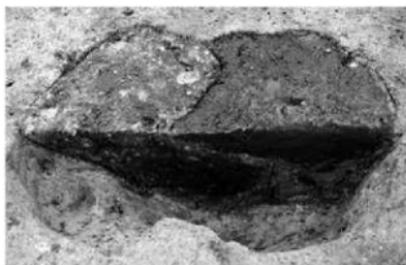
1 掘立柱建物9 完掘状況(南西から)



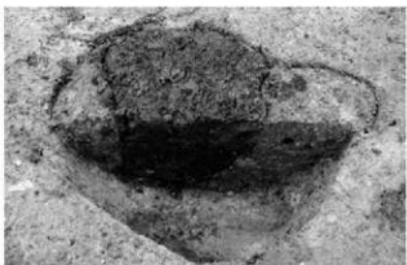
2 132ピット 遺物(Po94・95)出土状況(西から)



3 132ピット 遺物(Po95)出土状況(西から)



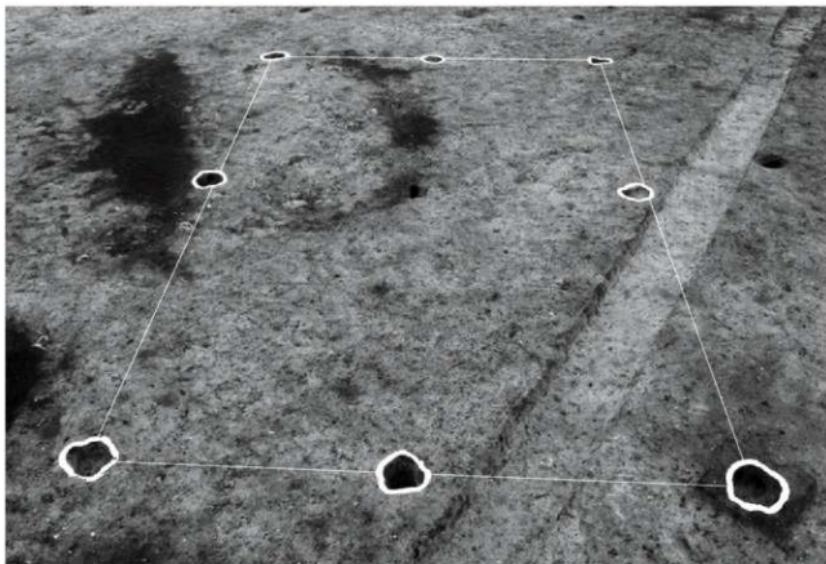
4 538ピット 土層断面(南東から)



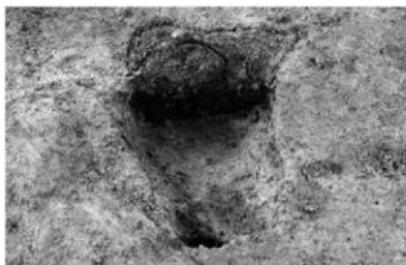
5 545ピット 土層断面(東から)

図版 28

山ノ下遺跡
第4面（掘立柱建物10）



1 掘立柱建物10 完掘状況(南西から)



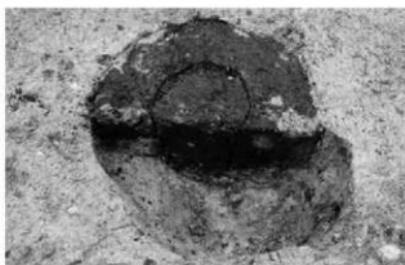
2 621ピット 土層断面(南東から)



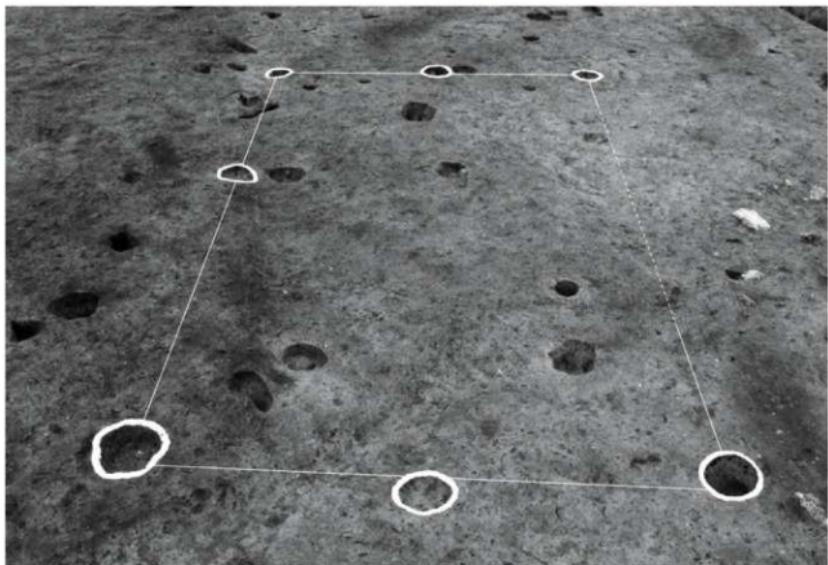
3 624・630ピット 土層断面(南東から)



4 626ピット 土層断面(北西から)



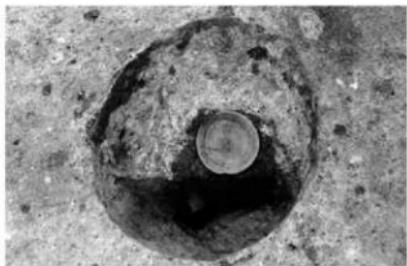
5 627ピット 土層断面(北西から)



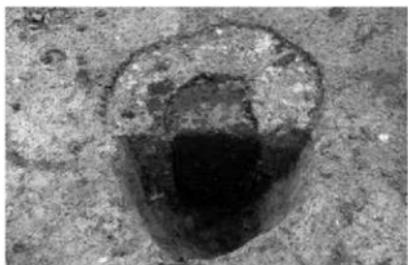
1 挖立柱建物11 完掘状況(南西から)



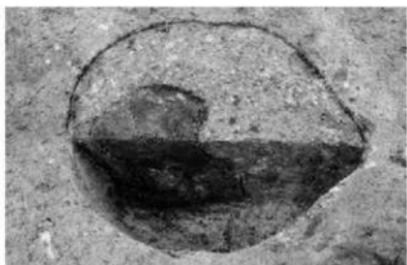
2 471ピット 遺物(Po98)出土状況(南西から)



3 471ピット 遺物(Po100)出土状況(南西から)



4 519ピット 土層断面(南西から)



5 516ピット 土層断面(南東から)



1 挖立柱建物13(北から)



2 挖立柱建物13(俯瞰)



1 700・726ピット 土層断面(東から)



2 701・924・923ピット 土層断面(南から)



3 702ピット 焼土検出状況(北西から)



4 706ピット 遺物(Po106・126他)出土状況(東から)



5 705ピット 柱根出土状況(南から)



6 705ピット 根巻き石出土状況(南から)



7 708・733ピット 土層断面(南から)



8 708ピット 根巻き石出土状況(南から)

図版 32

山ノ下遺跡

第4面
(掘立柱建物13)



1 709ピット 遺物(Po104・105・124)出土状況(南東から)



2 710・735ピット 土層断面(東から)



3 736・711ピット 土層断面(南から)



4 712ピット 根石出土状況(東から)



5 713ピット 遺物(Po129)出土状況(東から)



6 713ピット 磚出土状況(東から)



7 713ピット 遺物(Po111)出土状況(東から)



8 715ピット 磚出土状況(東から)



1 718・861ピット 土層断面(東から)



2 718ピット 遺物(Po102)出土状況(南から)



3 719・741ピット 土層断面(南から)



4 719・741ピット 遺物(Po108・123)出土状況(南から)



5 717ピット 硏盤石出土状況(南から)



6 722・795ピット 切り合い状況(南東から)



7 744・723ピット 土層断面(東から)



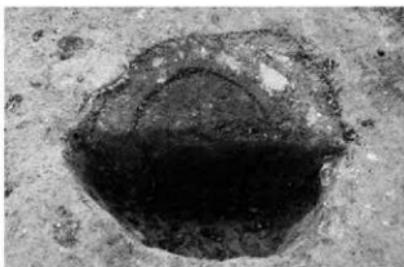
8 725ピット 土層断面(北西から)



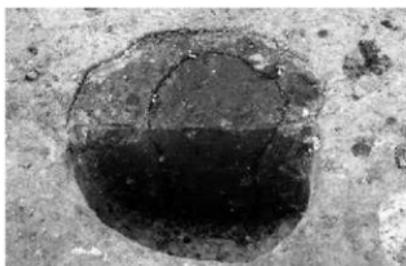
1 挖立柱建物14 完掘状況(北西から)



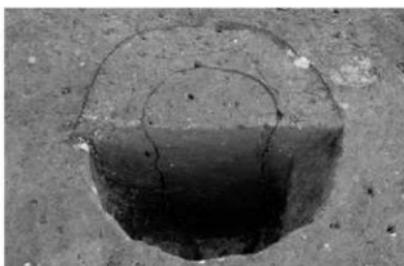
2 201ピット 土層断面(南から)



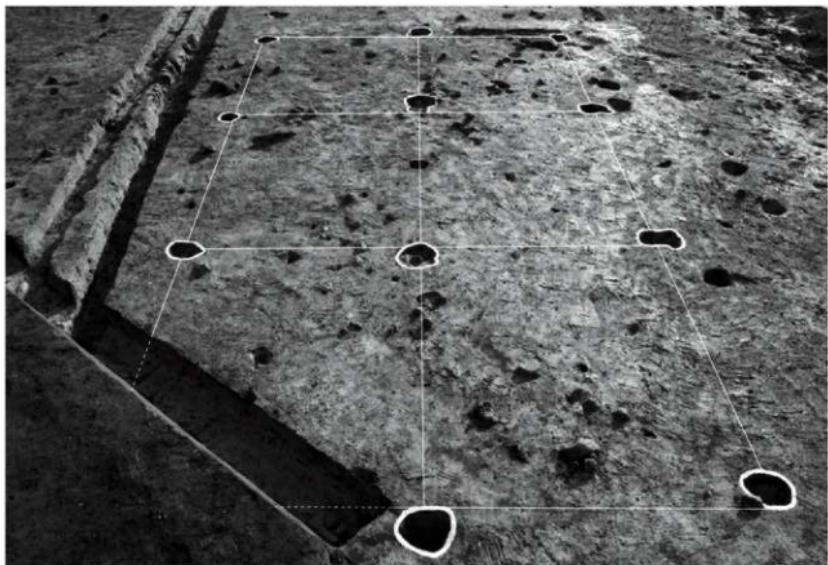
3 205ピット 土層断面(東から)



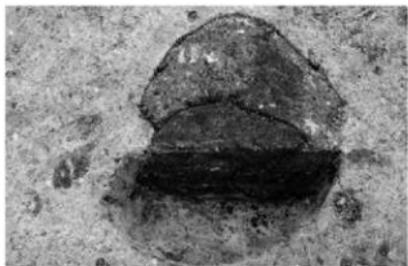
4 207ピット 土層断面(南東から)



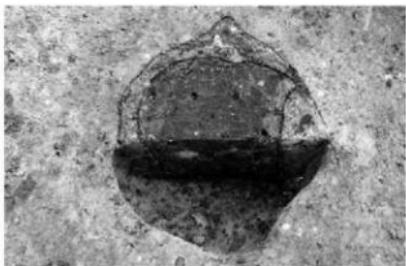
5 204ピット 土層断面(南から)



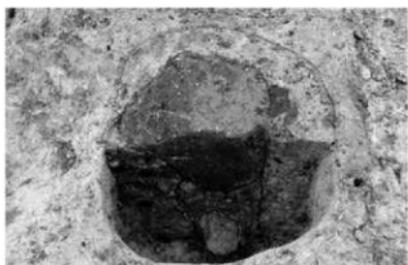
1 掘立柱建物18 完掘状況(西から)



2 2049ピット 土層断面(北から)



3 2051ピット 土層断面(北から)



4 2043ピット 土層断面(南から)

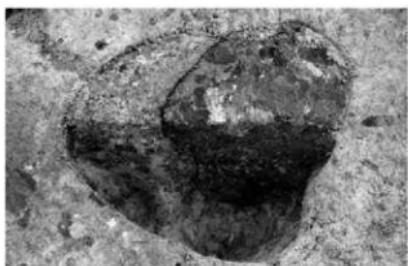


5 2045・2046ピット 土層断面(西から)

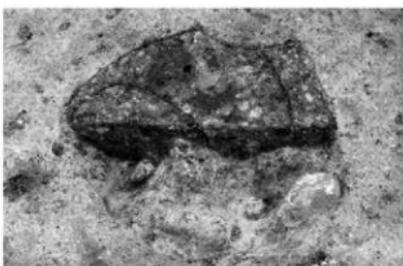
図版 36

山ノ下遺跡

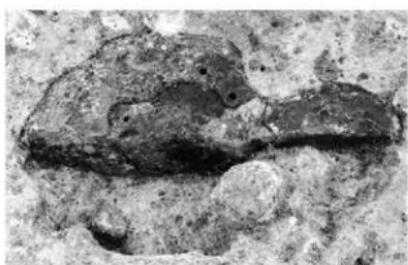
第4面
(掘立柱建物
18・
15)



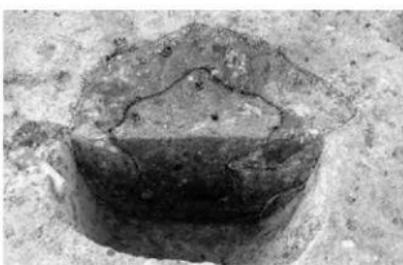
1 2048ピット 土層断面(西から)



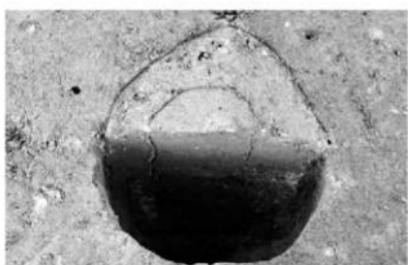
2 2055・2056ピット 土層断面(北から)



3 2053・2054ピット 土層断面(北から)



4 2052ピット 土層断面(東から)



5 943ピット 土層断面(東から)



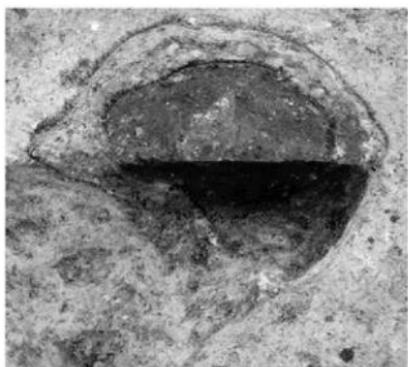
6 939ピット 遺物(Po131)出土状況(西から)



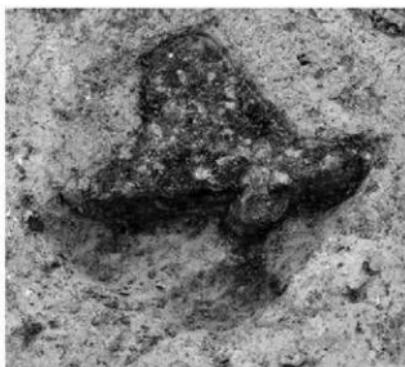
7 938ピット 土層断面(西から)



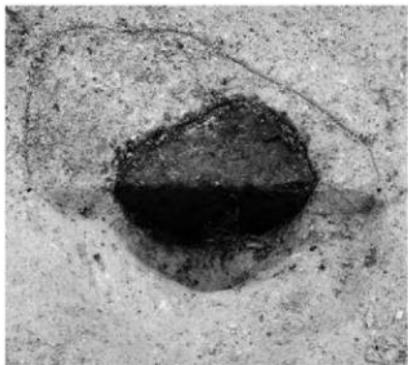
8 942ピット 土層断面(南から)



1 952ピット 土層断面(東から)



2 954ピット 土層断面(東から)



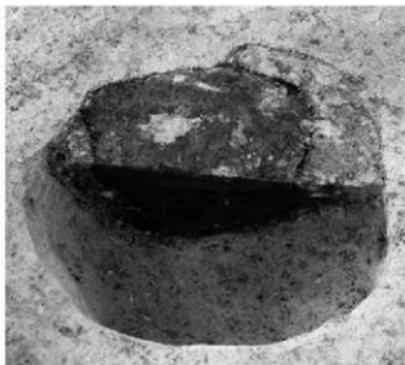
3 956ピット 土層断面(南から)



4 958ピット 土層断面(北から)



5 758・759ピット 土層断面(東から)



6 962ピット 土層断面(東から)

図版 38

山ノ下遺跡

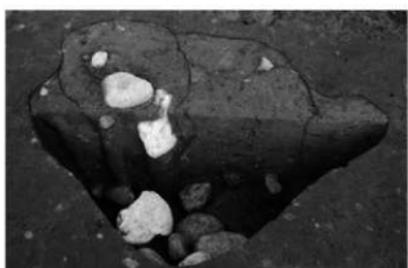
第4面
(掘立柱建物17)



1 948ピット 土層断面(南東から)



2 948ピット 遺物出土状況(東から)



3 823・863ピット 土層断面(南東から)



4 783・812ピット 土層断面(南東から)



5 783ピット 遺物出土状況(南から)



6 783ピット 遺物出土状況(東から)



7 923ピット 遺物(Po132)出土状況(南から)



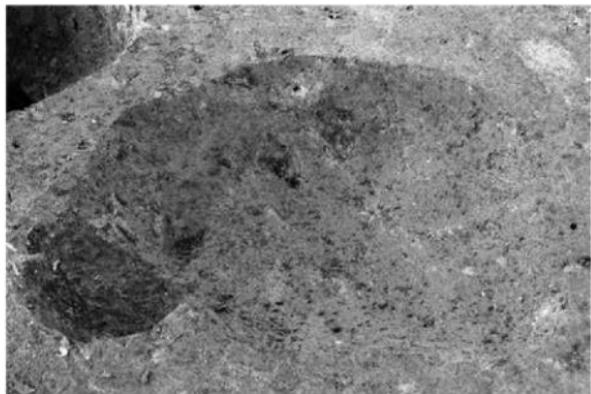
8 911ピット 遺物(Po139)出土状況(北から)



1 914土器溜まり
検出状況
(北から)



2 914土器溜まり
遺物出土状況
(南東から)



3 914土器溜まり
完掘状況
(南東から)

図版 40

山ノ下遺跡
第4面（土器溜まり）



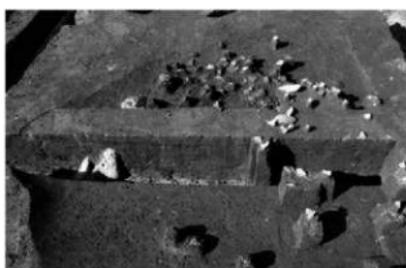
1 947土器溜まり 遺物出土状況(北から)



2 947土器溜まり 遺物出土状況(西から)



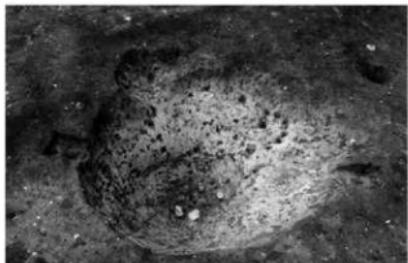
3 947土器溜まり 完掘状況(北から)



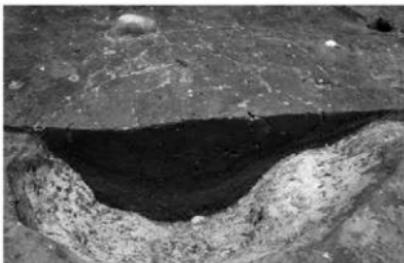
4 947土器溜まり 土層断面(B-B'断面)(東から)



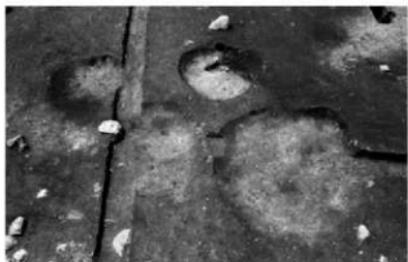
5 947土器溜まり 検出状況(東から)



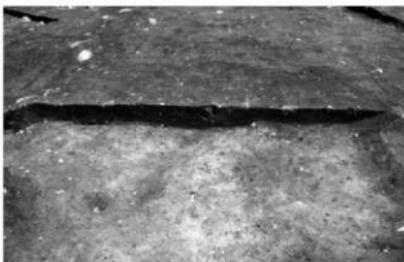
1 14 土坑 完掘状況(南から)



2 14土坑 土層断面(南から)



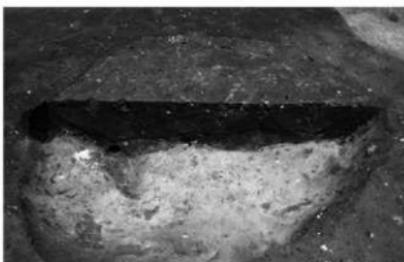
3 22~25土坑 完掘状況(東から)



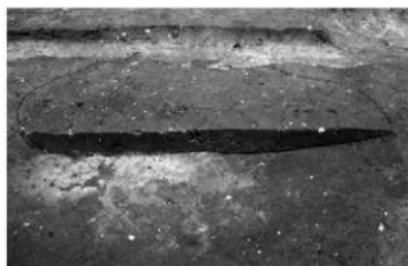
4 22土坑 土層断面(西から)



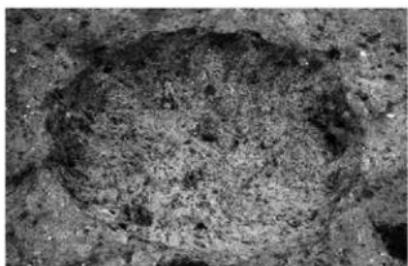
5 24土坑 土層断面(西から)



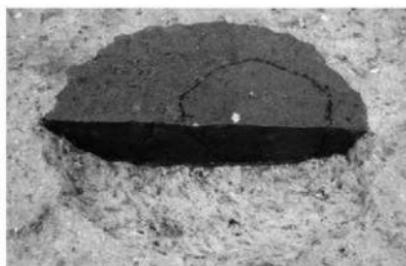
6 23土坑 土層断面(南から)



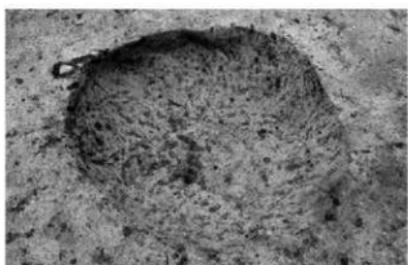
7 25土坑 土層断面(南から)



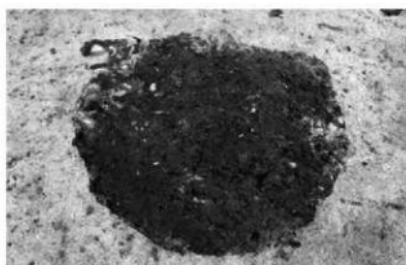
1 129土坑 完掘状況(南東から)



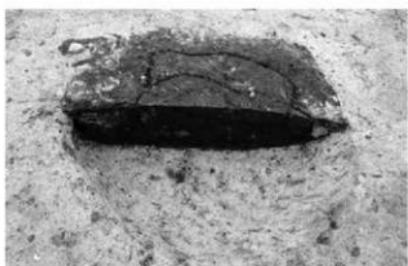
2 129土坑 土層断面(南東から)



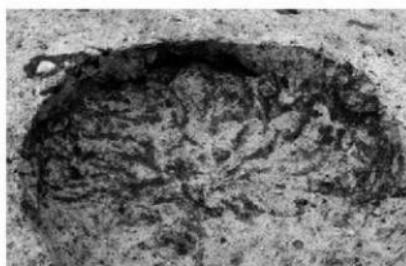
3 220土坑 完掘状況(南西から)



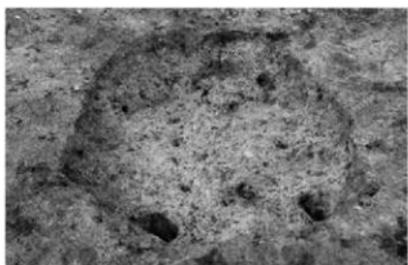
4 220土坑 検出状況(南西から)



5 220土坑 土層断面(南西から)



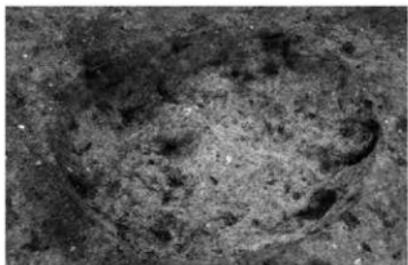
6 220土坑 掘削痕検出状況(南西から)



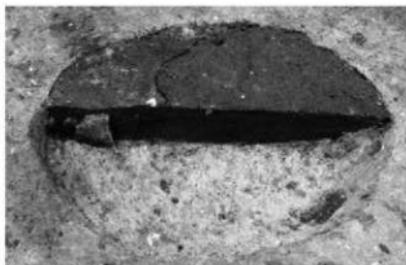
7 620土坑 完掘状況(北東から)



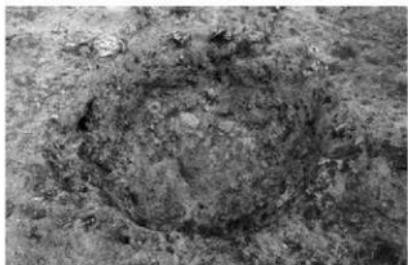
8 620土坑 土層断面(南西から)



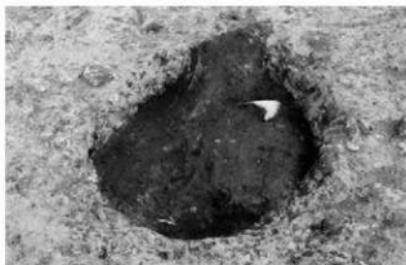
1 134土坑 完掘状況(南東から)



2 134土坑 土層断面(南東から)



3 349土坑 完掘状況(南西から)



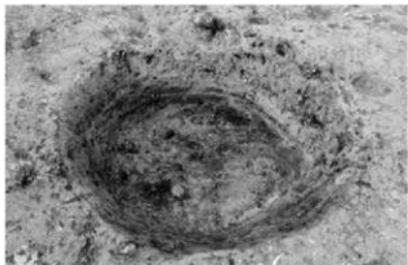
4 349土坑 検出状況(南西から)



5 349土坑 土層断面(南西から)



6 349土坑 碓出土状況(南西から)



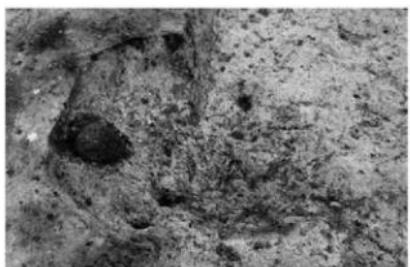
7 350土坑 完掘状況(南西から)



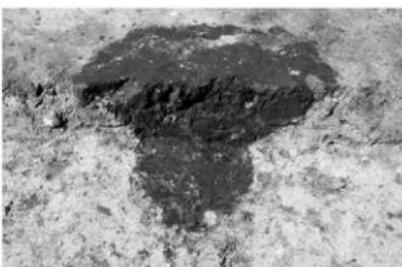
8 350土坑 土層断面(南西から)

図版 44

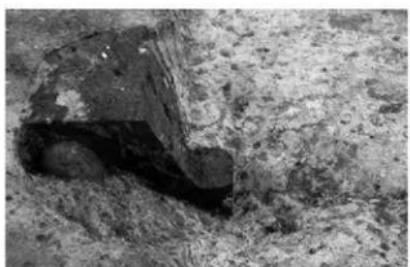
山ノ下遺跡
第4面（土坑・ピット）



1 633土坑 完掘状況(南から)



2 633土坑 検出状況(東から)



3 633土坑 土層断面(南から)



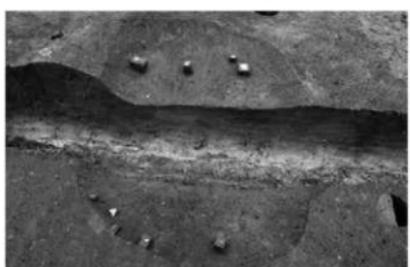
4 650ピット 土層断面(北西から)



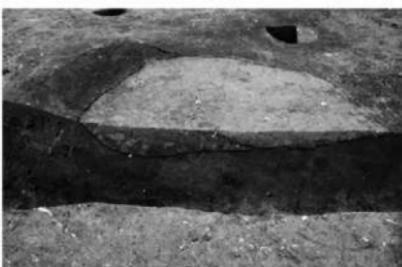
5 697土坑 遺物(Po146・147)出土状況(北から)



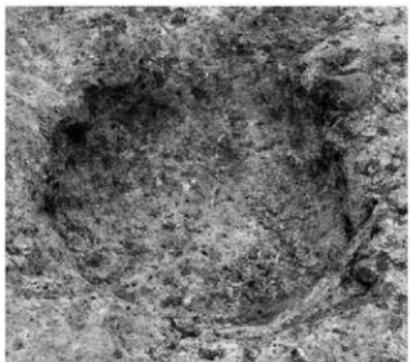
6 2002土坑 土層断面(南から)



7 950土坑 遺物出土状況(南から)



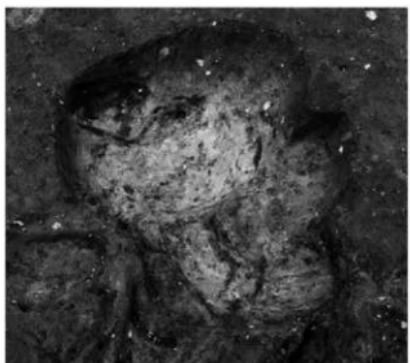
8 950土坑 土層断面(南から)



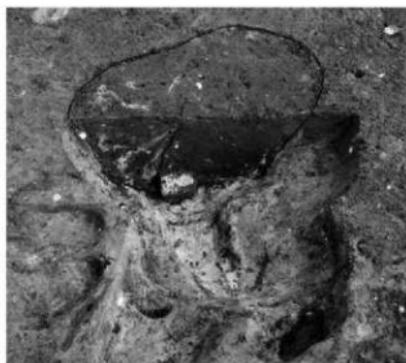
1 2096土坑 完掘状況(南西から)



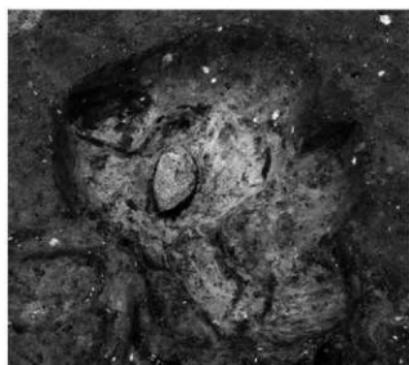
2 2096土坑 碓出土状況(南西から)



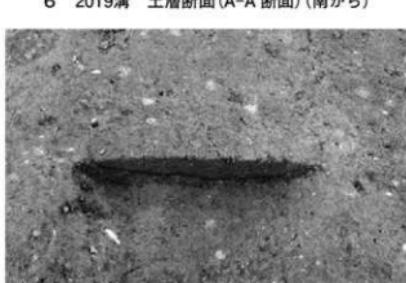
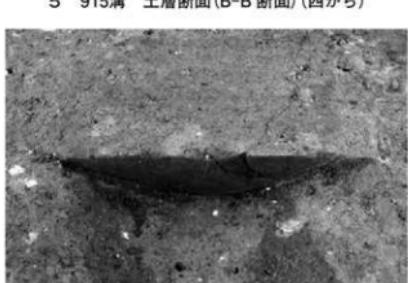
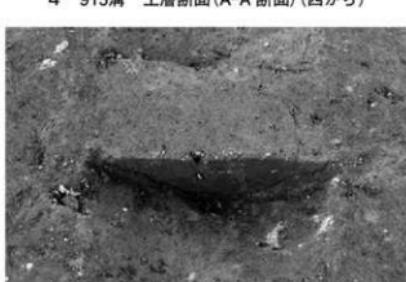
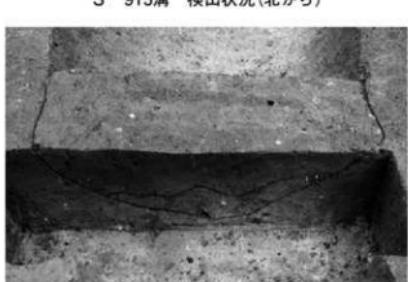
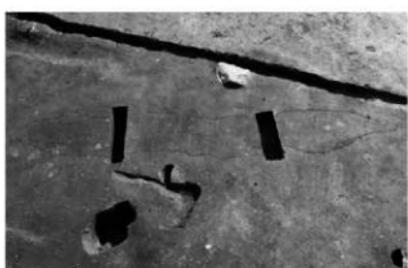
3 2028土坑 完掘状況(南から)

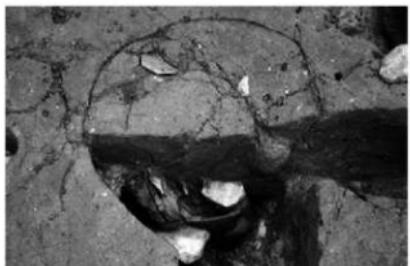


4 2028土坑 土層断面(南から)



5 2028 碓出土状況(南から)

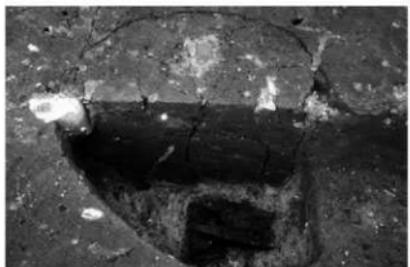




1 55ピット 土層断面(西から)



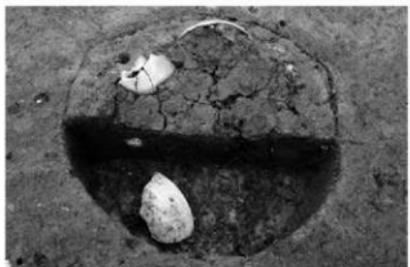
2 55ピット 遺物(Po179)出土状況(西から)



3 69ピット 土層断面(南から)



4 77ピット 碓出土状況(南から)



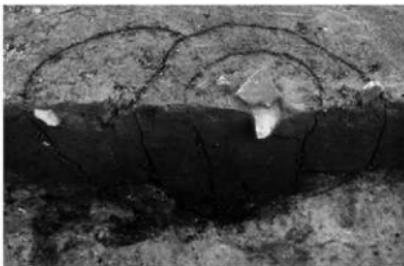
5 314ピット 遺物(Po163・164・170)出土状況(南東から)



6 314ピット 遺物(Po163・164)出土状況(南東から)



7 352・353ピット 遺物出土状況(南東から)



8 352・353ピット 土層断面(南東から)

図版 48

山ノ下遺跡
第4面
(ピット)



1 748ピット 碓出土状況(南東から)



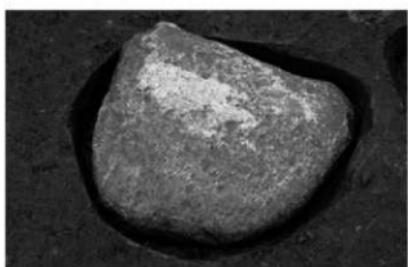
2 748ピット 碓出土状況(北から)



3 789ピット 土層断面(東から)



4 789ピット 遺物(Po159・177)出土状況(南から)



5 793ピット 碓出土状況(北東から)



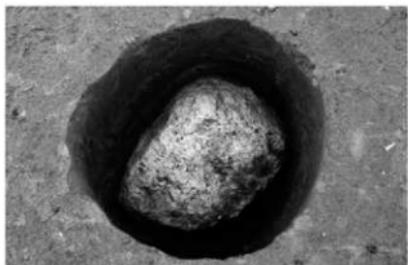
6 793ピット 碓出土状況(北東から)



7 862ピット 土層断面(東から)



8 862ピット 碓出土状況(東から)



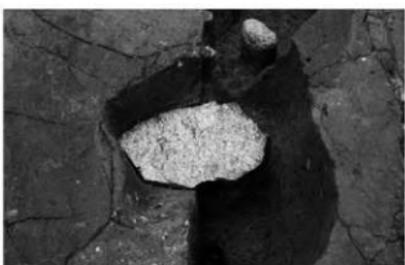
1 848ピット 磨出土状況(西から)



2 848ピット 柱根出土状況(東から)



3 887ピット 遺物(Po174)出土状況(南から)



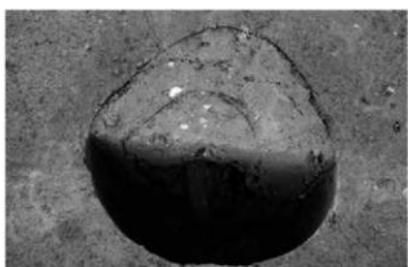
4 924ピット 磨出土状況(西から)



5 949ピット 磨出土状況(北東から)



6 949ピット 磨出土状況(南東から)



7 996ピット 土層断面(東から)



8 996ピット 柱根出土状況(東から)

図版 50

山ノ下遺跡
第4面
(ビット)



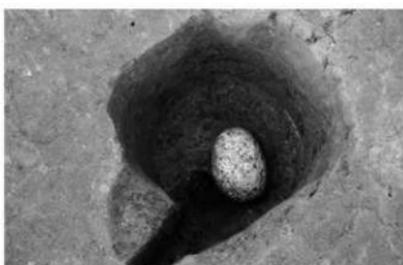
1 997ピット 土層断面(東から)



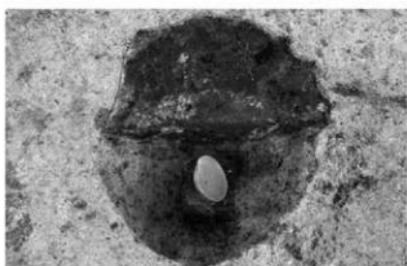
2 997ピット 柱根出土状況(南東から)



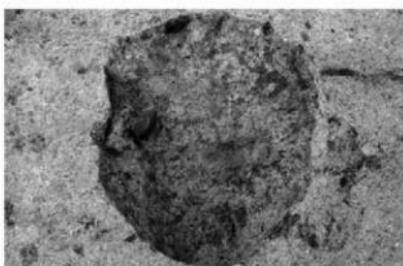
3 1000ピット 碓出土状況(南から)



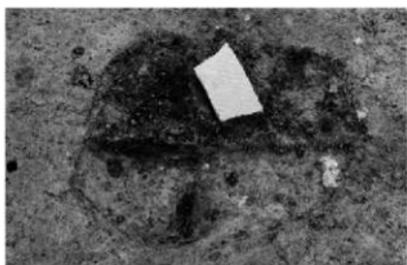
4 1000ピット 碓出土状況(南から)



5 1037ピット 遺物(Po158)出土状況(南から)



6 1037ピット 遺物(Po157)出土状況(南から)



7 1047ピット 遺物出土状況(南から)



8 1037ピット 遺物(Po157)出土状況(南から)



1 288・289土坑 完掘状況(北東から)



2 288・289土坑 検出状況(南から)

図版 52

山ノ下遺跡
第5面
(土坑)



1 288土坑 完掘状況(南から)



2 288土坑 1~3層除去後状況(南から)



3 288土坑 遺物出土状況(南西から)



4 288土坑 土層断面(南から)



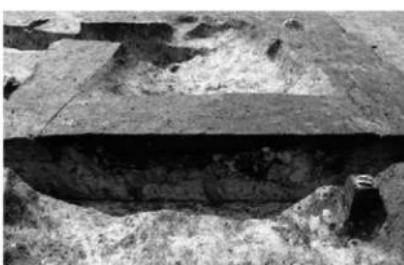
5 289土坑 完掘状況(東から)



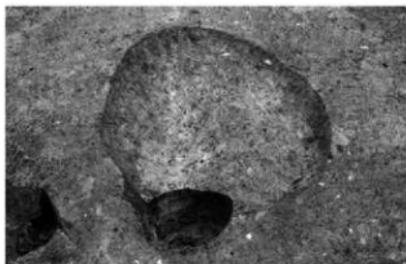
6 289土坑 黒色土除去後(東から)



7 289土坑 遺物出土状況(東から)



8 289土坑 土層断面(東から)



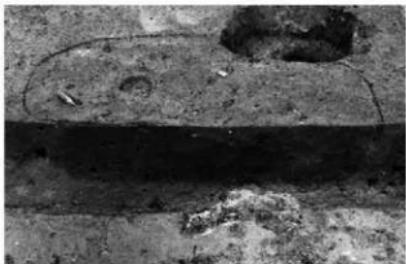
1 1020土坑 完掘状況(南から)



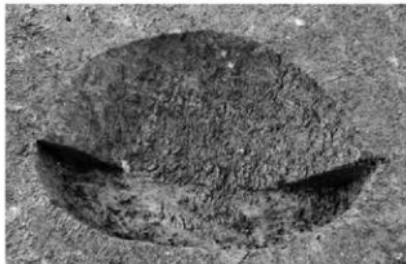
2 1020土坑 土層断面(南から)



3 1003土坑 遺物(Po181・182他)出土状況(北から)



4 1003土坑 検出状況(北から)



5 1016土坑 完掘状況(南東から)



6 2087土坑 遺物(Po187)出土状況(南から)



7 1028土坑 完掘状況(南から)



8 1028土坑 検出状況(南から)



1 1004土坑 完掘状況(南から)



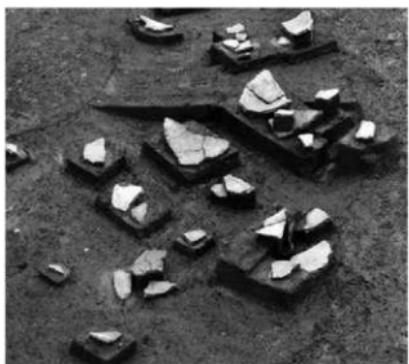
2 1004土坑 土層断面(南から)



3 1004土坑 検出状況(南から)



4 1004土坑 遺物出土状況(南から)



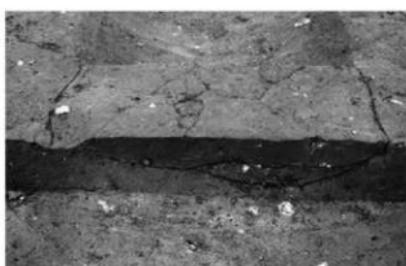
5 1004土坑 遺物出土状況(北から)



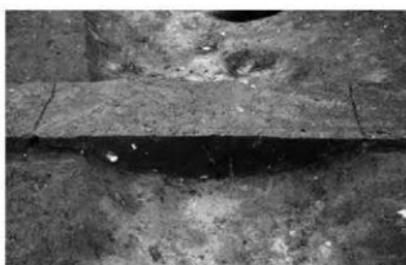
6 1004土坑 遺物出土状況(南から)



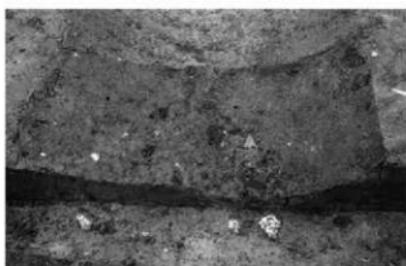
1 250溝 完掘状況(南西から)



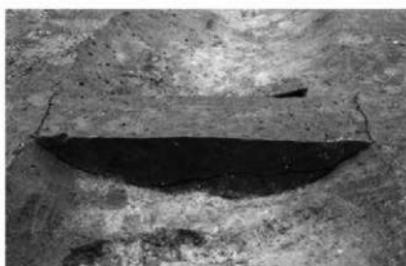
2 250溝 土層断面(A-A'断面)(南西から)



3 250溝 土層断面(B-B'断面)(南西から)



4 250溝 遺物(S4)出土状況(南西から)



5 250溝 土層断面(C-C'断面)(南西から)



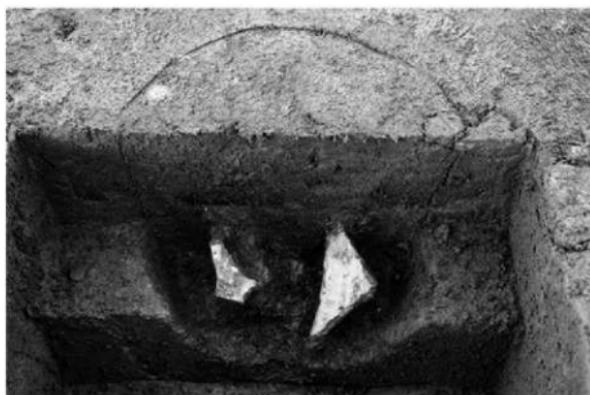
6 250溝 遺物(S4)出土状況アップ(南西から)



1 南西部(北側) 第5面完掘状況(西から)



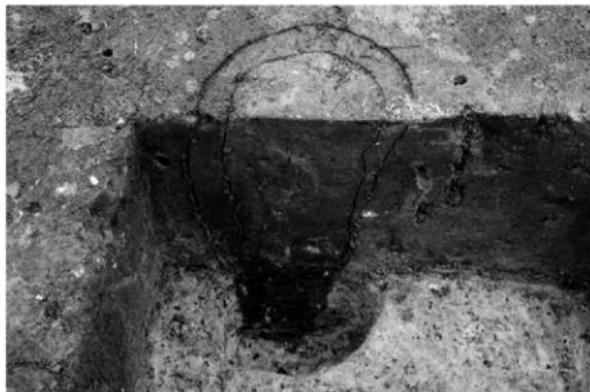
2 南西部(北端) 第5面完掘状況(西から)



1 1010ピット
遺物(Po189)
出土状況(南から)



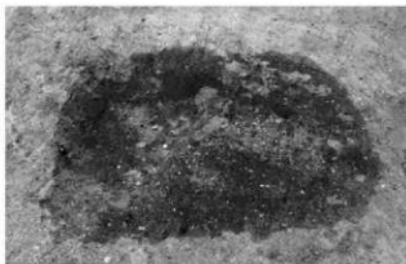
2 1010ピット
遺物出土状況
(南から)



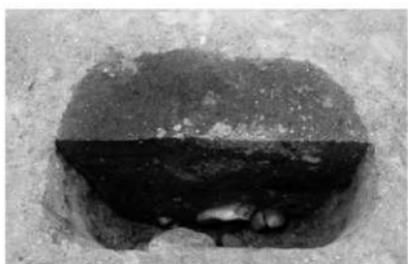
3 1031ピット
土層断面
(南から)



1 4土坑 完掘状況(南東から)



2 4土坑 検出状況(南東から)



3 4土坑 土層断面(南東から)



4 4土坑 碓出土状況(南東から)



5 600土坑 完掘状況(南東から)



6 600土坑 土層断面(南東から)



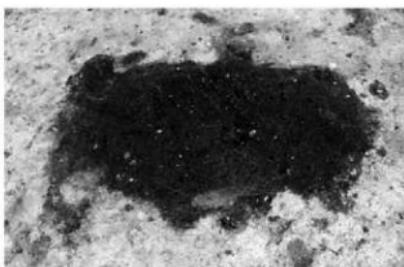
7 600土坑 碓出土状況(南東から)



8 600土坑 底面ピット断ち割り状況(南東から)



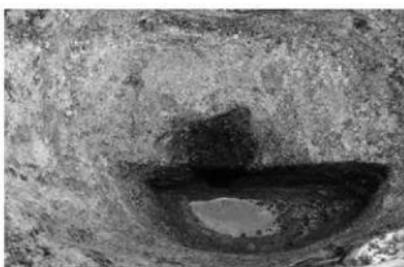
1 210土坑 完掘状況(南東から)



2 210土坑 検出状況(南東から)



3 210土坑 土層断面(南東から)



4 210土坑 底面ピット土層断面(南東から)



5 631土坑 完掘状況(南東から)



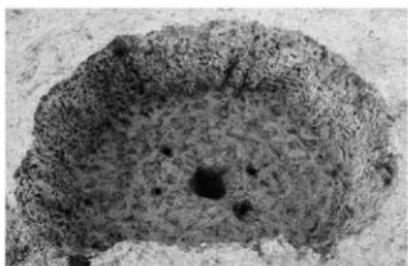
6 631土坑 断ち割り状況(東から)



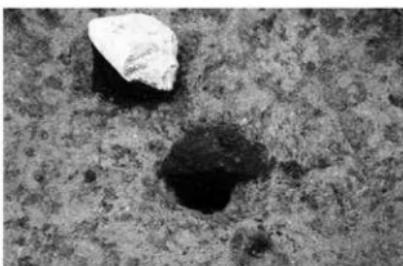
7 631土坑 底面ピット検出状況(南東から)



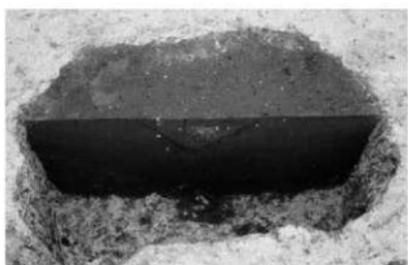
8 631土坑 底面ピット断ち割り状況(南東から)



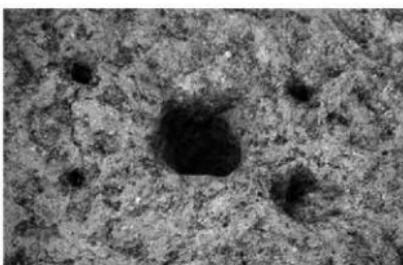
1 1027土坑 完掘状況(南東から)



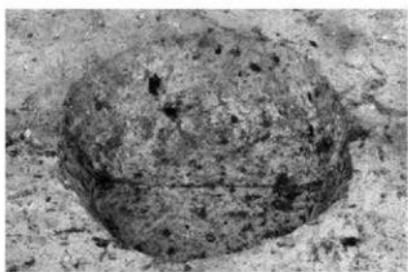
2 1027土坑 底面構造検出状況(南東から)



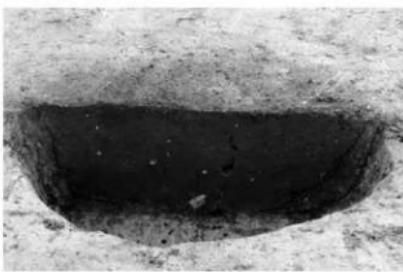
3 1027土坑 土層断面(南東から)



4 1027土坑 底面構造完掘状況(南東から)



5 1043土坑 完掘状況(南東から)



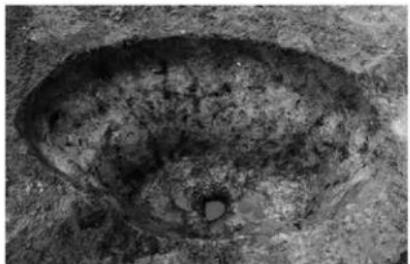
6 1043土坑 土層断面(南東から)



7 1050土坑 完掘状況(南東から)



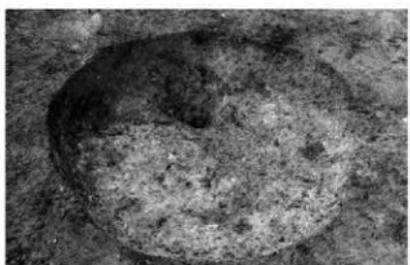
8 1050土坑 土層断面(南東から)



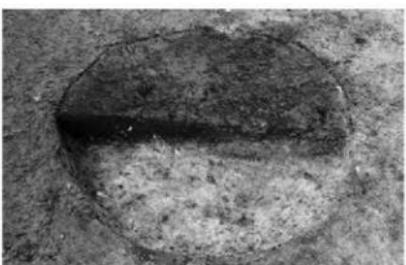
1 1076土坑 完掘状況(南東から)



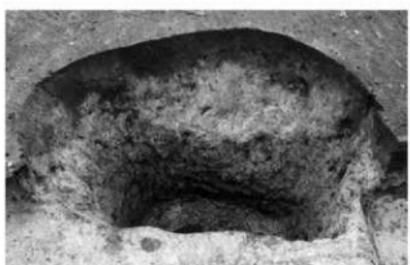
2 1076土坑 土層断面(南東から)



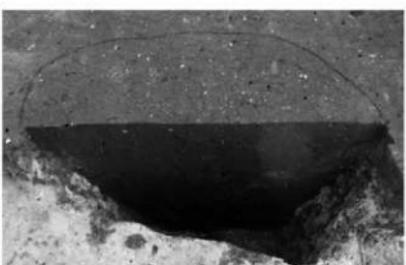
3 1077土坑 完掘状況(南東から)



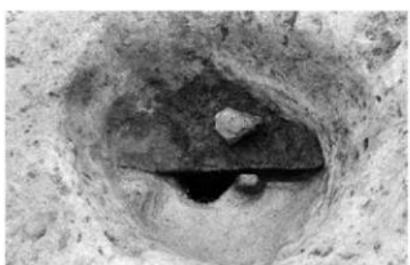
4 1077土坑 土層断面(南東から)



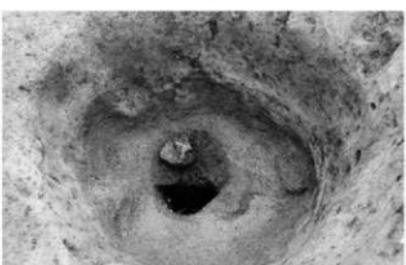
5 2016土坑 完掘状況(北西から)



6 2016土坑 土層断面(北西から)



7 2079土坑 土層断面(西から)

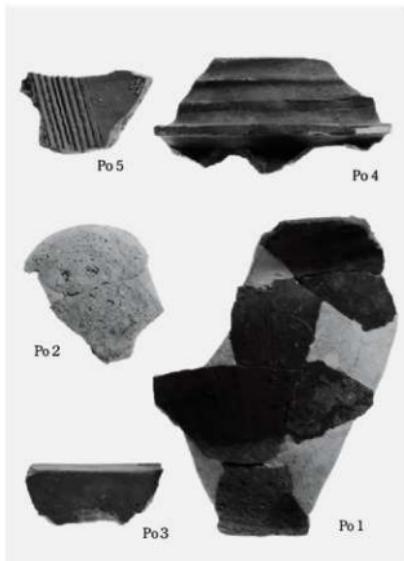


8 2079土坑 磁出土状況(西から)

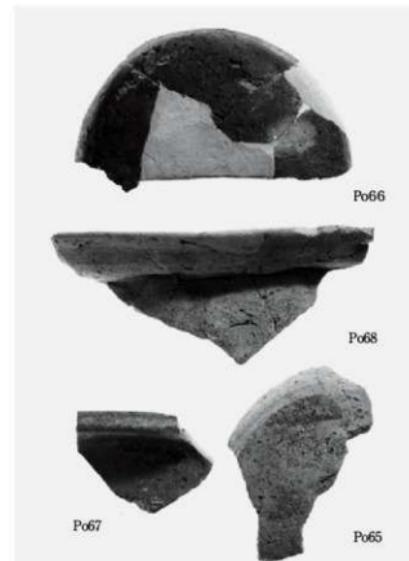
図版 62

山ノ下遺跡

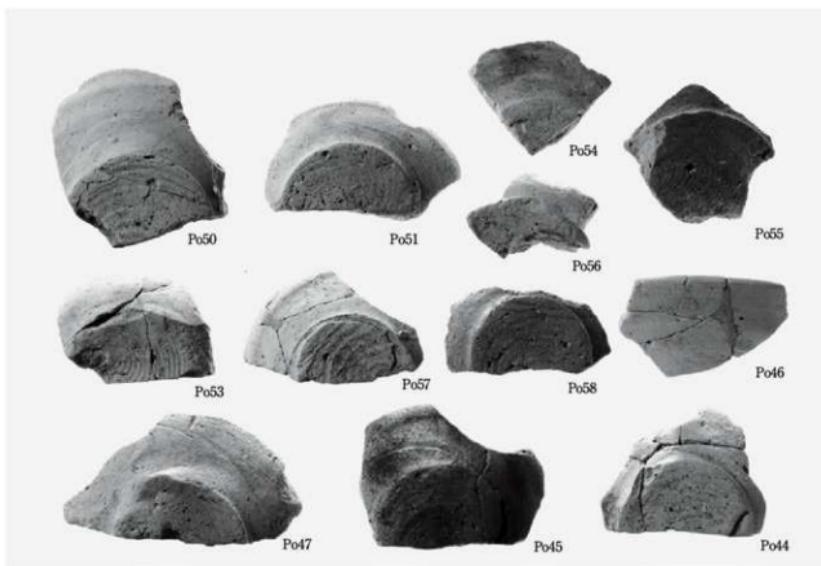
出土遺物



1 1・2田、645満出土土器



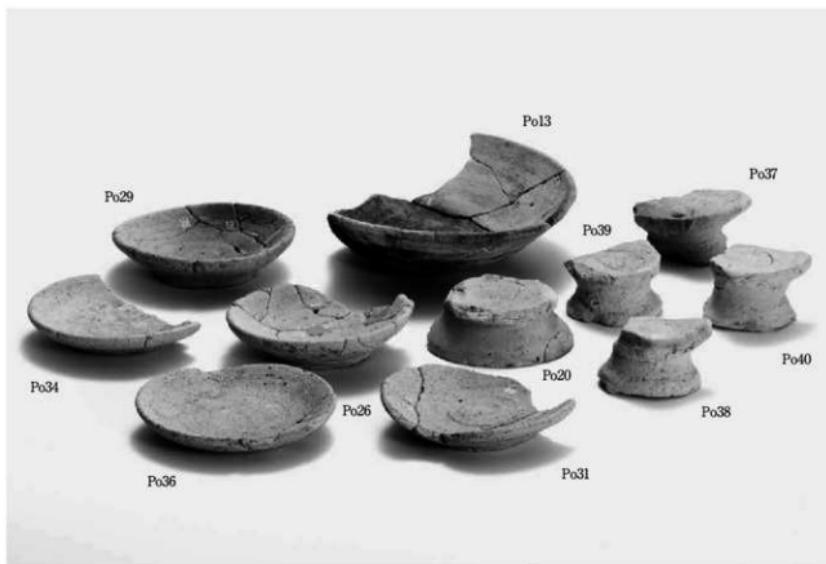
2 5満、7田出土土器



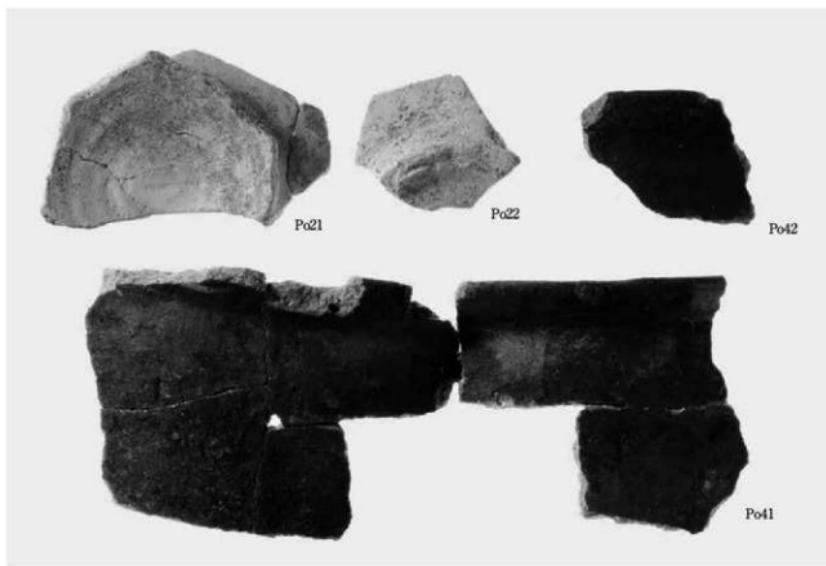
3 第2面遺構出土土器(1)

山ノ下遺跡

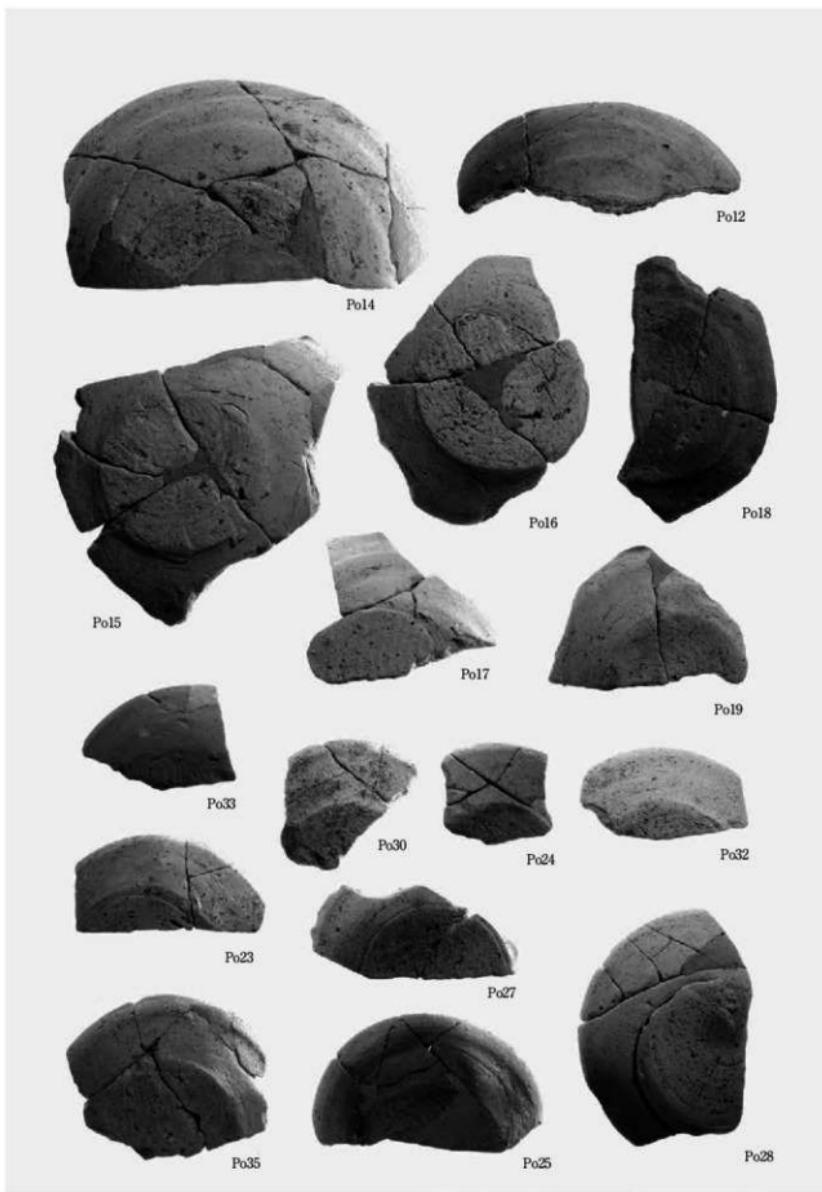
出土遺物



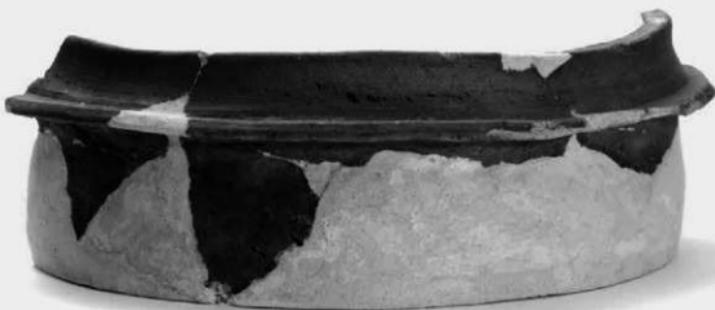
1 挖立柱建物12出土土器(1)



2 挖立柱建物12出土土器(2)



掘立柱建物12出土土器(3)



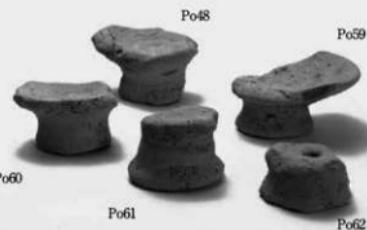
Po69

1 7田出土土器



Po52

2 682ピット出土土器



Po60

Po61

Po62

Po48

Po59

Po198

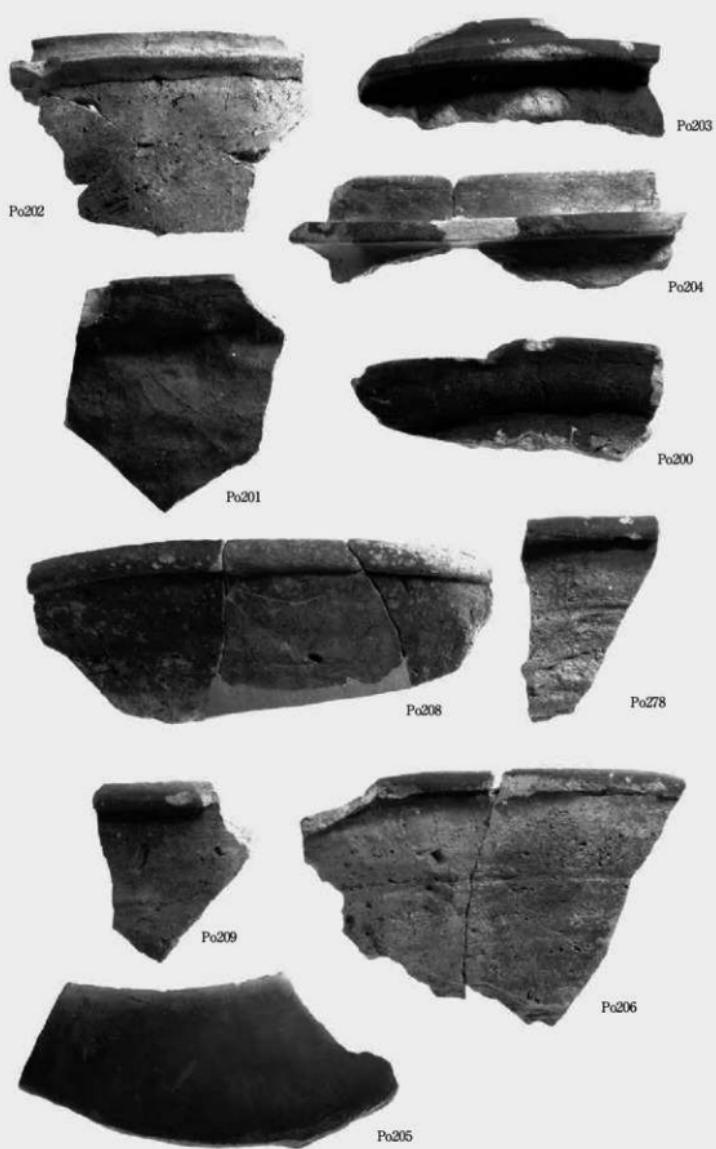
Po217

Po190

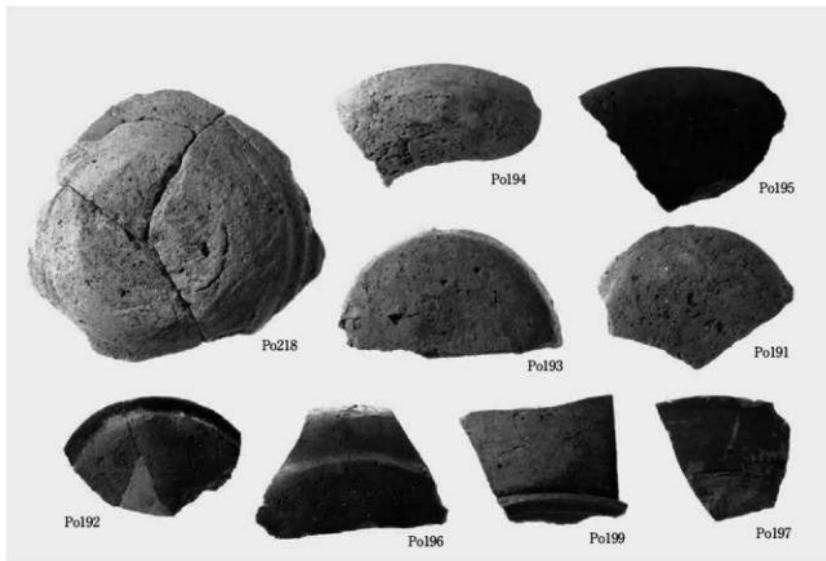


4 III・III-1・III-2層出土土器

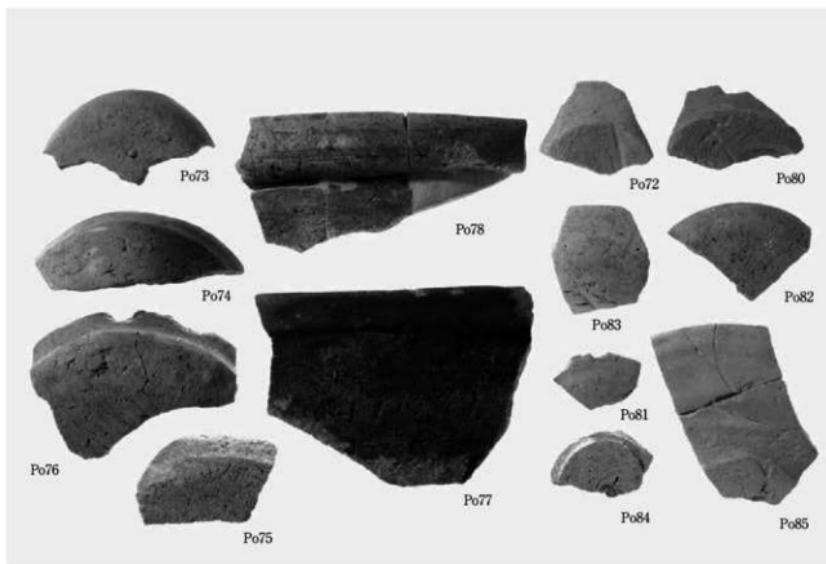
3 第2面遺構出土土器(2)



III層出土土器



1 III・III-2層出土土器



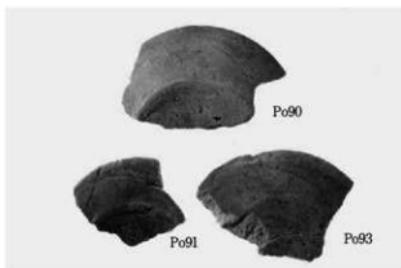
2 第3面遺構出土土器

山ノ下遺跡

出土遺物



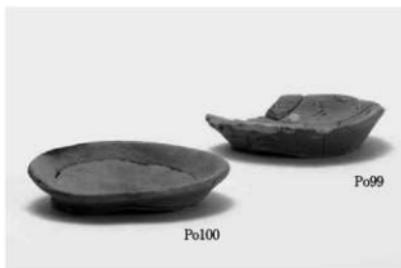
1 挖立柱建物6出土土器(1)



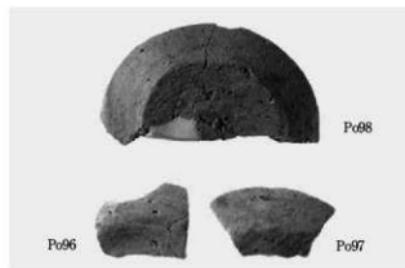
2 挖立柱建物6出土土器(2)



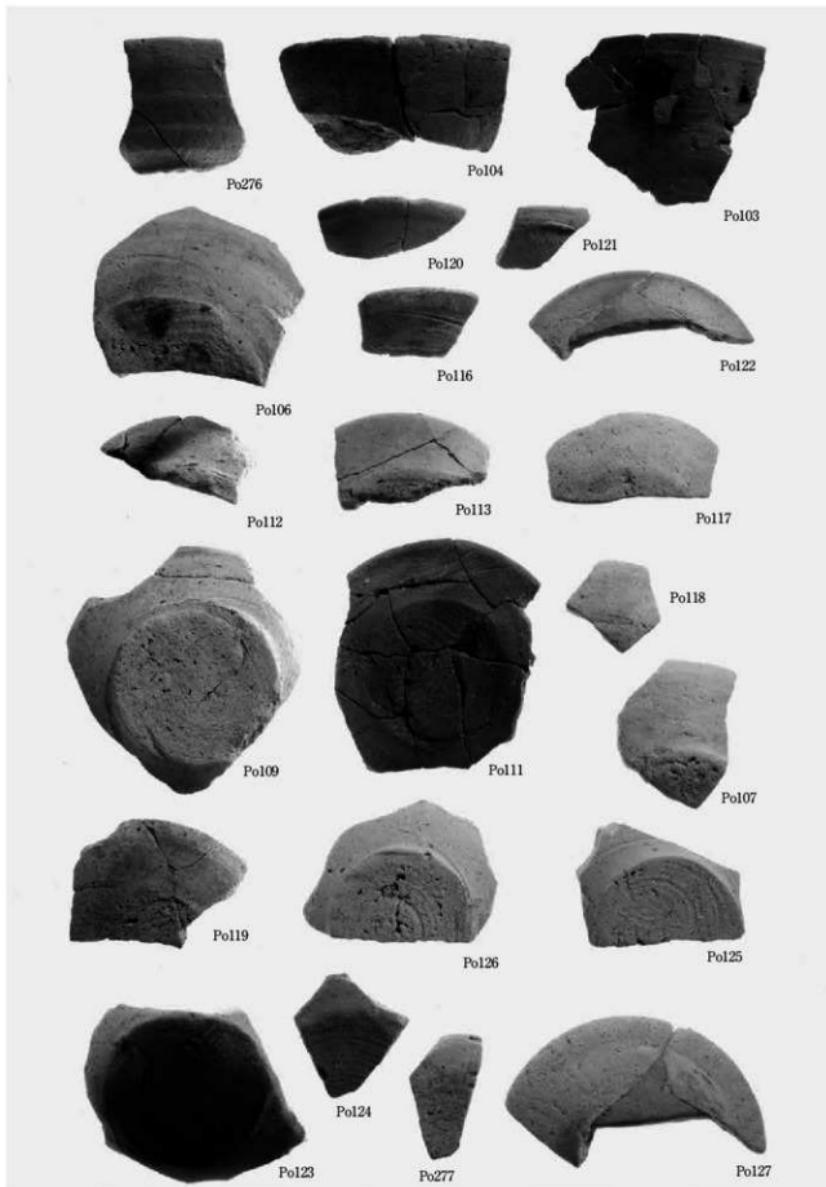
3 挖立柱建物9出土土器



4 挖立柱建物11出土土器(1)



5 挖立柱建物11出土土器(2)



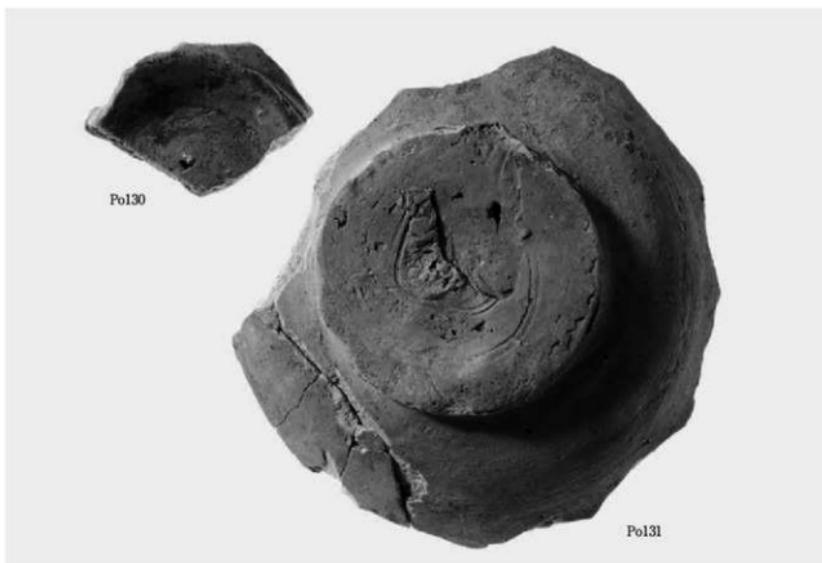
掘立柱建物13出土土器(1)

山ノ下遺跡

出土遺物



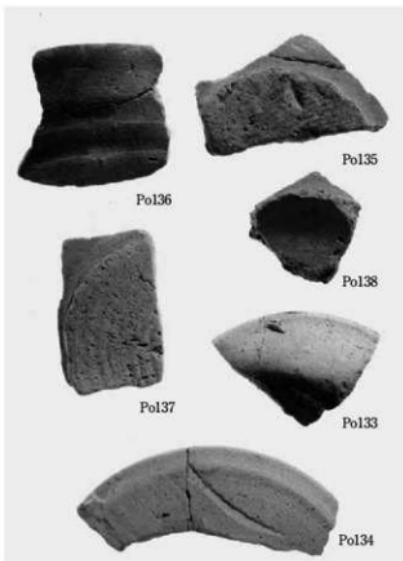
1 挖立柱建物13出土土器(2)



2 挖立柱建物14・15出土土器



1 挖立柱建物17出土土器(1)



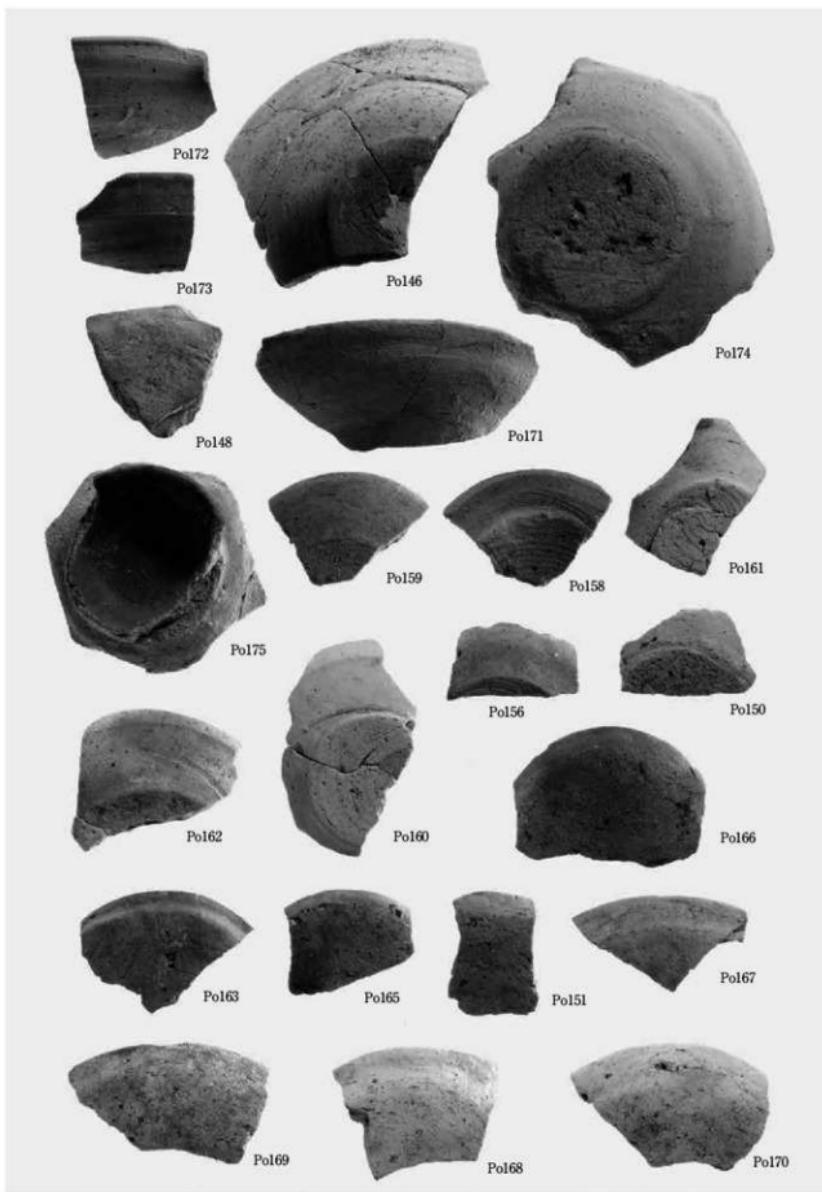
2 挖立柱建物17出土土器(2)



3 第4面遺構出土土器(1)

図版 72

山ノ下遺跡
出土遺物



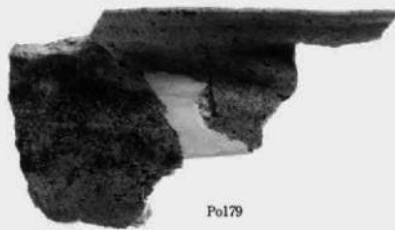
第4面遺構出土土器(2)

山ノ下遺跡
出土遺物



Po152

Po178



Po179



Po154

Po153



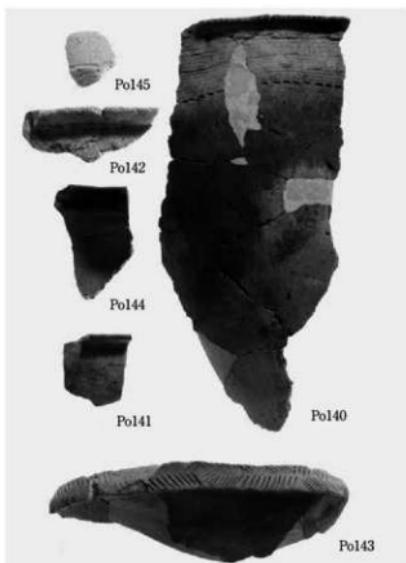
Po155

第4面遺構出土土器(3)

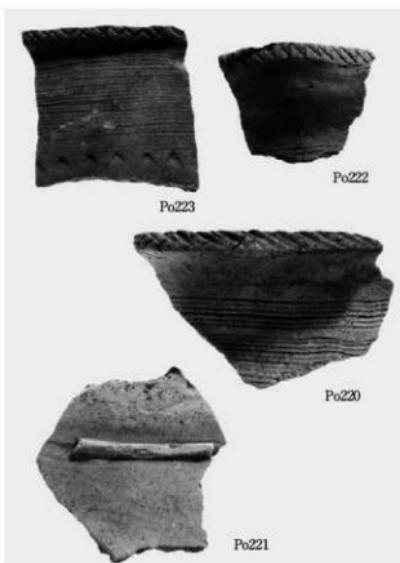
図版 74

山ノ下遺跡

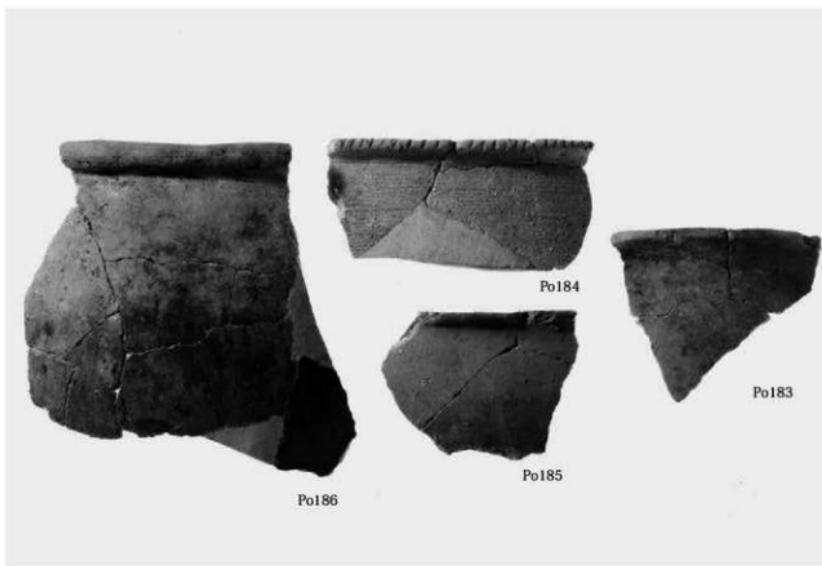
出土遺物



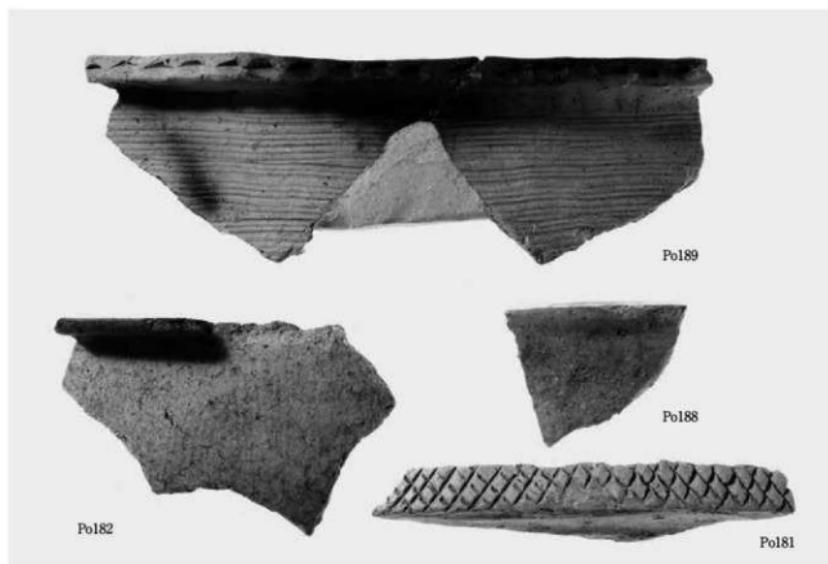
1 914・947土器溝まり出土土器



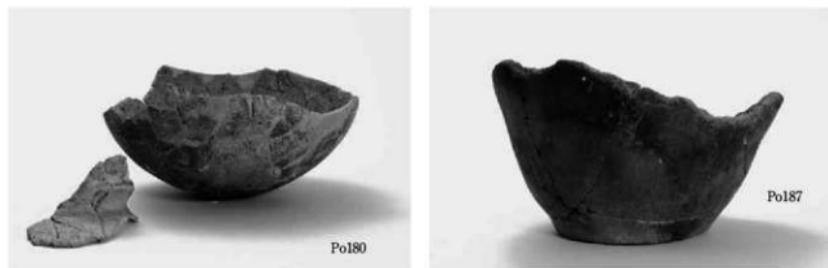
2 IV層出土土器



3 1004土坑出土土器

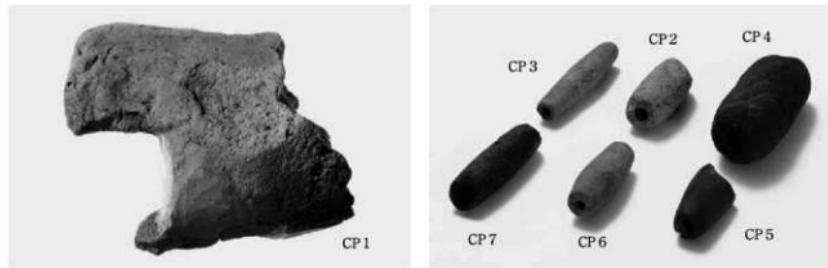


1 1003土坑、250溝、1010ピット出土土器

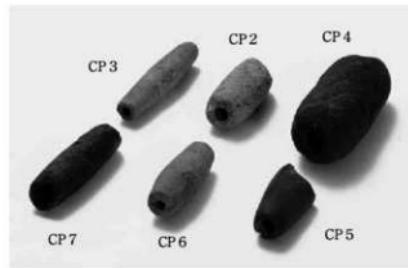


2 288土坑出土土器

3 2087土坑出土土器



4 692ピット出土縦羽口

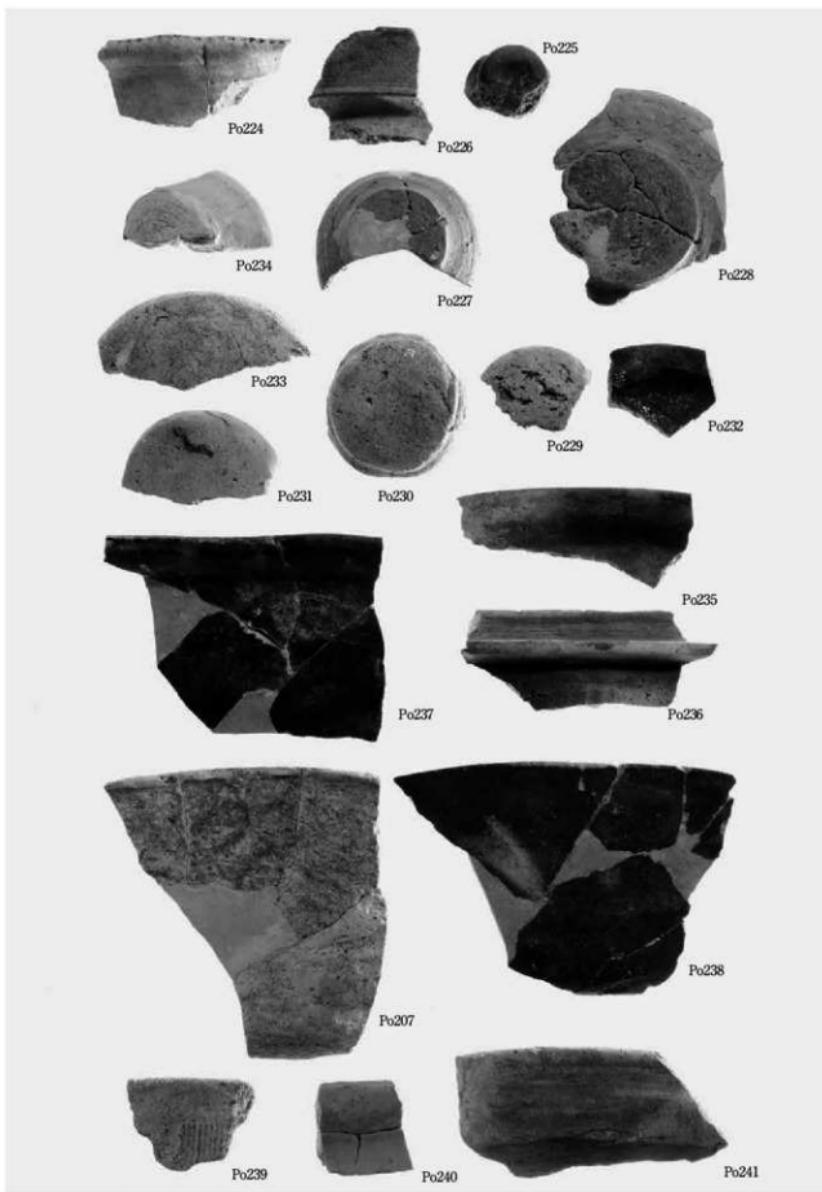


5 調査区内出土土錘

図版 76

山ノ下遺跡

出土遺物



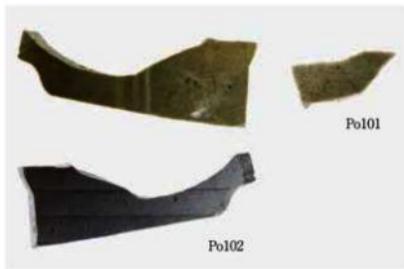
調査区内出土土器



調査区内出土青磁



1 調査区内出土青磁(実測図非掲載)



2 挖立柱建物13出土白磁・青磁



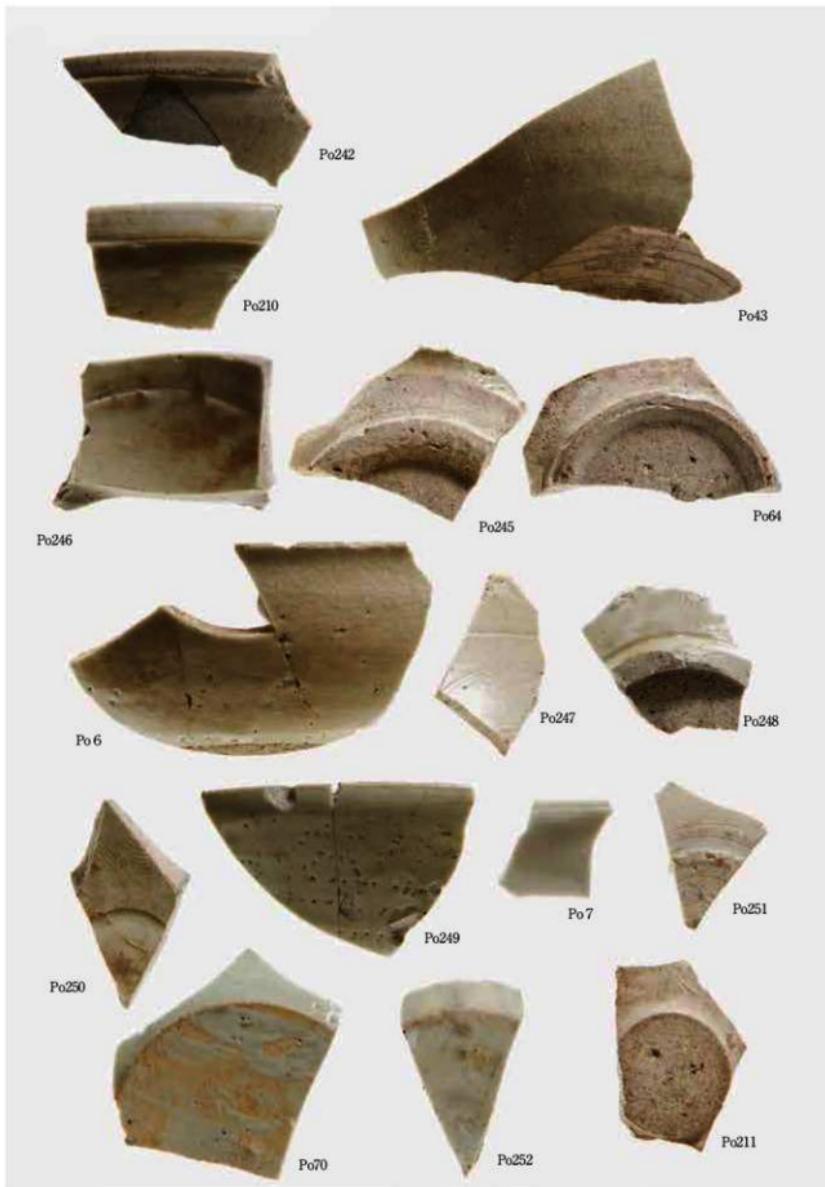
3 調査区内出土白磁(1)



4 667溝出土白磁



5 調査区内出土白磁(2)



調査区内出土白磁(3)

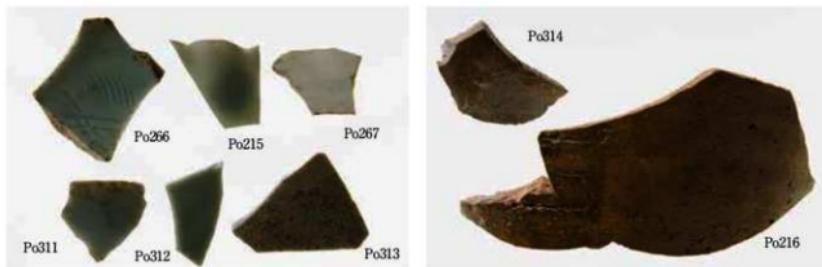
図版 80

山ノ下遺跡

出土遺物



1 調査区内出土白磁(実測図非掲載)



2 調査区内出土青白磁・白磁

3 調査区内出土中国陶器



4 678ピット出土不明陶器



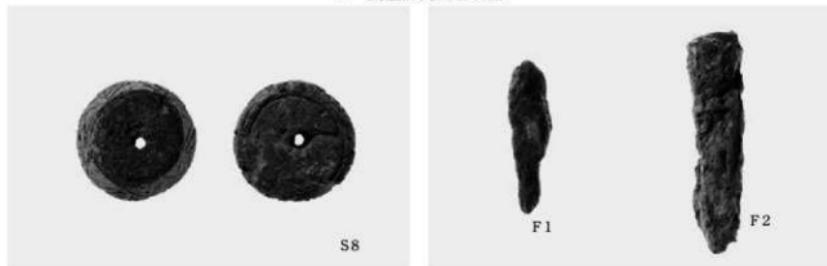
1 調査区内出土国産陶器・輸入磁器



2 調査区内出土近世陶磁器



1 調査区内出土石器



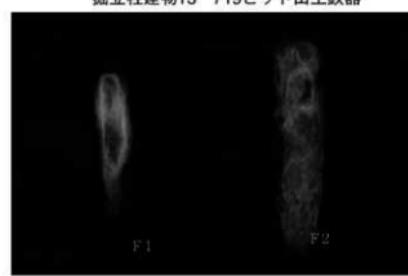
2 調査区内出土紡錘車(左：上面、右：下面)



3 調査区内出土紡錘車(側面)



4 掘立柱建物12 666溝・
掘立柱建物13 719ピット出土鉄器



5 掘立柱建物12 666溝・
掘立柱建物13 719ピット出土鉄器X線写真

平ノ前遺跡

A
1区



1 A 1区 完掘状況(東から)



2 A 1区 中央ベルト土層断面(西から)

平ノ前遺跡

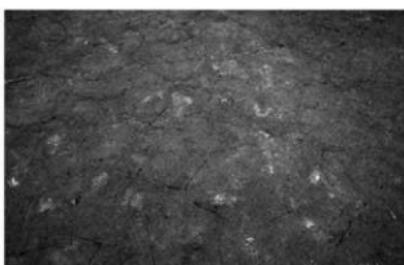
A
1
区



1 A 1 区 中央ベルト土層断面(東から)



2 A 1 区 中央ベルト土層断面(南から)



3 A 1 区 偶蹄目足跡検出状況(南から)



4 A 1 区 遺物出土状況(北から)



5 A 1 区 遺物(Po 5)出土状況(南から)

平ノ前遺跡

P 4 区



1 P 4区 遺構検出状況(北東から)



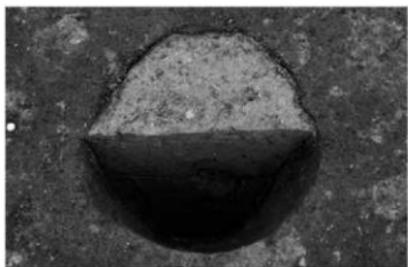
2 P 4区 挖立柱建物 1 完掘状況(北から)

平ノ前遺跡

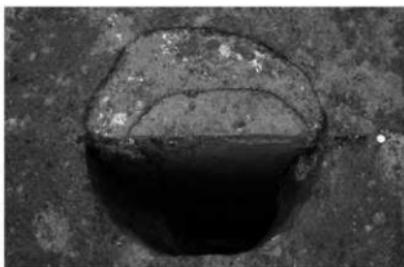
P
4
区



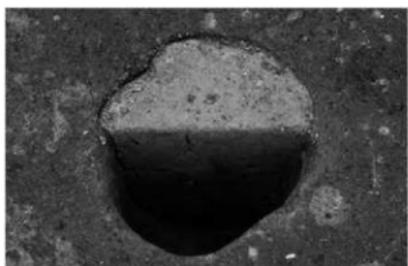
1 P 4区 掘立柱建物2 完掘状況(北東から)



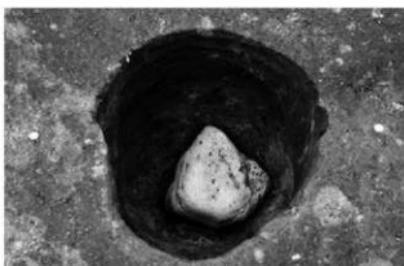
2 P 4区 13ピット 土層断面(南西から)



3 P 4区 14ピット 土層断面(南西から)



4 P 4区 16ピット 土層断面(南西から)



5 P 4区 16ピット 硬盤石出土状況(南西から)

平ノ前遺跡

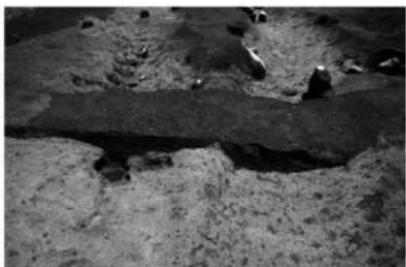
P 4区



1 P 4区 21溝 完掘状況(北東から)



2 P 4区 21溝 遺物出土状況(東から)



3 P 4区 21溝 土層断面(南西から)



4 P 4区 南西壁土層断面(北東から)



5 P 4区 北東壁土層断面(西から)

平ノ前遺跡

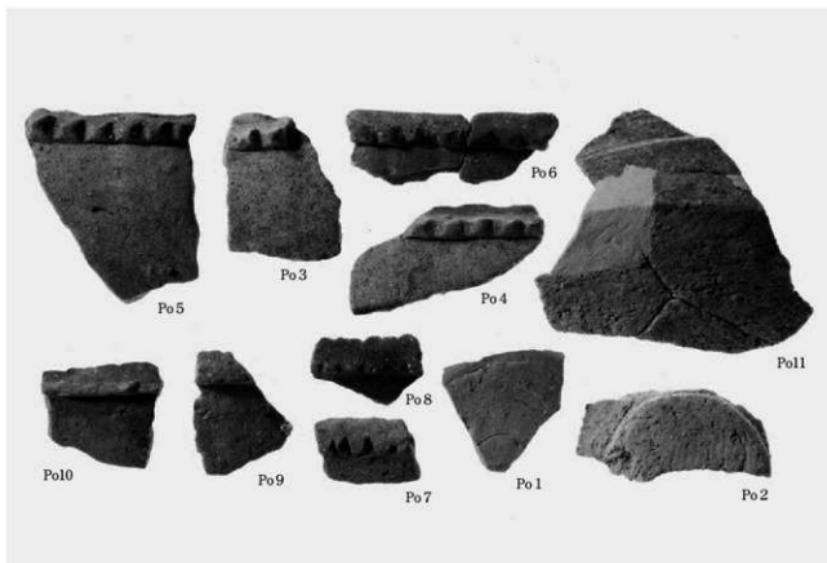
P 4 区



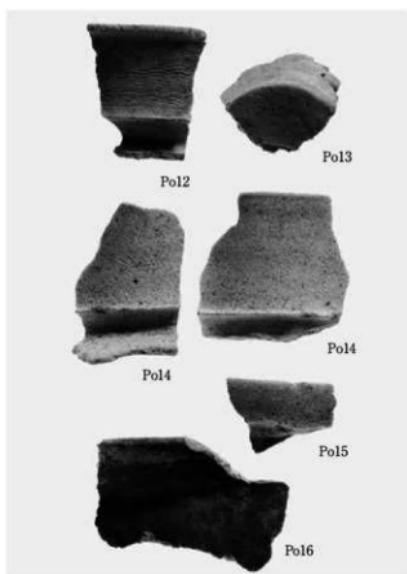
1 P 4区 南西壁土層断面(南から)



2 P 4区 完掘状況(北東から)



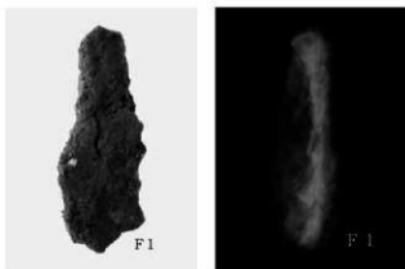
1 A 1区 出土土器



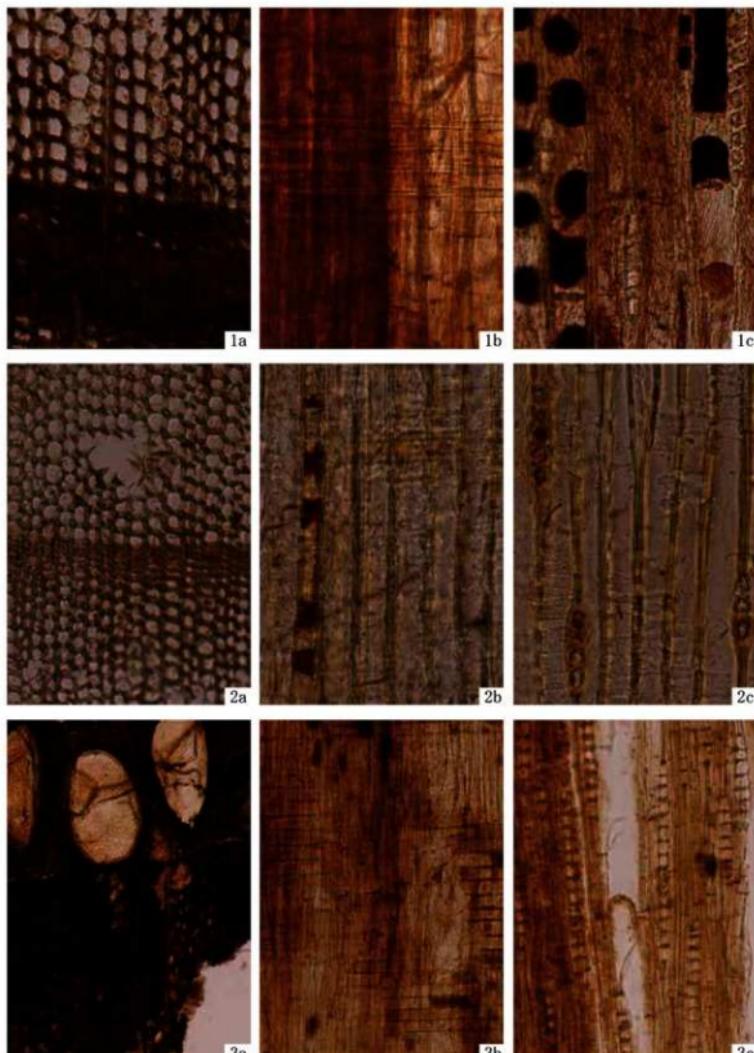
2 P 4区 出土土器



3 A1区 1流路、P4区 21溝出土石器



4 P4区 21溝出土鉄器(左)・X線写真(右)



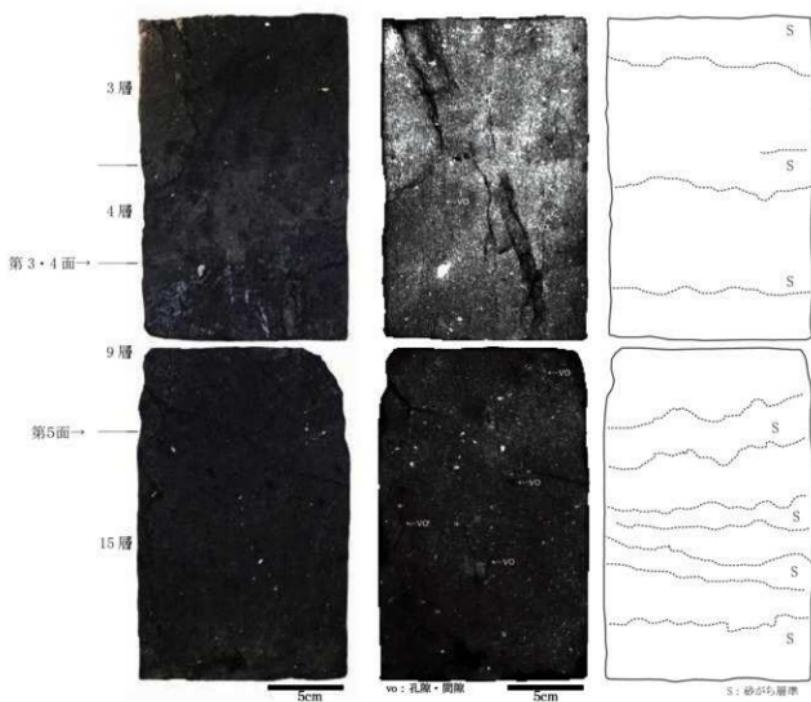
1. スギ(掘立柱建物13;725ピット取上No.933)

2. ヒノキ科(848ピット;取上No.1788)

3. クリ(118ピット;取上No.445)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

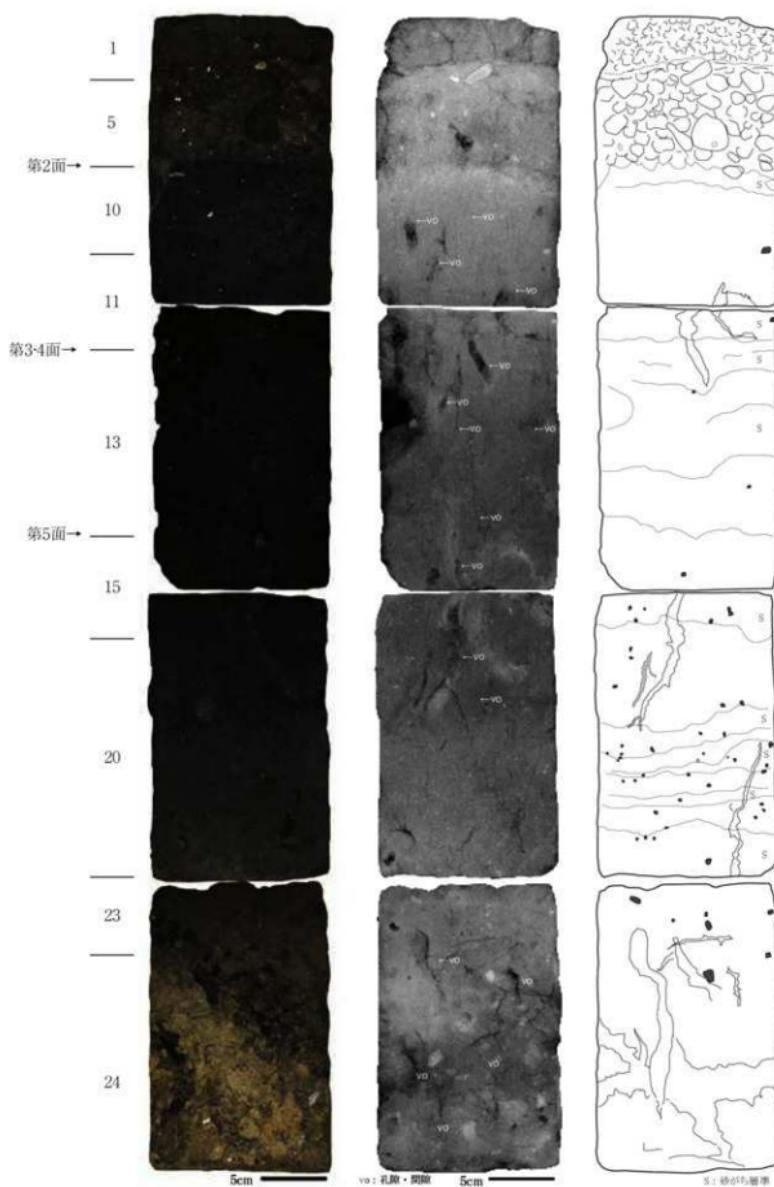
— 100 μ m: 3a
 — 100 μ m: 1-2a, 3b, c
 — 100 μ m: 1-2b, c



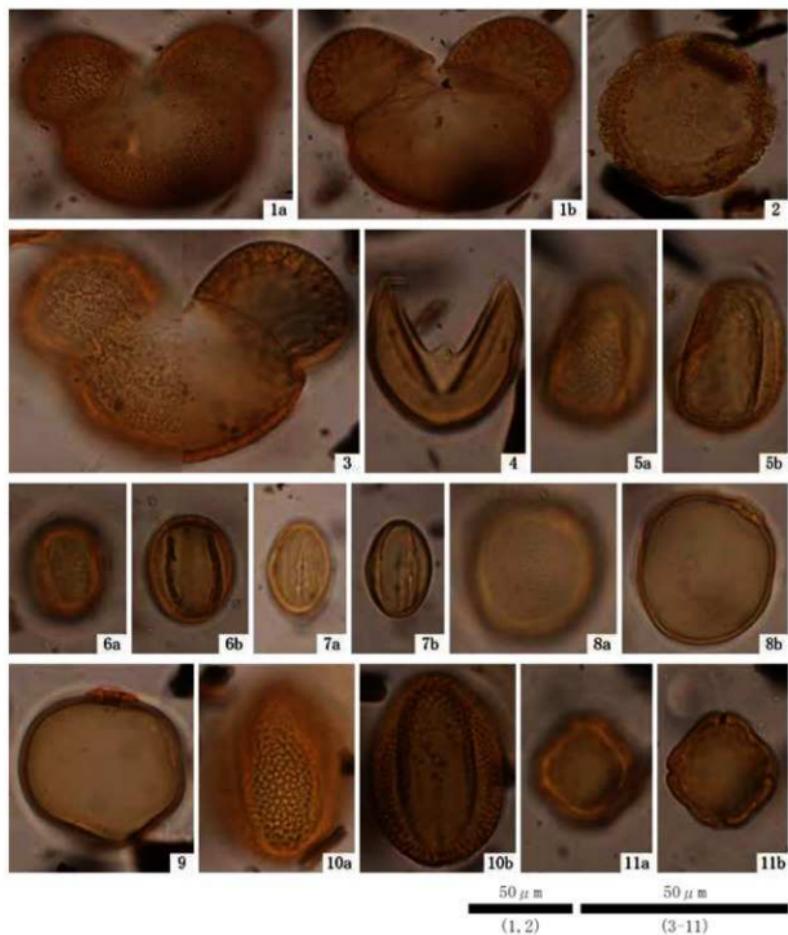
山ノ下遺跡 北東部地点の試料・X線写真

図版 92

山ノ下遺跡
自然科学分析



山ノ下遺跡 南西部地点の試料・X線写真



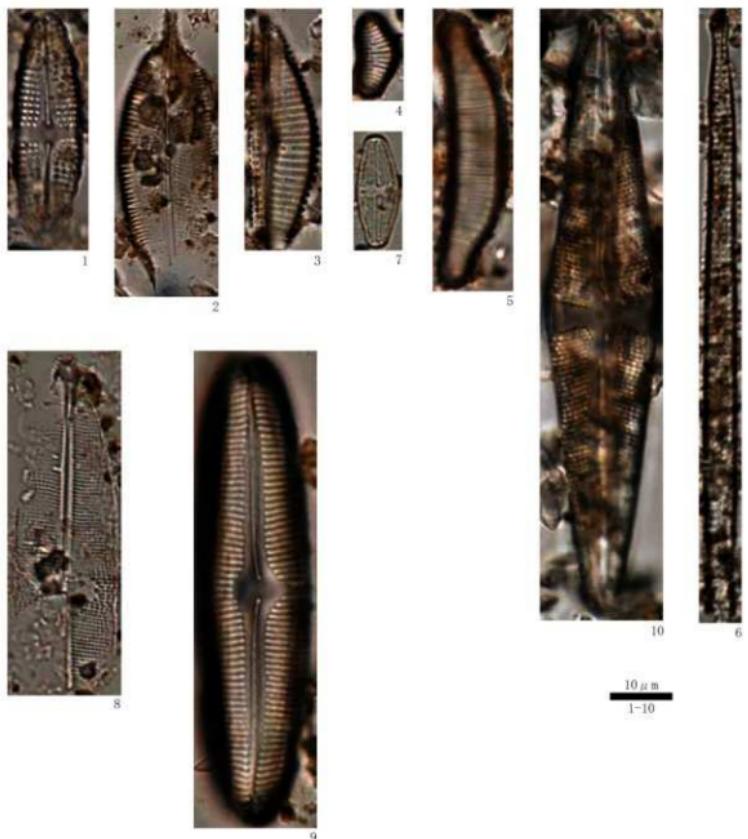
1. モミ属(北東部9層)
 3. マツ属(北東部9層)
 5. コナラ亜属(北東部9層)
 7. シイ属(北東部9層)
 9. イネ属(北東部9層)
 11. アリノトウグサ属(北東部9層)

2. ツガ属(北東部9層)
 4. スギ属(北東部9層)
 6. アカガシ亜属(北東部9層)
 8. 他のイネ科(北東部9層)
 10. ソバ属(南西部13層)

山ノ下遺跡 花粉化石顕微鏡写真

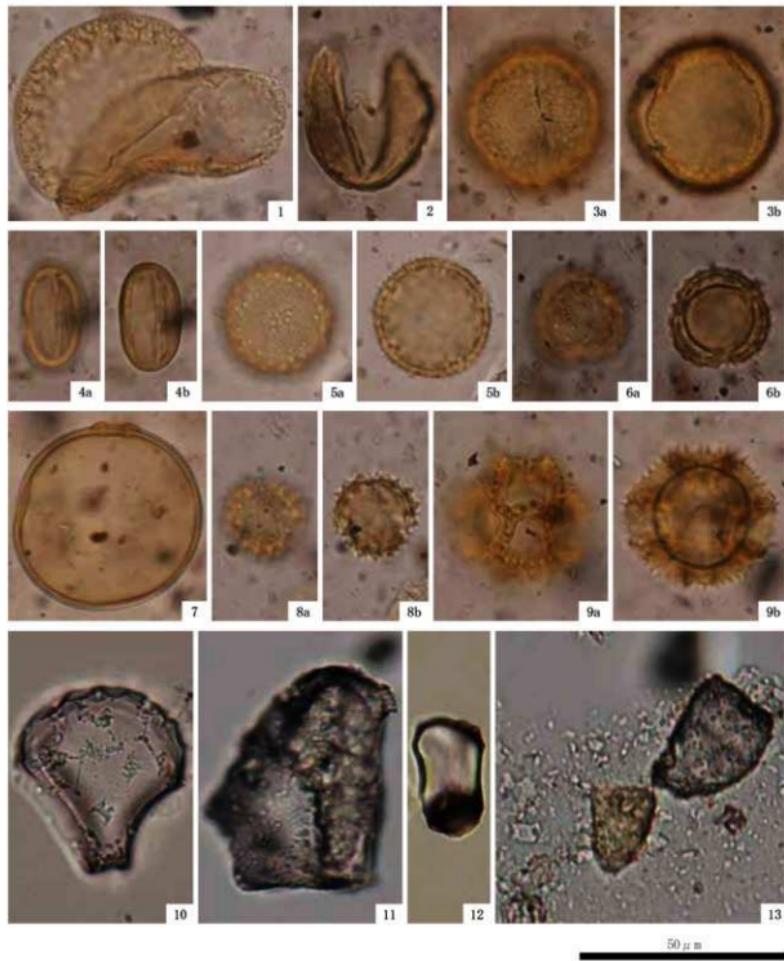


1. イネ (北東部4層)
 4. ヨシ属 (北東部15層)
 7. ウシクサ族A (北東部3層)
 10. ネザサ節型 (北東部3層)
 13. 表皮毛起源 (南西部10層)
 2. イネ (北東部3層)
 5. キビ族型 (南西部10層)
 8. メダケ節型 (南西部13層)
 11. チマキザサ節型 (南西部13層)
 14. 棒状硅酸体 (北東部4層)
 3. イネ: 側面 (南西部10層)
 6. ススキ属型 (北東部3層)
 9. ネザサ節型 (北東部3層)
 12. ミヤコザサ節型 (北東部9層)
 15. 樹木: その他 (南西部13層)



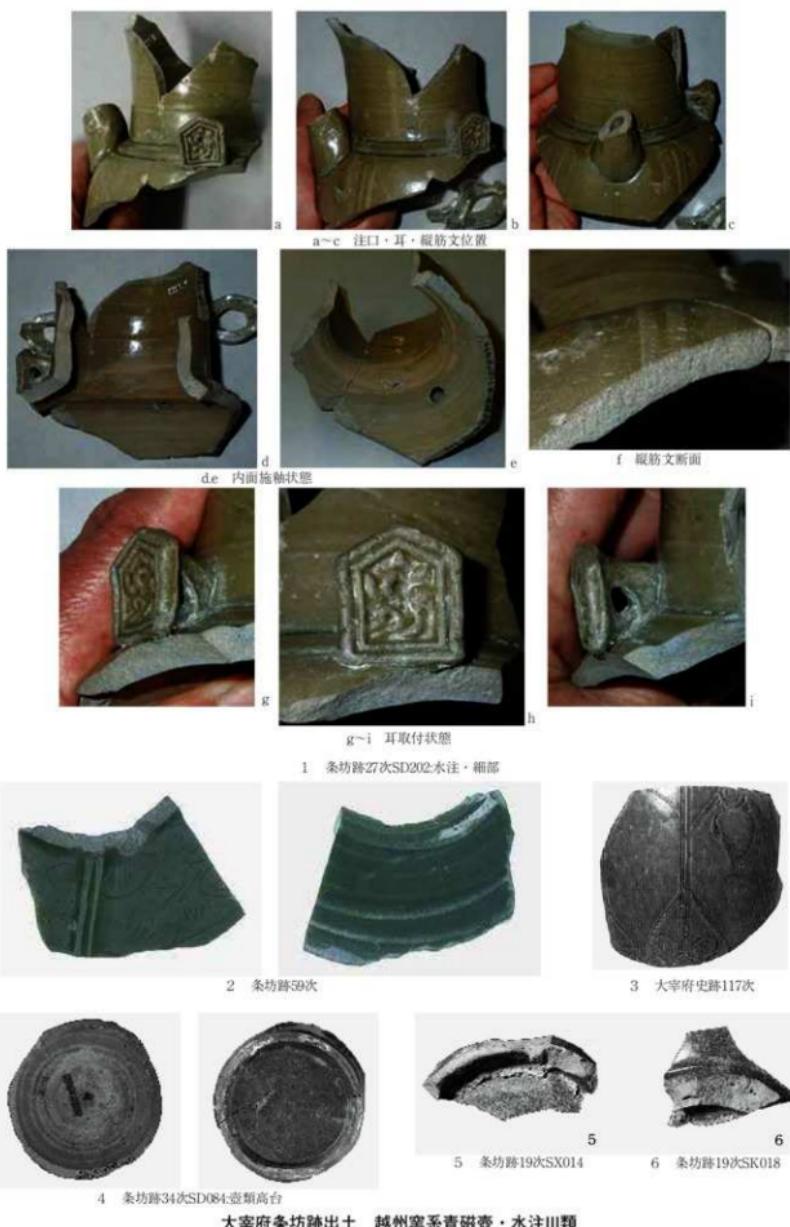
1. *Achnanthes cremlata* Grunow (A1区 中央ベルト 1層)
2. *Cymbella cuspidata* Kuetzing (A1区 中央ベルト 1層)
3. *Encyonema silesiacum* (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann (A1区 中央ベルト 2層)
4. *Eunotia exigua* (Breb.) Rabenhorst (A1区 中央ベルト 2層)
5. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (A1区 中央ベルト 2層)
6. *Fragilaria ulna* (Nitzsch) Lange-Bertalot (A1区 中央ベルト 2層)
7. *Luticola mutica* (Kuetz.) D.G.Mann (A1区 中央ベルト 6層)
8. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer (A1区 中央ベルト 1層)
9. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (A1区 中央ベルト 1層)
10. *Stauroneis acuta* W.Smith (A1区 中央ベルト 2層)

平ノ前遺跡 珪藻化石顕微鏡写真



1. マツ属(A1区 中央ベルト 1層)
 2. シギ属(A1区 中央ベルト 1層)
 3. コナラ亜属(A1区 中央ベルト 1層)
 4. シイ属(A1区 中央ベルト 1層)
 5. オモダカ属(A1区 中央ベルト 1層)
 6. オナモミ属(A1区 中央ベルト 1層)
 7. イネ属(A1区 中央ベルト 1層)
 8. キク亜科(A1区 中央ベルト 1層)
 9. タンボボ亞科(A1区 中央ベルト 1層)
 10. イネ属機動細胞珪酸体(A1区 中央ベルト 1層)
 11. クマザサ属機動細胞珪酸体(A1区 中央ベルト 1層)
 12. クマザサ属短細胞珪酸体(A1区 中央ベルト 2層)
 13. 植物珪酸体の分析プレパラート内の状況(A1区 中央ベルト 8層)

平ノ前遺跡 花粉化石・植物珪酸体顕微鏡写真





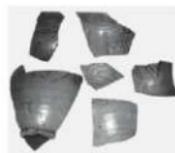
博多遺跡群出土 越州窯系青磁壺・水注III類



1 鹿児島県喜界町



2 鴻臚館SD1045



3 鴻臚館SK87



6 大阪市立東洋陶磁美術館蔵



4 個人蔵



5 大阪市立東洋陶磁美術館蔵



7 上海博物館蔵



越州窯系青磁壺・水注III類 龍泉窯青磁



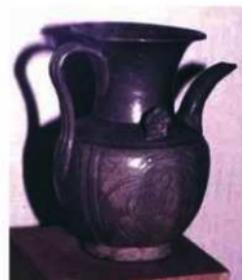
8 上海博物館蔵



1. 越州青白釉水注
绍兴市博物馆



2. 越州青白釉水注
绍兴市博物馆



3. 越州青白釉水注
绍兴市博物馆



4. 越窑青白釉水注
慈溪市博物馆



5. 越窑青白釉水注
鄞县窑



6. 越窑青白釉水注
宁波和義路出土 天一閣博物馆



7. 越窑青白釉水注
宁波和義路出土 天一閣博物馆



8. 越窑青白釉水注
绍兴市博物馆 上灶官山出土



9. 越窑青白釉水注
上虞窑



10. 越窑青白釉水注
上虞窑



11. 越窑青白釉水注
上虞窑



12. 越窑青白釉水注
越窑

5・9～12 出光美术馆

越州窑系青磁壺・水注(中国)



1 英国デイヴィッド・コレクション
元豐3(1080)年刻銘



2 浜松市美術館(今井「青磁」)



3 東京国立博物館(今井「青磁」)



4 龍泉市塔石郷秋坂村墓出土(元豐元年: 1078年)龍泉博物館藏



5 龍泉大窯(龜井)



4・6~8 朱伯謙「龍泉窯青瓷」



6 龍泉市茶農郷墺頭村古墓出土



7 慶元縣竹口前収集
慶元縣文物管理委員會藏



8 龍泉市宏山郷山里村出土
龍泉博物館藏

北宋龍泉窯青磁および閩連窯壺・水注



1 龍泉市茶農鄉塘頭村古墓出土
龍泉博物館藏



2 襄水市雅溪鄉金竹村出土
襄水市博物館藏



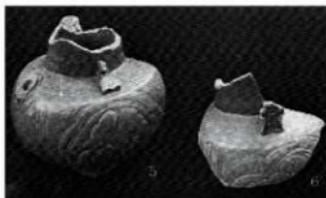
3 龍泉博物館藏



1～3 朱伯謙「龍泉窯青瓷」



4 上林湖展示館



5・6 慈溪窯



7 慈溪市寺龍口窯



8 上虞市庵寺前窯



9 温州市烏岩廟窯



11 瑞安市上壠窯窯



10 温州市烏岩廟窯



北宋龍泉窯青磁・越州窯系青磁壺・水注



1 温州市西山窯



2 温州市西山窯



3 温州市西山窯



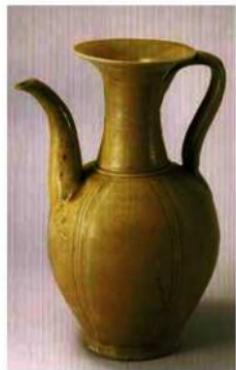
4 温州市西山窯



5 温州市西山窯



6 温州市烏岩窯

7 温州市西郎大橋頭河床下出土
温州博物館藏〔温州古陶〕

越州窑系青磁壺・水注

図版 104

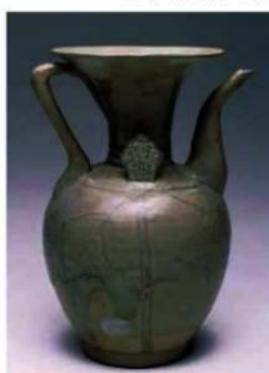
貿易陶磁の類例



1 27-2次SD157・SX163(a復原前)



2 27-2次SD130



1 27-2次SD157・SX163



d



a



b



c



d



e



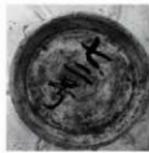
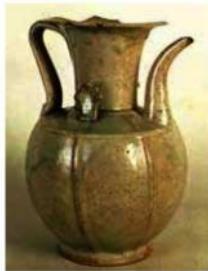
f

3 267次茶色土層出土 a~f細部 未報告

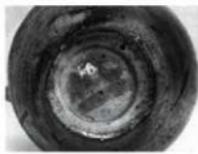
大宰府条坊跡出土 白磁壺・水注II類



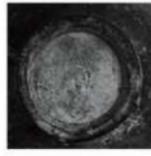
1 富山佐藤美術館所蔵



2 滋賀県大津市南滋賀町字勤学堂出土



3 博多聖福寺出土

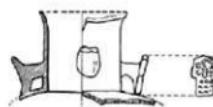
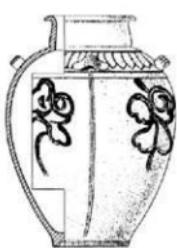


4 (左)山口県光市清山出土

2~4 東京国立博物館編「日本出土の中国陶磁」
白磁・陶器水注



1 广州市西村窑(「广州西村窑」)



4 广州市西村窑(「广州西村窑」)



2 潮州市笔架山窑(「潮州笔架山宋代窑址发掘报告」)



5 广州市西村窑(「广州西村窑」)



3 潮州市笔架山窑(「潮州笔架山宋代窑址发掘报告」)



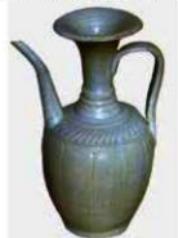
6 潮州市笔架山窑(「广东唐宋窑址出土陶磁」)



7 潮州窑
(A Ceramic Legacy of Asia's Maritime Trade)



8 東南アジア
(A Ceramic Legacy of Asia's Maritime Trade)



9 Johnny Lim Collection,マニラ
(A Ceramic Legacy of Asia's Maritime Trade)

報告書抄録

ふりがな	やまのしたいせき・ひらのまえいせき						
書名	山ノ下遺跡・平ノ前遺跡						
副書名	一般国道313号(倉吉関金道路)の道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	I						
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書						
シリーズ番号	120						
編著者名	牧本哲雄・西川徹・森本倫弘・門脇隆志						
編集機関	公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室						
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地 電話(0857)51-7553						
発行年月日	2018(平成30)年3月15日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やまのしたいせき 山ノ下遺跡	とうりげんくらよし 鳥取県倉吉市	31203 4-343	35°24'18"	133°47'18"	20160601 ～ 20161130	7000m ²	一般国道313号 (倉吉関金道路)の 道路改良工事
ひらのまえいせき 平ノ前遺跡	とうりげんくらよし 鳥取県倉吉市	31203 4-344	AI区 35°24'02" P区 35°24'05"	AI区 133°46'59" P区 133°47'01"	20170523 ～ 20170713	306.38m ² (AI区 154.18m ²) (P区 152.20m ²)	一般国道313号 (倉吉関金道路)の 道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物、特記事項			
山ノ下遺跡	集落	旧石器時代？	-	二次加工剥片			
		縄文時代	土坑				
		弥生時代	土坑	弥生土器、石器			
		古墳時代	土坑	土師器、須恵器、石器			
		古代	掘立柱建物跡 土坑 溝 ビット	土師器、須恵器、 貿易陶磁器(越州窑系Ⅲ類ほか)			
		中世～近世	掘立柱建物跡 土坑 溝 田 ビット	土師器、貿易陶磁器、国産陶磁器、木器			
平ノ前遺跡	集落	縄文時代	-	縄文土器			
		古墳時代	溝	土師器			
		中世	掘立柱建物跡	土師器			

鳥取県教育文化財団調査報告書120
一般国道313号(倉吉開金道路)の道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

鳥取県倉吉市
やまの しまいせき
山ノ下遺跡
ひらの まいりせき
平ノ前遺跡

発行 2018年3月15日
編集 公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室
〒680-8570 鳥取県鳥取市源太12番地
電話(0857)51-7553
発行者 公益財団法人鳥取県教育文化財団
印刷 勝美印刷株式会社